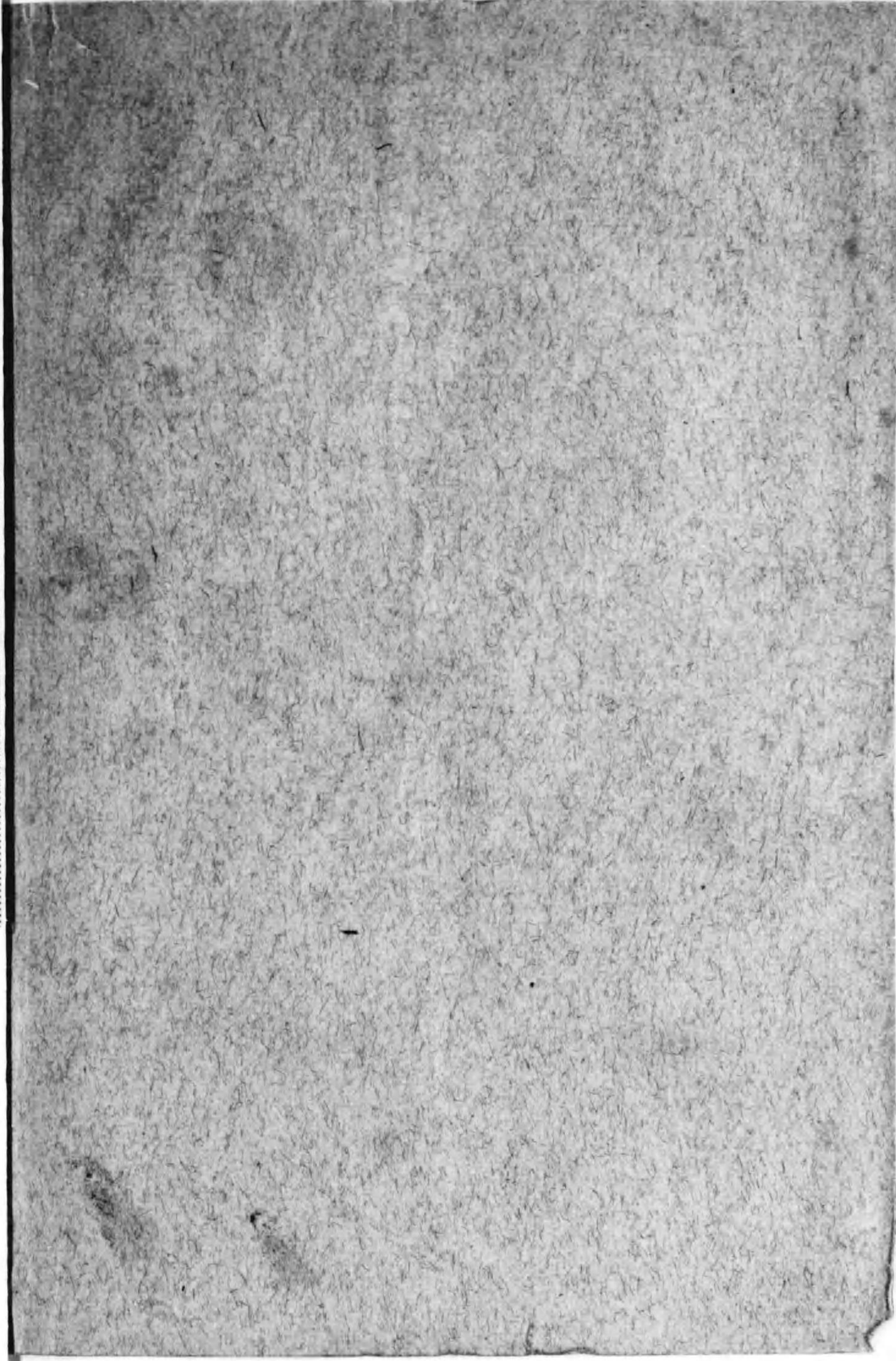


始



はしがき



私が明治学院在職中、歴史を實際に教えて見て手控えを作つて置いたのが大火に焼けたので、其後余暇を以て新に稿を起し大正十五年まで約三十年に亘つて書いたのが本書である。

此間私は震災による帝都荒廢の姿にひどく心を撻たれて奮い起ち、遂に自分らしく世に役立つ事と考へた末、兄弟達の出資を得て、災害直後ヨコモジ社を創め、国字・国語の改善を叫び、国際語の普及運動に従ひ、生活改めに思をこらし出版に宣傳に力を尽す考であつたが素より力足らず資力乏しい上に營利の外に事業である為、僅か数冊の小著と不徹底な宣傳をしただけで行きつまり果は全濟上の苦みを残して得る所頗る貧しかつた。しかし希望の思猶燃えて先ず資源を作るを先としたが、一教師の身の容易に成るべくもあつて過ぎた。

昭和二年三月人々の勧めで結婚する事にあつたので、両家にかゝる婚費を節約しその代り既に稿成れる本書を記念出版として出せば、新時代にふさわしい意義ある事と考へたが強いてとも云いかねて遂に私は平凡に家庭の人にあつた。

其後、縁結びの仲に立つた人の言に誤を見、又我に対する周囲の理解の事に心を痛め、果は結婚を悔いたりしたが近頃漸く他も我が愚徹の性を知つてくれたかのように思へるのでこれから信ずる所に向つて進み度いと思つて居る。

偶々今年一月一兒の出生を期とし、取敢ず此の原稿を浄書する代りに自ら鉄筆をふるって刷卷とし、之を亡き父母の靈前に捧げて我が来し方の事を告げ、思わで過ぎた幾年の不孝を謝し奉る次第である。

昭和三年一月廿三日
長女チエロ出生の日

山崎 節郎しるす

(急いで書いたので書き違や其の他の誤もあり、前巻頭にはみだしを掲げ巻末に索引・諸景圖・厂史關係諸表等を附ける筈であつたのを此度は省きました。)



ローマ字綴国音図表

黒字は日本式綴方
赤字はヘボン式の日本式と違つた
音はイェスラント式々々

母音と 行の しるし	ア					拗音			
	A	I	U	E	O	YA JA	YU JU	YE JE	YO JO
K-	カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ	キユ	キエ	キョ
(KW-) KO	クワ	クイ		クエ	クオ				
S-	サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	シェ	ショ
		SH				SHA SA	SHU SU		SHO SO
T-	タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チェ	チョ
		CH	TS			CHA CA	CHU CU		CHO CO
(TS-)	ツア	ツイ		ツエ	ツオ				
N-	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニエ	ニョ
H-	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒユ	ヒエ	ヒョ
			F						
(F-)	ファ	フィ		フェ	フォ				
M-	マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミユ	ミエ	ミョ
Y-J *	ヤ		ユ	ヨ					
R-	ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リュ	リエ	リョ
W-O *	ワ	(#)		(Z)	ヲ				
G-	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ	ギユ	ギエ	ギョ
(GW-) GO	グワ	グイ		グエ	グオ				
Z-	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジェ	ジョ
		J				JA JA	JU JU	JE JE	JO JO
D-	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂヤ	ヂユ	ヂエ	ヂョ
		J	Z			JA JA	JU JU	JE JE	JO JO
B-	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビユ	ビエ	ビョ
(V-) V	ヴァ	ヴィ		ヴェ	ヴォ				
P-	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ	ピユ	ピエ	ピョ

清音

濁音

半濁音

ローマ字綴方一般

1. 言葉はそれぞれ適当に分け書きする。

HANA GA SAKI, TORI GA NAKU.
但し本書には助辞は中点をうって前につけてある。
HANA-GA SAKI, TORI-GA NAKU.

2. ツマル音(促音)は、次に来る子音を重ねて表す。

GAKKŌ, KESSIN, OTOTTSAN, SOITU'Ā
(学校) (決心) (お父さん) (せいとう)
GAKKO KESSHIN OTOTTSAN SOITHU'Ā
GAKKOO KESSHIN OTOTTAN SOIC'A
但し CH Ō の前が つ である時は T を挿入
ATCHI (あち) SHOTCHŪ (しゃつちゅう) SOTCHOKU (さつこく)
ATCI SOTCUU SOTOKU

3. ノバズ音(長音)には、母音の上に山形印(ˆ)をつける。
ヘボン式では、ˆ をつける人が多く、ˆ も用いる。
イスラント式では、ˆ をつける外、母音を重ねる。

ŌKINA KŌEN (大きな公園) 此外 ŌKINA KŌEN
お OKINA KOEN

4. 鼻音(ン)は N で表す 但し B・M・P の前には M とする。

GENKI, TANBO, ANMIN, DENPO
(元気) (田圃) (安眠) (電報)
" TAMBO AMMIN DEMPO
" " " "

5. ン(ル)が次の字と結ばず切れる時は N' とする。
ON'AI (恋愛), KAN'I (簡易), HON'YA (本屋).

心得がき

歴史は理解の学科であって、暗誦本位の学科ではない。しかし記憶が相当確であるければ、真の理解は亦し難くまことの趣味は出て来ない。

歴史の研究には、重に次の十何の中何れかの要素が含まれる。従ってその總ての問題は、此の中何項かの答を要める。

- 1. 何時?.....(Kium)..... 時
- 2. 何処?.....(Kiu)..... 場所
- 3. 何?.....(Kio)..... 事・物
- 4. 誰?(何々?).....(Kiu)..... 人・物
- 5. 何故?.....(Kiu)..... 理由(原因)
- 6. 何うなった?.....(Kick parigis)..... 結果
- 7. 何んぞ?.....(Kia)..... 性質・種類
- 8. 何うある?.....(Kiel)..... 様子・方法
- 9. 誰の?(どれ?).....(Kies)..... 所有
- 10. 何れだけ?.....(Kiom)..... 数量

時歩む
世界歴史



山崎留郎 著

まえがき

1. 時代を知ることが歴史学びの基

歴史学びには時の觀念が甚だ大切で、これが研究の土台である。しかもこれが一番忘れられ勝るのは嘆かわしい。時を顧みずに歴史を学ぶのは、羅針盤なしに航海するようふもので、危い行き方である。寧ろ無謀と云つてよい。史実をしっかりと掴む為には重なる年代は暗記する位であつて欲しい、これは苦しいに違ふ。併しこの努力の上こそ光明がある。さればと云つて何千年に亘る人の世のでき事を、一々年に即して覚えると云ふ事は實際難かしい事であつてそれも亦無謀に近いから、私は極重要な年代を後に説く方法によつて覚え、それに知らぬば亦らぬ史実を附け加えて参考しつゝ進む方法をとつたのである。

之を例えて云えば、無窮を行く時の旅路に關守を立て、右往左往の旅人を吟味し、又涯知られず史実の波の立つ海に一点高く燈明を掲げて目標としその辺を照破する方法とも云うべきものである。

斯して、今迄歴史の初学者にとって時代の事は忘れ
勝で、只史実は徒らに事件・人物の上のみ見られよう
とする傾があったのを、私は之を固い年代の地盤の
上に打立て、時代を常に生かしつゝ正しく史実を
掴ませようと試したのである。

目標の項目は多ければ良いと云うものでないから、
本書には、日本史・東洋史・西洋史中、重要で且つ尤
も目星とするに都合の良いもの数百項を選んだ。之
は独断で定めたのでなく、各中等教科書その他教壇の
史書の年表を統計し、自分考をも加えて定めたの
であるから此書に選出した位の項目は、誰でも常
識としても知って置く必要があると信ずる。しかし
此外のは要らぬと思われては困る。殊に附記・年
記の文字の小さくとも、これ又注意して見て欲しい
のである。

さて、其の年代を覚える方法は、今まで行われた
偶合的記憶法を避けて、日本字(カナ)又はローマ字で
教を表す合理的方法をとった。

想うに假名で教を表す事は、我国で可なり古くから

古くから行われ、商品などの符牒としては、めいめい
人に知れぬように工夫し用いて居た。併しもう隠
す時代は過ぎた。商品には正札が^せ要められて居り、
假名の教化は品物の隅の三角の小天地を離れて、もっと
廣い世界に出なければならぬ。

その方法は、後に詳しく説いてあるように、零か
ら九までの数字を五十音の行に当て、約五個づきの
日本字又は教個のローマ字で表し、その字を組合せ
て覚え易い文句を作るのである。こうしてやれば容
易く而も確實に年代を覚える事ができる。

併し單に年代を知って居るだけではつまらぬから、
これを明かに頭に入れて更に史上人物の活躍を^{ハツキ}考え、
地の利害を思い、一事件の原因や結果やその影響を
察し、人文推移の流れを汲みおど、諸方面から縦横
に人生とその環境の交渉を考察し、正しく今の世、今
の我を識り尚之を未来世の^{アキラ}燈明としなければならぬ
と思う。即ち厂史を研めるのは單に過去を知る為
でなく個々の史実が人間の生活に如何なる意義をも
つかを見、その発展の跡を追うて常に現在及び未来

に之を生かし新文化の創造に尽す心掛で見たいものである。

本書は入門の一小著に過ぎないけれども見る人の心によって生きもするであろう。記述も此度は学習の便宜上包括的にせず、日本・東洋・西洋の三火に分けて書いた。

次に日本字と、それによって表わされる数字とを記して見よう。

2. 日本字式数字の表し方

アイウエオ (ア行).....1 を表す。
カキクケコ (カ行).....2 を表す。
サシスセソ (サ行).....3 を表す。
タチツテト (タ行).....4 を表す。
ナニヌネノ (ナ行).....5 を表す。
ハヒフヘホ (ハ行).....6 を表す。
マミムメモ (マ行).....7 を表す。
ヤ ュ ヨ (ヤ行).....8 を表す。
ラリルレロ (ラ行).....9 を表す。

ワ.....(ワ行)
ガギグゲゴ }
ザジズゼゾ } 濁音
ダヂヅデド } 半濁音
バビブベボ } 全部
パピプペポ }0 を表す。

これだけ覚えて居て活用すれば良いので、即ち五十音の各行を123.....の順序通りに表すのだから誠に判り易い筈であるが、更に次のようにして頭に入れて置く⁴と猶更便利である。併しこの中にも、ア行のイ⁴の1で表すのや、サ行の^サ3や、ヤ行の^ヤ8などは殊に判り易いから更に其他の行に矢をつけて

- タ.....4(シ)
- カ.....2(ニ)
- ナ.....5(イ) イツツォイ
- マ.....7(ナ) ナナツのナ
- ハ.....6(ム) ムツツロム
- ラ.....9(ク)
- ワ.....0(ナシ)

即ち、タシ(4), カニ(2), ナイ(5), マナ(7), ハム(6)
 ラク(9), ワナシ(0)

(^ル確, ^カかに, ^{アイ}あい, ^{マナ}学, ^{ハム}はむ, ^{ラク}楽, ^ワ無し)

それに前の 1, 3, 8 を附けて文句にし

確かにあい いさや 学はむ 楽わあし

これを覚えて居て、十分に言葉の数字化と、数字の言葉化とを練習すれば、ひとりて文字が数を吐き、物を言つて呉れるであらう。

その練習の方法は、例えば

- レキシ = 923. ガクモン = 027
- センセイ = 331 (センセー = 33)
- マナブヒト = 75064

ふどりの如くやつて見るのである。たゞ注意すべきは、つまる音(促音)のツ, もじれ音(拗音)の韻字 例え
 ば きゃ, きょ, きゆう ゃ ゅ ょ や, 鼻音 は 収音 ン,
ひき音(長音) などは数字に入れぬから、上の例の先生を、

一字一字センセイとする時と、長音にしてセンセーとする時とは、数が違ふ事である。それで長音の時は棒引にするか又はこれ等除外字は符号を附けて紛れぬようにし、總てカナは必ず発音通りに書かねばならぬ。

- ニッポン(日本) = 50
- トキヨウ(東京) = 42 (又ハ トヨキヨと書く)
- キョウト(京都) = 24 (又ハ キヨト と書く)
- オサカ(大阪) = 132 (又ハ オヨサカと書く)

そこで例えば、234と云う数を言葉化すると、
 「^{キツ}氣質」とか、「消した」とか「^{カツ}過失」とか、「貸した」とか「季節」とか「着せた」とか、いろいろ此の数字に当はまる文句ができるから、その中適當ふのを選ぶのである。

この方法を一步進めて5・7・5文字の句切の頭「にのみ」数を当て、やつて見るともつと自由な文句にある。今出した此の234は東洋史で云うと、有名な彼の諸葛孔明が、此の年代(西暦)の秋八月、五丈原の軍中に戦死した年である。これを数の句にして見ると、

朽ちぬ名を	出師の表に	とめて逝き
君が名は	草廩と共に	閉されず
隠れ家を	諸葛は出で	知己に死す
和山声ふく	清渭の流	寒うして
かりがねの	淋しき夜半を	天に鳴く
孔明を	水魚と劉備	頼みしを
草枯れて	そう死を咽ぶ	月の色
孔明は	死しても敵を	たじろかせ
勝ち軍	それど ^レ 丞相	遂に見ず
国民は	それどそれど	土に ⁺ 哭き
漢室の	運命を ⁺ 負いて	立ちし身の
君が腕に	蜀の命を	つふぎしに
勝關も	淋しい声に	土の秋
風も今	死んで五丈を	散る木の葉
今日を限り	燭火消えふん	魂祭り

以上十五句だけを例として出したが、まだまだ幾らでも考えられる。こうした中から自分の尤も適当と思う句を覚えて居れば良い。どの句をとっても皆、234の教を示して居る。

教を句化するには就ては字教は定めおいて良いが、大体の標準を述べると、

①桁の教は只五文字又は七文字おどろ一つどき語で表す。例えば東洋史で、王莽が前漢を亡した西暦紀元8年の8を表すには只「ヤ!とばかり」(ヤ=8)とし、キリストの生れた紀元前4年を表すには「天地の光」(テ=4)とする類である。

②桁の教のは、5・7文字位の二語句で表す。例えば王莽の新しい国が、劉秀(後漢の光武帝)等々の為に昆陽の戦に亡ぼされた西暦23年を表すには「昆陽に新を亡ぼす」(コ+シ=23)とし、西洋史のローマ帝トラヤヌの立った紀元98年を表すには、

「ローマのトラ世に立てり」(ロ+ヨ=98)とし、又、日本武尊の熊襲征伐の西暦97年を表すには

「令に勇んで皇子出でましぬ」(レ+ミ=97)とする類である。

③桁の教を表すには、前の孔明の例のように5・7・5文字のおぼえ句にする。日本史の例をあげて見ると、神功皇后の新羅征伐の年代、皇紀860年を句化して

「八潮路を はるか新羅に 渡り行き」(ヤ+ハ+ワ=860)と

する。之を西暦で云うと、紀元200年だから

韓国に 湧き立ち起る 我が凱歌^{カ+ワ+ワ=200}とある。
全じく大化改新の年代は西暦646年だから

人よ仰げ 大化の御代の 日の光り^{ヒ+タ+ヒ=646}とする。

四桁の数を表すには、7・7・7・5, 7・5・7・5, 又は、
3・4・4・3文字等の数の小唄にする。例えば前例の大
化改新の年代を皇紀にすると1306年だから四桁に
ある。そこで

王政成りて 正月の 笑ひ初めや 日の光り^{オシワヒ=1306}
とする類である。しかし四桁の年代では、初の数字
は一千年代・二千年代などその隔りが千年以上にあ
るから之を誤るようでは駄目だから省き、千年代で
ある事は宙で覚えるやうに望み、その為本文には初
めの「王政成りて」を省いておせてある。今一例を挙
げると、弘安の役に元軍が全滅した時の年代、西暦
1281年を

あらたのし 神風^{カミ}の 大和島根に 仇もふし^{アカキア=1281}
では初の「あらたのし」は本文には省いておせてある。

しかし又全部ある方が良いと云う人もあるので同時に小唄として全体をよみ込んだものも載せて、人々の選びに任せる事とした。

次に小唄にした例を少しあげて見よう。これは皆西暦によってある。先ず日本史から

1027年 藤原道長の死

巨^ルの世じゃあど 笑うも一時 雲に隠れた 望^{ツキ}の月

1156年 保元の乱

愛に笑^ウか 怨に泣^ナか 中き保元の 火の車

1181年 平清盛の死

うわさだけでも 熱そうお話 焼けどしたとは 医者^{イハ}の嘘

1183年 木曾義仲入京

赤の旗影 旭に怖^{オソ}じて やがて都は 白ばかり

1333年 北条氏亡ぶ

運を打つ槌 さんざん狂^{クラ}れて 死んで行く身を 酒の宴

1392年 南北両朝の合一

今は怨も 清^スう捨て、 両河一つに 北南

1582年 本能寺の変

織田^{オリ}の偉業も おかばに朽ちて 夢を流した 京の水

1598年 豊臣秀吉死す

今ぞ栄華を 浪花の夢と 霊を阿弥陀の 山に寝る

1702年 赤穂義士の復讐

朝日うらうら 身は白雪に 笑う義士等 気も晴れて

1869年 東京奠都

明く治まる 世の春告げて 花の都に 龍駕とぶ

次に東洋史の例をあげると、

1141年 岳飛殺さる

あわれ秦桧 あの手刺す 忠義斬つたと 怨まれる

1206年 成吉思汗興る

幹難河上に 汗成吉思が 湧いて出る日 旗の風

1227年 成吉思汗の死

あわれ胡沙吹く 風とも消えて 君が此世の 幕を閉ず

1236年 拔都の西征

鬼を酔で食う 心も見えて 進む拔都軍 昼に夜に

1282年 文天祥殺さる

命短し 道は長し 世にも朽ちせぬ 君が文

1295年 マルコ・ポーロの帰国

聖地並旅して 聞き見た事を 牢でマルコが 述べきかす

1368年 元滅ぶ

今は蒙古も 朱に染みはて ほんに果敢ふい 世じゃものを

1405年 帖木児死す

落つる露かや 今ムール起たず わびし望も 赤かばにて

1899年 義和團の暴動起る

いじめられては 世の中怨み 乱を思ふか 流離の子

1912年 中華民国起る

落ちた命に 霊吹きこめて 喘ぎ出て来る 共和支那

次に西洋史の例として

1096年 第一回十字軍起る

愛の十字を 我が血に染みよと 聖地守るべく 人が湧く

1431年 ジャンヌ・ダルク殺さる

あわれルアンの 土こそ君が 定めおき世を 終る床

1492年 コロンブスの亜米利加発見

あれを見ろよと つい見え初めた 陸に涙の コロンブス

1616年 詩人 シェクスピア死す

詩の聖の 誉と残る 命刻んだ 墓一つ

1776年 アメリカ合衆国の独立宣言

あれ鐘が鳴る 皆よく聞きやれ 胸の自由に 響く鐘

1789年 フランス大革命起る

怨積もって 先ず暴民が 破るバスチユの 牢の壁

1814年 ナポレオン、エルバに流さる

今は奈翁も 世の秋聞いて エルバ小島の 月を見る

1869年 スエズ運河の開通

運河スエズに 行く船見ては ひとり楽しむ レセップス

1875年 グラハム=ベルの電話発明

言った言葉が 世に駆け出して もうしもうしが 野を渡る

1914年 世界大戦起る

因果めぐって 六合ゆらぎ 命渦巻く 土の葉

以上は凡て都々逸調だが、学生おどは時に山野の松風に和し、又渚の波に声を合せてデカンジョ節で歌って見るも宜からう。それから漢詩に趣味を持つ人は詩作の上に此の方法を用いられるも亦妙であらう。こゝに教例をあげる。

1336年 湓川之戦 (長岡雙英、詠楠公詩改作)

一兵大敵力難争。 成敗何関良将名。

志士当年多唱義。 繁楠一個見高誠。

(イセ・シ・ハ=1336)

1703年 赤穂義士切腹 (信大怒軒、詠大石長雄、詩改作)

一拳討、君敵、 長声傳、偉蹤、

吾人所、不、及。 終始只從容。

(イマ・ブ・シ=1703)

1767年 山縣大弐・藤井右門所刊 (中垣健太郎、述懐詩改作)

赴、義名千載。 貧、生僅百年。

百年典千載。 又孰取何損。

以上猥りに前人の珠玉に傷けたが、これは教を盛る上に止むを得なかつたのである。しかし此の様ふ事をするよりも、自由詩として新しく思う俚に表現する事こそ望ましい。

1879年 エジソンの電燈発明

越歴燈光。 能破闇黒。

明華煌々。 瑠璃光土。

5桁の教。即ち何年から何年までと云うようふ二つの年代を同時に覚えた時には、5・7・5-7・7、三十一文字の歌を、上の句と下の句に分けて表す。例えば西洋史のペロポネソス戦争の起つた西暦紀元前431年と、講和にあつた404年とを同時に覚えた

い時、戦はスパルタとアテネとの間に行われた事や、
此の和議の結ばれたりは四月であつた事など考に入
れて、

立ちまわる スパルタ軍と アテネ軍……………431

和議結ばれて 地の春を笑む……………404

とする類である。此の事件は紀元前である事を忘れ
てはならぬ。

与桁以上の教はそれぞれ長歌にして覚えるのである。

以上教例の外、偶合的のもの、即ち語音の類似によ
る数字記憶なども、両用しても良い。 例えば元の忽
必烈の世が西暦1260年から、1294年まで続いた
事を表すには、この世祖 日に苦心して 和を謀る⁷……1260
(1244)
としたり、同じく拔都の西征が1236年から1242年
まで続いた事を表すには

勝ちつづけ 進む拔都軍 昼に夜に(1242)⁷……………1236

とする等である。

尚、教の句化は単に歴史の年代暗記にのみ役立つ
のでなく各方面の教的記憶に用いられる。例えば地
理科で、山の高さや川の長さなどを覚える時に應用

する事もできる。一例をあげると富士山頂剣ヶ峰
の高さ、海拔3778メートルを文句化して見ると、

さまよう雲の 峰白く 空に高き 雪の富士(3778)

とする類である。しかしむやみに句ばかり作って食
傷してもいけぬから、極大切に知らねばならぬと
思うものだけに留めるが良からう。

3. ローマ字式 教の表し方

此の式では、五十音圖 日本式ローマ字綴を標準にし、ヘボン式又は英語を用いた時は、不足の字又は違う綴字を下点の字で補い、括弧内のは 에스ペラントを使う時補い入れる字であり★印はとって変える字である。又余り字がなければ皆〇に入れる。

A I U E O (語首のみ)	(ア行のしるし)	1	を表す
K	Q X (カ行のしるし)	2	を表す
S	(Ŝ) (サ行のしるし)	3	を表す
T	Ĉ (C) (Ĉ) (タ行のしるし)	4	を表す
N	(ナ行のしるし)	5	を表す
H	F (Ĥ) (F) (ハ行のしるし)	6	を表す
M	(マ行のしるし)	7	を表す
Y	(J)★ (ヤ行のしるし)	8	を表す
R	Ĵ (L) (ラ行のしるし)	9	を表す
W	(Ŭ)★ (ワ行のしるし)		
G	J (Ĝ)	} 〇を表す	日本語の濁音、半濁音、 漢字音等に使う字 全部
Z	(Ĵ)		
D			
B	V (V)		
P			

(巻頭のローマ字綴五十音圖表参照のこと)

ローマ字式 教の表し方 注意

- (1) 上表教の当字を覚えるには、日本字式と同じく
 「²確かに・⁵ふい・¹い・³き・⁸や・⁷学・⁶はむ・⁴楽・⁹わむし」と覚える。
- (2) 母音 A I U E O は、語の首のは 1 に採るが、綴り中・韻字のは採らぬ。又英字母中 Q・X は余り字ではあるがカ行音に近いから 2 の中に入れた。
- (3) カナで書いて、ンとある用法の時の鼻音 M・N は教に採らぬ。
- (4) 子音字が二つ以上続く語綴では、初め字のみ採る。
- (5) ヘボン式ローマ綴や英語の J 字は ⁸0 を表して居るのに同形字が 에스ペラントでは、ヤ行のしるしで 8 を表して居る。又 R・L のように似よりの音で字を違ふようふつには特に気をつけて欲しい。
- (6) 他外国語も此の図表に倣って教化をやり得るが、その時すべて教化の字定め、品詞定めをやり、例えば冠詞・接続詞・前置詞・動詞などを教に入れるか入れぬかを豫め定めておくが良い。
 尚又教化文字配当について、例えば伊太利語を使う時、この語は白木のヤ行とワ行に当る字が、

からである。

次に此の例として、本文日本史の初め教項をこつて之を示して見よう。こゝには、冠詞・接続詞・前置詞・動詞などは教に入れて赤い。但し三語以下でできた覚え句は各語皆その頭字を採る。

○ 四道將軍派遣の年、皇紀573年を示すには

Ni estas majestaj ŝogunoj.

(吾等は尊き將軍あり)……の意味

此中、*estas* は動詞だから省かれ、*N・M・S* の三つの頭字が教に採られて573を表す。

○ 同じく崇神天皇の御代、初めて「人口調査令」の出た皇紀575年を表すには

Nacio movas nacisorton.

(国民は国運を動かす)……の意味

この句は三語でできて居るからどの語も頭字を採り用して *N・M・N* で575を表す。

○ 任那(当時加羅と云ふ)が始めて朝貢した皇紀628年を示すには

Hu. Kara-tributo atingis Japanujon.

(お、加羅の貢が日本に着いた)……の意味

此中 *atingis* は省かれ *H・K・J* で628を表す。

○ 垂仁天皇の朝、皇紀656年神嘗を伊勢に遷し、即ち今の伊勢内宮まできた年を表すには

Kantu Himnon de nacia festo.

(国の祝の聖歌を歌え)……の意味

此中 *Kantu* は動詞、*de* は前置詞だから省かれ *H・N・F* で656を表す。

○ 同じく垂仁天皇の朝、皇紀654年「殉死の禁令」が出た年を示すには

Humaneco naskas legon.

(人道、法令を生む)……の意味

これは三語句だからどの語も採用して *H・N・L* で654を表す。

○ 景行天皇の熊襲親征、即ち皇紀742年を表すには

Mikado timigas femnason.

(みかど熊襲を怖れさす)……の意味

即ち *M・T・K* で742を表す。

斯う云う風にしてやれば、如何なる年代事項でもたやすく教に化する事ができる。

尚神武天皇の建国は、皇紀1年だから、例示するまでもふいが試にちげて見るこ

Imperiestro (帝王). aūtoritato (権威・命令権).

edipi (教化する・徳を樹てる). energio (精カ・活動カ). eterno

(永ス・永劫). oriento (東・東国). origino (本原・起原).

ふど何かそれを關係づける語をもつてくれれば皆その頭字が1を表すことにある。

4. 氣つけ言 教々

- (1) 此の本の年代略記文句は、更に短句や小唄を用いた。それは覚え易く、作り易く種々心の味を盛るに好都合だと思つたからである。又その作は本の性質上、明白を主として綺巧を弄しなかつた。
- (2) 學習者は常に大体の時代に就ての觀念を養ひ、

重要なる年代の世紀はすぐ頭に浮ぶようにして欲しい。又尤も大略としては

日本史では、垂仁天皇の25年、皇弟倭彥命薨じ、詔して殉死を止められた年が西曆紀元前2年で、其翌年が紀元前1年終であり、又藤原道長の長女彰子が一条天皇の中宮に上つた年が西曆1000年であるから、それを界にして百年代と千年代をはっきり頭に入れて置くが良からう。

東洋史では、前漢の終迄が西曆紀元前であり、宋の太宗の天下一統後21年即ち太宗の世の終が西曆999年であるからそれを界に、三桁の年代と四桁のものを分ける。

西洋史では、カヌート大王(1016年即位)迄位を三桁

の年代とし、それ以後を千年代と覚えて居れば良
からうと思う。

(3) 此書の年代は、はじめ日本史だけは皇紀(神武紀元
日本紀元)を用い、東洋史と西洋史には西暦(基督紀元
西洋紀元)を用いた。
しかし各国歴史対照の便宜上、皇紀によつた日本
史をすべて西暦(西暦即ち西洋紀元と云うが之はアジヤの偉人列
史トに基く紀元がから實はアジヤ紀元とも云ふ。又世界
一般に通じ易い意味から世界紀元とも云ふ。)に書き改めた。これ日本国体の尊嚴も外国史と比
較する事によつて一層強く感ぜられるからであり、
又学者の既に説く如く、推古天皇以後は實際の皇
紀年代が略西暦に合うのである。殊に近世にふ
ると彼是共通の事件が多く、二様の暦年を用いる
のは甚だ不便でもある。以上の理由により断然
書き改めた。但し下に説く如く皇紀と西暦は容易
く換算し得るので必要があれば一方から一方を導
き出せば良い。之は次の計算でできるから、常に
その練習をすれば教の頭を練る事にもなる。

- ① 皇紀……神武天皇即位の年を紀元元年とする。
西暦紀元前 660 年に当る。
- ② 西暦……基督生後四年を以て紀元元年とする。

皇紀では 661 年に当る。之はもと基督の生れた年
を以て元年としたのであるが、研究の結果四年後
と知れて後も、永年の習慣によりそのまゝ用いて居
るのである。

紀元前を示すには、B・C (Before Christ 頭字)
を以てし、紀元後を示すには A・D (ラテン語 Anno Domini)
を用いる事もあるが、紀元後には何も書かぬのが
普通である。さて、

皇紀と西暦との違は、皇紀が西暦より 660 年だ
け前にあつて居るから互に加減すれば他を知り得る。

西暦を皇紀に直すには……紀元後ならば西暦年数
に 660 年を加え、紀元前ならば 661 年からその西
暦年数を引けば良い。

例えば 西暦 1339 年 百年戦争の起つた年は

$$1339 + 660 = 1999 \quad \text{即ち皇紀に当ると日本では後醍醐
天皇の年である。}$$

又 西暦紀元前 33 年、オクタビヤヌスがローマの統領とあつた年は

$$661 - 33 = 628$$

即ち皇紀 628 年で日本では崇神の朝に任那始めて来朝した年である。

皇紀を西曆に直すには……皇紀660年以後ふらば、その年数から660を引く。又皇紀660年に満たぬ年ふらば661年からその皇紀年数を引くのである。

例えば皇紀2276年家康の歿年は
 $2276 - 660 = 1616$

即ち西曆1616年でシェクスピアの死んだのと同年である。

又皇紀631年崇神天皇崩御の年は
 $661 - 631 = 30$ 即ち西曆30年クレオパトラ自殺の年である。

(4) 日本で今の太陽曆に改定せられたのは、明治五年十一月の詔により、此年十二月三日(旧)を改めて六年一月一日(新)とし此日から実施せられた。而して閏年算定の法は、明治三十一年勅令で定められた。文に曰く、

神武天皇即位紀元年数の四を以て整除し得べき年を閏年とす。但し紀元年数より六百六十を減じて、百を以て整除し得べきもの中、更に四を以て其の商を整除し得ざる年は平年とす。

(5) 此の本の假名遣は、大正十三年十二月、文部省国語調査会査定の新假名つかい法に拠って助辞の外は總て発音通りにしてある。それでイとキ、エとエ、オとヲなどもイ・エ・オの一つにし、又ヂ・ジは

ジに、ツ・ズはズにしてある。

或地方の人はヒとシ、スとシ、イとエ其他區別の出来難い人があるが、之をよく區別して用いふいと数が違ってくる惧があるから、発音から先ずよく整える必要がある。

(6) 歴史を学ぶには、歴史地図・年表・系図などを常によく参照してほしい。

(7) 外国の地名人名称呼に就ては、前々文部省囑託委員の復命書によるものと、大正三年八月史学会調査の「外国地名人名称呼一覽」による個人名はイギリス語音に呼ぶものがある。注意しふいと間違が起る。例えば前者のカロロ大帝と云うに対し後者はチャールス大帝と云うが如きである。其他種々呼び方があるが此書には通りのよい名を用いるようにした。

(8) 学校の教科書は余り政治史に過ぎる。もっと所謂文化史や社会史風にやれと云う人がある。尤も小説である、併し最初にはやはり年代が明確で、劃世的に取扱い易い政治史方面から入るのが良いと

思う。時代・人物・事件等の一般概念を得てから
個々の特別史的研究の細微に進み行くが順序であ
らう。

(9) 本書時代区分の名称には第一史期・第二史期等
順次に史期名を用いた。之は上古・中古・近古
近世・現代等と当て、呼ばれるも良いであろう。
又身分によって逝去の意味を呼ぶ方を変える。崩
薨・殂・卒・歿・死等は我が皇室及皇族の外は大
てい使い分けぬ事とした。

(10) 学習上如何なる便法があつても、要するに勉強
が肝腎で、方法を恃みにして怠つてはいけぬ。
十分腕を磨き力を練つた上で使つてこそ正宗の名
刀にも光があるべきで、如何なる場合にも、実力が
あらゆる方法の根元だと云う事を常によく思ひお
ければよい。

本文
句頭標

- 紀元前を表す
- 紀後百年代内
- ▲ 紀元千年代
- 紀元二千年代

本文第一 日本史の部

第一史期(神代—蘇我氏滅亡)

日本史のみなもと

我が国体 我が大日本帝国は国遠く古に起つてその
命は常に新に、国体の精華は燦として日如く世界
に輝いて居る。何故に然るか。

(1) 上に万世一系の天皇を戴き、常に中心の動きが無
い為、君臣一致し君仁に民忠に、相愛の念強く團結
が固い。

(2) 四面海を環らし、地理上の好位置を占めて、國を
守るに利多く文明入りて保たれ易く、又原土美談
勝れ山水明らかなる為、民心快活で進取の気象に
富む。

すべて此の美の環境と光榮の歴史によつて人に清
明不屈の魂が宿り、徳に和ぐと共に義に勇む心が強いら

國のはじめ(神代)

1. 天照大神 傳え云う我國太古 伊弉諾尊・伊弉冉尊
の男女二神が大八洲國をお造りにあり、又天照大神
素戔嗚尊を生み給うた。天照大神は高天原を治めて
その徳日如く万民に優しく仰ぎ奉つたが、御弟
素戔嗚尊は荒々しい行が多かつたので、大神悦ば給

わづ達は天岩戸に籠り給ひ、天地常闇と云った。依
て群臣議して大神を迎え申すに及び、尊は去って出
雲に下りこゝの賊を平け叢雲劍を得て之を大神に奉
られた。

2. 大国主命 素戔嗚尊の御子大国主命は、少彦名命
の輔佐により出雲地方を従え、産業を興し、医薬の
法を教へふごしてその徳四方に及び強大であったが、
天照大神が武甕槌神、天津主神を遣わして此の国を
占されたので、命は謹んで勅を奉じ自ら杵築宮に退
かれた。今の出雲大社は此神を祀る。

3. 天孫降臨

(1) 大神の神勅 大神は御孫、瓊々杵尊に勅して、

「豊葦原瑞穂國は我が子孫の君たるべき地あり。
汝皇孫行いて治めよ。天日嗣のさかえまさんこと
天壤と共に窮ふかるべし」と仰せられた。

「今万世に勤きよふは我が皇基は實にこゝに定
たうである。」

(2) 三種の神器 大神は又、八咫鏡・八坂瓊勾玉・

叢雲劍 即ち三種の神器を尊にお授けにありこの
鏡を見ること我を見るが如くせよ」と仰せられた。

これから代々の天皇、神器を相傳えて皇位を御し
と云さつた。

斯くて瓊々杵尊は、天兒屋根命・天忍日命・太玉
命等を従え、日向の高千穂宮に降って治め、その御子
彦火々出見尊・御孫鶴鷄草薙不合尊まで三代の間は
日向に都して徳を西海に施し給うた。以上を神代と
云う。

(附記)

1. 高天原 高天原の位置に就ては、古來国内説・天上説・
海外説とあり、国内説の中にも大和・伊勢等ちつて何れとも
明かでない。
2. 大八洲の意味 八洲は八つ島を指したのでなく、八ヶ伊
(伊)の意で、たゞ多くの島々を云う意味だと云われて居る。
3. 神樂舞の起原 天照大神が天岩戸に籠り給うた時、天鈿
日命が、真折の若をかつらにし、ひかげの葛を袴にし、竹の葉
飯懸木の葉を手草にし、子マキの矛を持って石窟の前で俳
優をして相共に歌い舞ひ、又庭燎を明かにし、常世の長
鳴鳥(鷄)を集めて長鳴せしめたが之が神樂の起原であり、
後世舞戯の起りだといふ。
4. 田畑及五穀 日本書紀一書に「天照大神稲を以て水田種子
と爲す因て天邑若を定む、即ち其稲種を以て始て天狹田
及長田に植えそり秋の垂穂八握にしふて甚だ快也」と。
又金書に「天照大神粟・稷・麥・豆を以て陸田種子と爲
す」とあり。即ち我等の祖先は穀を嘗んで食用して居た。
5. 養蚕の起原 日本書紀一書に「保食神眉上に蚕生り
天照大神之を喜び、口の裏に蚕を吞んで便ち絲を抽く

幸を得たりこれより始めて藝藝の道有り」と。斯て上古織物の原料には絹の外、麻・葛等があり以て衣料とした。

6. 酒の起原 須佐之男(素戔鳴)命が出雲の賊を討つ時、八塩洲の酒を造らしめたのが、史上酒の起原だと云う。

7. 太古の家屋 柱を地中に埋めて中心とし、梁・棟・戸を組立て、蔓草の繊維を縄で結び、又地床を張り、畳を敷き、草で屋根を葺き、その両端に氷木を置き飾とした。今も神社の神明造にその遺風を見る。即ち大和尺牘の祖先は家に住んで居たので、穴居では無い。

8. 和歌の起原 須佐之男命が、足名稚女 櫛稲田姫を娶り須賀に宮を造り「八雲立つ出雲八重垣 妻ごめに八重垣造る その八重垣を」と歌い給うたのが和歌の起原だと云う。又詔冊二尊に始まるとも云う。

前660年 神武天皇の即位 (神武1年1月)

神武天皇は瓊々杵尊の御曾孫で、我国第一代の天皇である。此頃東国鑑、王化に浴しふいで、命は兄君五瀬命と共に東征の軍を起し日向の高千穂宮を発し、海路 豊の国→筑紫→安藝→吉備→淡路を全て白肩津に御上陸、長髓彦と生駒山に戦って利あく、五瀬命傷き給うた。依て天皇は海路から紀伊に上り、道臣命を案内として峻路大和に入り賊を攻められた。概々饒速日命、長髓彦を殺して降り次第に諸方の土賊皆平ぎ大和の地全く定った。そこで天皇は欽傍山の

東南麓、櫻原の地で御位に即き給うた。此年を我が紀元元年とし、その正月一日を太陽暦に改めて今、二月十一日の紀元節として祝うのである。ついで大國主命の後、五十鈴姫命を立て、皇后とあさった。

☉ 日の出の国に 光り出でます わが帝……前660

(注意) 紀元節を表すおぼえ句には皆「前」の冠と附けるのだが便宜上省いてある。
尚本文中に「此年」とあるのは凡て項首にあげた年のことである。

(附記)

1. 神武の御政治 祭政一致即ち「まつりごと」は祭事で、神を祭る事が政治の尤重要事であった。

中央 { 祭祀 { 天種子命 (天紀屋根命の後—中臣氏の祖)
天宮命 (太玉命の後—斎部氏の祖)
警衛 { 道臣命 (天忍日命の後—大伴氏の祖)
可美真手命 (饒速日命の子—物部氏の祖)

地方 { 国造 (国々御臣の義)……国を支配する地方官で、土地・人民を領し職を世襲す
縣主……朝廷の御料田を掌る官吏でその職世襲

2. 金鷄勳章 天皇紀伊から進んで大和の長髓彦を討ち給うた時、金色の鷄が飛んで来て天皇の弓弭に止り賊勢衰え、遂に皇軍の勝利とあつた。此の瑞祥に因み、明治の御代金鷄勳章が定められた。

3. 神武天皇祭 天皇の御崩御は皇紀176年3月11日だから太陽暦に直して4月3日に祭る。

(年記)

前659 (神武2)② エカを賞す、国造・県主を置く
前657 (全4)③ 皇祖、天神を鳥見山に祭る
前630 (全31)④ 諸国巡幸、民事を祭すの秋津島号起る
前555 (全76)⑤ 神武帝崩御 (寿137)

之を滅して郡縣とした。猶南部には漢族が居て、馬韓(西)、弁韓(南)、辰韓(西)の三部に分れ、之を三韓と云って早くから我国と交通が開けた。後ち辰韓の地に朴赫居世が新羅の国を建て、北部の地に滿洲の朱蒙(東明王)が来て高麗(高句麗)を起し、又弁韓の一部には大加羅の国があった。即ち当時の朝鮮には新羅・高麗・大加羅等の国々があったが、大加羅は新羅の侵略に堪えず、此年蘇那曷叱智ソナカシチを使として朝貢し我が援を乞うた。朝廷、塩乘津彦を遣わして之を鎮めしめ給ひ我國の勢力半島に及んだ。これ後の任那日本府の起原である。

● 島に寄り来る 蘇那曷叱智……前33

(附記)

1. 任那の日本府

大加羅は垂仁朝、任那と改称せしめられ日本府を置き治められた。後世「カラ」とは外国の意味にもあった。

2. 朝鮮の三国

此後15年を全、即ち前18年、東明王の子温祚王は馬韓の地に拠って百濟の国を起した。新羅・高麗・百濟を三国とよぶ。

(注意) 200年代、神功皇后の新羅征伐、255年、王仁来朝の項等参照。

{年記}

前29 ① 垂仁即位

前26 (垂仁・4) ③ 狭穗彦反す(翌年10月伏誅)

前23 (垂仁・7) ④ 相摸の始

前18 (垂仁・12) 温祚王の百濟建国

前5年 神器を伊勢に遷す(垂仁25年3月)

(伊勢内宮の起り)

崇神天皇は敬神の御心深く三種の神器を宮中に置くは畏しとて、前92年鏡と劔とを大和の笠縫邑に遷し、皇女豊鍬入姫命トシケイノヒメノミコトをして祭らしめ、別に模造した鏡・劔を玉と共に宮中に置かしめられた。次の垂仁天皇は更に之を伊勢の五十鈴川のほとりに遷し、皇女倭姫命ヤマトヒメノミコトをして祀らしめ給うた。之が今も国民崇敬の中心なる皇大神宮(内宮)である。

明治天皇の御製に

昔より流れたえせぬ五十鈴川

おほよろづ世も澄まむとぞ思ふ

とある如く、永えに我國を守りて在す伊勢の大神は、此の御鏡を御震代として祀り奉ったものである。

● おがれは絶えず……前5

(附記) 神器の中、劔は此後日本武尊の事により熱田神宮に祀られるに至った。

前2年 殉死の禁(垂仁28年11月)

これまで貴人が死ぬと、臣下の者や愛養の富類ふどまで生きながら墓の側に埋める殉死と云う風習があった。天皇之を憐れみ固く此風習を禁じ、うち皇后日葉酢媛ヒツハスノヒメの崩せられた時、野見宿弥の議を用い、埴(粘土)で造った

土偶(埴輪)を以て殉死者に代えしめ給うた。よって此後には
貴人の墓辺に哀しむべき悲鳴の声を断つに至ったと云う。

● これは埴輪……前2

(附記)

1. 野見宿弥

出雲の人、天穗日命の後で勇力あり、大和の人当麻蹶速^{タマノハヤヒ}
と相撲して蹴て之を殺し(相撲の起原)朝廷に用いられた。
後埴輪を以て殉死に代える事を建議してその功により
土師^{ツチノシ}の姓を賜った。此人形や陶器の祖である。
菅原氏はその末裔に当る。

2. 上古の風俗 衣服は絹又は麻・楮の皮等で織った筒
袖の上衣に褌をつけ、勾玉・管玉等をつぶき頸・腕などを
飾った。頭髪は男はみづらに結び、女は後に垂れ、又は
鬘に結う。家屋は木造の掘建て、藤葛を以て結び
葺きにする。食器は素焼の土器又は木葉を用いた。

(年記)

紀元3(垂仁32)の皇石鏡、埴輪・土偶を以て殉死に代う
全 6(全 35) 諸国に命じ地海を開く(其後500年)
全 71(景行 1) ③ 田道間守、橘を得て帰る ④ 景行帝即位
全 82(全 12)の熊襲反す

82年 熊襲親征(景行12年8月)

九州南部の熊襲は強暴で未だ全く皇威に服せず、
景行天皇の御代に叛いたので、天皇筑紫高屋の宮に
行幸之を親征あり、12月その八十餘帥を誅し翌83年
五月熊襲悉く平定した。

○ 行く帝旗 熊襲討たんと……82

(附記)

日本武尊の西征 景行天皇親征の後、程なく熊襲又叛いた
ので皇子小碓尊が天皇の命により征伐なさった。尊、時に年
十六、女装して賊魁川上麁師を誅しその余類を平らげお選
りにあつた。此時麁師は尊の武勇に驚き、死に臨み皇子に
日本武尊の尊号を奉ったと云うことである。

熊襲は九州南部、日向・大隅・薩摩に住み行く年人である。
それ等の占有地を襲う国と号し且つ種族が多いうで熊襲八十餘と云わ
れた。

(年記)

95(景行25)④ 武内宿弥に東北諸国を巡察せしむ

97(全 27)③ 熊襲反す

97年 日本武尊熊襲を征す(景行27年10月)

○ 令に勇みて 皇子出でましぬ。……97

110年 日本武尊の東征(景行40年10月)

日本武尊は熊襲の再叛を討ち平けてお選りにあつたが、
其頃東国の蝦夷頻りに騒しく、さきに天皇の命によりその地方を視
察した武内宿弥がその状況を報告し、討つて取るべしと奏上した
ので尊は更に詔を受け、征討にお向いにあつた。

先ず大和から伊勢神宮に詣で叢雲劍を受け、駿河
(今の焼津辺?)で賊の為に火難に遭われたが、草を糺
いでその難を免れ(これが神劍を草薙劍と云う)進んで
相模から海上上総に渡り更に日高見国(今の北上川辺)の賊
の根拠地を征伐し、武蔵・甲斐・信濃を通過して尾張に出

で更に近江の膳吹山の賊を討ち給うたが、此時病を得て遂に伊勢の能褒野に薨せられた。御年三十二。尚神祇は尾張に留り置かれたので、後に宮を建てられたのが今の熱田神宮である。

○ 蝦夷の地に 大皇子の行く 別れして…… 110

(附記)

1. 蝦夷

古代はエミシと云い、中古以後はエゾと云う。今の北海道とアイヌと同族。その頃の風を記して「男女皆文身、雑居して父子の別なく、冬は穴、夏は巢に住む、農事を知らず、鳥獣を射て食とし、羽皮を衣とす、勇悍強暴、射に巧、常に矢を髻中に載めて、好んで劫盜し、趨捷飛ぶ如し」とある。野蠻慥慥の様子が見れる。

2. 御諸別王の統治

日本武尊の後、景行天皇親しく東國を巡幸し、次で豊城入彦命の曾孫、御諸別王をしてその地方を治めしめられた。

3. 弟橘媛命

日本武尊が相模から上總に渡られた時海流れて舟が覆らうとしたので、妃弟橘媛命は身を激浪に投じて海神を慰め、尊を救い出した。これから此海を「走水」と云う。

うち、尊は碓日坂(古事記に足柄山とあり、とにかく上野の碓氷峠ではない)により東南を望み、妃を偲び歎じて「吾妻はや」と宣った。これから東國を「吾妻國」と云うと傳う。

4. 連歌の始

日本武尊帰路、常陸・武蔵から甲斐に出て酒折宮に在した時、「新治筑波を過ぎて我夜か寝つる」とか歌いがあると、御火焼の老翁次いで「かぐおべて夜には九夜日には十日」と歌った。之が連歌の始だと云う。又神代に始るとも云う。

(年記)

113年 日本武尊薨す(景行43年)

○ 伊吹山 伊勢路は暗く 時雨けり…… 113

123(景行53) ④ 天皇東國巡幸

126(全56) ⑤ 御諸別王東國巡撫の任を受く

131 ① 成務即位

133(成務3) ② 武内宿弥 大臣とある(大臣の始)

135年 国造・縣主の増置(成務5年9月)

成務天皇の御代、朝廷に大臣を置いて武内宿弥を之に任じ、又地方は山河の形勢によって国縣を分け、神武天皇以来置かれたもの、外に六十三國を定め合せて九十一國とし、国造・縣主・稲置を置き諸般の制度を整えられた。これ等は国力の発展を示すもので、やまとは始めて全国の大号とあつた。

○ 今は国 榮えて多き 主・造…… 135

(附記)

大臣と大連

成務天皇の三年(133年)武内宿弥を大臣に任じ、うち仲哀帝の元年(192年)大伴武持を大連とした。これ大臣・大連の始である。

(年記)

192(仲哀1) ① 仲哀帝即位 ② 大伴武持大連とある(大連の始)

193年 仲哀帝の熊襲親征(全帝2年3月)

○ 穴門まで 利剣をとりて 連まれる…… 193

200(仲哀9) ③ 仲哀帝 樓日宮に崩(全52)

200年、神功皇后の新羅征伐(仲哀9年10月)

第十四代仲哀天皇の御代に熊襲また叛いたので、天皇は皇后^{ミコノミコ}息長足姫命と共に筑紫^{ツクシ}の檉日宮に幸して之を討ちにおり、幸半に天皇陣中に崩じ給うた。皇后は熊襲を討ち、新羅の後援によるとし、喪を秘し大臣武内宿弥と謀って別將をやり熊襲を平け、此年親ら海軍を率い、海を渡って新羅を征伐おさった。

新羅王波沙麻錦その威恩に恐れ降り、今より後、^{ツクシ}飼部とあり、年毎に棹楫乾さず貢を奉らん。たとい日輪西より出で鴨緑江さかさまに流れるとも此誓に背きまつらじと誓った。次で百濟・高麗も亦降り朝貢を約したので、任那に内宮家を置き大矢四宿弥を鎮將とし十二月筑紫に凱旋おさった。それから熊襲も永く叛かおくおった。

○ 韓国に 湧き立ち起る 我が凱歌……200

(附記)

1. 皇后の摂政 皇后は御凱旋の後、筑紫で應神天皇を生ま、その後久しく政を摂し給うた。これ摂政の始である。後世 皇后の盛業を仰ぎ 尊んで 神功皇后 と申す。
2. 武内宿弥 宿弥は孝元天皇の曾孫で、景行帝の時蝦夷を巡視し、成務帝の時大臣とあり、神功皇后に従って新羅を征し、更に應神・仁徳まで五朝に仕えた国家柱石の臣である。子孫また大に栄え、葛城・平群・蘇我等の諸氏

に分れ要路を占めた。但し以上は俗説で、宿弥が五朝に歴任して二百九十才又は三百六十余才を保ったとあるのは、系圖の祖漏から三人を一人にした誤である。

3. 關所の始及三關

神功皇后新羅より御凱旋の時、忍熊王の乱を防ぐ為め針門と吉備との界に 和氣關 を設けた。これ關所の始である。尚、奈良時代に三關とあるのは伊勢の鈴鹿・美濃の不破・越前愛媛で、嵯峨帝の弘仁元年からは安房が収めて逢坂の關を加え三關とよぶようになった。

(年記)

201(神功攝政1) ① 神功皇后の攝政(攝政の始)

269(全 69) ② 神功皇后崩す(寿100)

270(應神1) 應神天皇即位

283(全 14) ③ 百濟王維衣女を貢す

283年 弓月君秦人を率い歸化す(應神14年)

○ 國に歸す 弓月の君と その民と……283

284(應神15) ④ 百濟王阿直岐をして良馬を獻す 稚郎子之に学ぶ(漢学渡来の始)

285年 王仁、論語・千字文を獻す(應神16年2月) (漢学の渡来)

前の年百濟から阿直岐が来て良馬を獻じ、又此人よく聖典に通じて居たので天皇は皇子菟道稚郎子をして就き學ばしめられた。これ我國に公然漢学の渡った始である。

更に此年天皇の召により博士王仁(支那漢高祖の後)が来て論語十卷・千字文一卷を獻じた。皇子は又之にお學びにふった。猶この二書のみならず、支那の書物が追々

傳えられた。此後王仁の子孫は河内に居て西文氏フキノノリと称し、代々文筆を以て朝廷に仕えた。

○ 書くこと 読むこと王仁に習い得て……285

(附記)

阿知使主 其後四年支那後漢の靈帝の子孫阿知使主は、其子都加使主と共に十七県の民を率いて帰化した。その子孫は大和に居て漢氏を称し又東文氏フキノノリとも云って代々記録及織物の業を掌った。坂上田村麻呂は此末である。

(年記)

289年 阿知使主等帰化す(應神20年9月)
(漢氏の祖)

○ 韓を全て 大和に使主等来住し……289

300(應神31) 新羅造船工を献す

306年 吳の国に織縫工女を求めしむ(應神37年2月)

○ 支那にまで 渡りて来む 機つ姫……306

310年 支那の縫工女来る(應神41年2月)

さきに應神天皇の十四年即西暦283年百濟王、縫衣女を貢した。又此年支那人弓月君は百濟を全て帰化し養蚕・織物の業を傳えた。斯して此頃百濟から縫工・織工・鍛工・造酒工など続々我國に来たが、應神天皇は更に306年阿知使主を支那の吳(揚子江以南の地方)に遣し、縫工女を求めしめられ、之が来たのが此年で天皇崩御と同年である。

○ 支那国ゆ あれ縫工女が 渡り来る……310

(附記)

1. 弓月君 融通王とも云って、支那秦の始皇帝の後である。

應神天皇の14年百廿七県の民を率いて帰化し、その子孫は秦氏を称して山城・大和辺に住み、我國産業の発達に大なる貢献を爲した。

2. 漢織・吳織 うち、470年即ち雄略天皇の14年正月に吳から漢織・吳織等が来た。この二年前の4月身狭村王春、檢限民使博徳等を吳にやつて求めしめられたによる。

水居宣長の古事記傳には「……雄略の御代に初めて吳の國より参れるはたかりの珍らしくもてはやさるゝまいに、其名高くありて遂に異國のはたかりをば總て吳服織ウキモノと云い……」吳服の名が起つたと説いて居る。

313年 仁徳天皇即位(1月)

應神天皇崩じて皇太子稚郎子は、皇位を御兄大鷦鷯尊オホササガに譲らんが爲に自殺おさつたので、尊はやむなく此年御即位にあられた。之を仁徳天皇と申す。

それまで代々の都は大和又は河内にあったが、此頃朝鮮との往来ますます繁くあつたので天皇は都を難波ナニワ(後の小阪、今の大阪)にお遷しにあられた。

○ さぐ浪も 大御代祝う しらべして……313

(附記)

1. 御仁政の一般 仁徳天皇民の貧きを見て三年の間課役を免じ、宮垣の壊れを意とせられず「民の貧きは朕の貧きあり民の富めるは朕の富めるあり」と仰せられ、又産業を奨め、堤を

築きて水害を防ぎ、池溝を掘って水利を良くし、橋を架け道を通じて交通の便を計り、或は荒地を拓いて良田とする等頻りに仁政を施し給うたから人民大にその徳を慕った。

2. 兄弟御相続の始 天皇の皇后 磐之媛 は武内宿禰の孫で、葛城襲津彦 の女であるがその御腹の履仲・反正・允恭の三天皇が此後相ついでお立ちにおつた。皇位御兄弟に及ぶ始である。

3. 仁徳帝陵 御陵は堺市の東郊にある瓢塚で大仙陵と称し、日本第一の大きな御陵である(境域約430平方メートル)

4. 氷の飲用 仁徳の御世始めて夏に氷を飲用されたと云う。

{年記}

316(仁徳4)① 三年間の課役を免す(10年10月に及ぶ)

367(全55) 上毛野田道蝦夷を討ち致死す武内宿禰死す

399(全57) ① 仁徳崩御(寿110)

403(履仲4) ① 始めて諸国に吏を置く

405(全6) ① 始めて藏部を置く ② 履仲崩(寿77)

415(允恭4) ① くがたち(羅神揮湯)を行い姓氏を正す

456(安原3) ① 眉輪王の変 ② 雄略即位

463年 吉備田狭任那で反す(雄略7年)

○ 田狭反すは 腹すえかねて 叛きけり……463

470年 漢織・吳織工女来る(雄略14年1月)

○ 出て見れば 娘ばかりの 渡り鳥……470

471(雄略15) 大藏を置く(三藏分立)

478年 豊受大神を伊勢に遷す(雄略22年9月)

雄略天皇は天性勇武、眉輪王の変を鎮めて即位し、政治に勵み、養蚕をすいめ、絹織業を起し、又百濟から、織工陶工・画工・鞆工等をよび、更に支那から織縫工女

を召し給うたので、我国の産業大に進歩した。

又天皇は衣食の神なる豊受大神を丹波(今の丹後)から迎えて伊勢の山田に遷し、五十鈴川上りの天照大神と共に御崇敬にあつた。これが今の伊勢の外宮である。

○ 豊受の御社高き 山田原……478

{所記}

1. 天皇の御武勇 雄略天皇は頗る勇氣に富ませられ、葛城山で猪狩をおこした時、猪を蹴殺された事は有名な話だ。

2. 皇后幡梭姫 内田の功多く自ら桑を摘み、茶を飼つて籠を天下に垂れ給うた。

3. 三藏分立と蘇我氏 雄略帝時代産業栄え国庫充實したので従来の内藏・畜藏の外に新に大藏を立て、蘇我満智をして三藏を供せ掌らせ給うたのでこれから蘇我氏財政の实権を握り次第に勢力を加えるに至った。

{年記}

482(清寧2) ① 億計・弘計二王を播磨より迎ふ

487(顯宗3) ① 紀大磐 任那で反す

498(仁賢11) 平群真鳥 誅せらる ② 武烈即位、大伴金村

512(継体6) ② 金村任那の四郡を百濟に與ふ。 大連とある

522年 司馬達等米り佛像を傳ふ(継体16年)

(佛教渡来の始)

○ 日本に 来て御佛の 草を分け……522

527(継体21) ① 近江の毛野に韓土を討たしむ ② 磐井反す

528(全22) ① 物部麁鹿火 磐井を誅す

531 ① 安閑即位

537(宣化2) ② 大伴狭手 任那を救ふ

539 ② 欽明即位

552年 百濟王佛像經論を献す(欽明13年10月)

(佛教の傳來)

佛教は西紀前五百年代、印度の釈迦の創めた宗教で、其後中印度の阿育王・中央アジアのカニシカ王等熱心に布教し、東漢明帝の時支那に入り其後三韓に入り我国に傳った。

初め継体天皇の十六年(528)支那梁の人司馬達等シマダト佛像を持って大和に来たが行われなかった。然るに其後約三十年を全た此年、百濟の聖明王が佛像經文を献じてその功德を称えたので佛教始めて流行し出した。而して佛教の傳來は我が国民思想に大影響を興えた。由来我が国民性は淡泊・真率・現世的・樂天的であったが佛教の感化により過去・未來を思い、因果應報を信じ、平安・懺悔時代頗る悲觀的であった。又政治上には朝臣間の権力の争に皇位継承の争が加って世に大きな争いの渦をまき起した。

○ 日本では 何だ佛で 喧嘩をし……552

(附記)

1. 佛教賛否の論及寺・出家・宗旨の始

天皇佛を納るべきかを群臣に諮りにあつた時、大臣蘇我稲目、大連大伴狭手彦は之を可とし、大連物部尾麻呂は中臣鎌子と共に国神の怒を招くとて之を不可とした。

依て稲目は佛像を賜り、自分の向原の家を寺とし、独り之を拜した。これ寺の始である。

後用明天皇二年に韓部多都名帝の病の御為に出家となり、徳齊法師と名けたのが出家の始で、推古33年、高麗の惠漢僧正来朝し三論宗を弘めたのが日本の宗旨の始だ」と云う。

2. 神道 神道明永に曰く、日本道は寔に開国自然の道也、その神道と云う、用明孝徳二帝紀に出づ易の所謂神道に非ず、神國肇めて儒佛の名有りて後神皇行ずる所を以て之を神道と称え諸佛と別つ、神代の人道便ち人世の神道也……云々

(年記)

554(欽明15)② 五經博士来る。

562年 任那日本府滅ぶ(欽明23年1月)

(朝鮮半島の形勢)

朝鮮半島我国に服して後、日本府の政令よく行われ、任那と百濟とは忠実我に従ったが新羅は叛服常なく又高麗は固遠く隔り厚々貢を怠った。然るに雄略天皇の時任那の国司吉備田狭新羅と結んで反し半島漸く乱れ次第で顯宗天皇の時、紀大磐又任那により、高麗と結んで半島の王となろうとして叛し、百濟の兵に攻められ敗走した。これ等鎮将の叛に加えて我對韓政策も失敗した。

大伴金村が継体天皇の時、百濟の請を入れ任那の地を割いて之を興えてから、任那我を怨んで又反し半島益々乱れた。金村はその失政により職を返き、大伴氏衰えた。

かく、神功皇后の征代によって伸びた我が韓土に於ける勢力は新羅の興起によって追々衰えて来た。

近江毛野は新羅を討ったが、偶々此の間に、
新羅と結んで反しその軍は進めなかった。遂に朝廷大連
物部麁鹿火に命じて磐井を誅しこれから物部氏勢を得た。
毛野は韓土に渡ったが、功成らず、召し返されて途に死
んだ。かくて半島益々多事となり、遂に此年新羅は百濟
を攻めて聖明王を殺し、又任那を滅して日本府を毀った。
天皇紀男麻呂等を遣し、日本府の回復を計らしめられた
が我軍敗北、任那の内附から此時迄凡そ六百年で日本府
全く滅んだ。

○ 日本府の 滅びて寒き 加羅の風……562

(附記) ○ 調伊金儺と其妻大葉子

調伊金儺は欽明帝の時紀男麻呂の軍に従って新羅を
征して捉えられた。新羅の將、刀を抜いて之に逼り、屍
を日本に向けて「日本の將之を食え」と呼ばせしが、伊
金儺は却って「新羅王我が屍をくらえ」と罵って殺され
其妻大葉子も亦捕えられ、日本に向いて領布を振り、最
後の遙拜をして悲壯な死を遂げ、其子、其子亦父の屍を抱
いて死んだ。或人の歌に

韓国の城の邊に立ちて大葉子は 領布振らすやも日本に向けて
と云ふのがある。

○ 其後代々の天皇韓土回復を計られたが、皆失敗し、天智天皇
の時全く放棄されるに至った。

{年記}

585 (敏達14) ③ 守屋等佛像を堀江に投ず④ 用明即位

588 (用明2) ④ 用明崩御 (寿69)

587年 物部氏亡ぶ (用明、2年7月)

佛教が傳えられてから、佛教派の蘇我氏と、排佛教派
の物部氏とは事毎に争った。蘇我稻目は自分の家を寺に
して礼拝したが、偶々疫病が流行したので、物部尾輿等
は、これ邪教を信ずる神罰だとし、寺を焼き佛像を難波
の堀江に投じた。よって西氏の争漸く烈しくなり、殊に
敏達天皇の時、新羅から又佛像を献じたので、馬子之を
祭ったが再び悪疫流行したので尾輿の子守屋、鎌子の子
勝海は馬子の佛殿を焼き佛像を堀江に棄てた。

其後敏達天皇崩じ、守屋は完徳部皇子を立てんとし、
馬子は 大兄皇子を立てんとし、馬子勝って用明天皇御即
位あつたが、天皇崩じて又争の火の手上り、遂に此年七
月物部守屋及完徳部皇子等蘇我氏の爲に滅された。斯て
馬子は妹の腹なる崇峻天皇を立て、蘇我氏ひとり勢を振
り佛教益々盛となつた。

○ 根絶やしに やがてされたり 物部氏……589

{年記}

592 ① 東漢の駒、崇峻天皇を弑す (寿13)

② 推古即位 (女帝の始)

593年 聖徳太子の摂政 (推古1年4月)

推古天皇は我国女帝の始、崇峻天皇の崩す

皇の皇位であつた方が天皇として立たれたの御名である。しかし政は用明天皇の第二子厩戸皇子(聖徳太子)が帝を輔けてお執りになつた。皇子は聰明で儒佛の学に通じ佛教の興隆に力め、政治上には支那の文物制度を入れて旧弊を洗い、外交上には隋と対等の交を開いて国威を伸し、学問技藝に支那の長を採り、国史を編み、美術工藝を興しなど、實に太子は我が上代文化の大恩人であつて此時代が文物燦然と光り出たのみならず後の大化の新政も實に太子の遺政に根ざしを見る。

○ 宣る声に 靈の世を布く 聖太子……593

注意 607「日本支那の交通始る」及 621「聖徳太子覺る」の項参照

(附記)

聖徳太子を厩戸皇子と云うのは、恐らく太子の御領地の名によるか又は御母間人皇后の御名の訛た^{と云う}、厩で産まれたからか^{と云う}のは俗説であるが、これには耶麻の降誕に附会されたものとして興味がある。又上宮太子と云うのは、大和飛鳥の橘寺の上宮で御生れに於たから^{と云う}。

(年記)

593 四天王寺建立

603 (推古11) ④ 冠位十二階を定む

604 (推古12) ① 始めて曆を用ふ

604年 憲法十七条を定む(推古12年4月)

○ 人の世の わけ憲法に 説ききかせ……604

607年 日本と支那の交通始る(推古15年7月)

(遣隋使の始)

此年聖徳太子は、鞍作福利を通事として大禮小野妹子を隋に御遣しになつた。支那との交通は既に古くからあつたが、國際交通の始つたのは此れからで、佛教の興隆と文化輸入の爲である。此頃隋は支那を一統して勢盛んであつたが、隋書によると太子の国書には「日出処の天子書を日没処の天子に致す恙きや」と記して対等の礼をお執りになつた。隋の煬帝^{ヨウダイ}見て喜ばず、而もその意気を怪み国風を見んとて翌年妹子の帰朝する時、その臣裴世清^{ハイセイ}等として来聘させた。

○ 船出する 我が遣隋使 靈は北へ……607

(附記)

1. 第二回遣隋使

翌年四月隋の裴世清妹子に従つて来朝し、九月妹子再び隋に遣された。その国書には「東天皇敬んで西皇帝に白す」とあつた。此時学生倭福因、高向玄理、僧旻、南淵請安等留學生八人^{ハチニン}に從つて行つた。更に此翌年妹子は帰朝した。

2. 第三回遣隋使 614年大上御田鈿を隋に遣され、翌年帰朝した。此れが遣隋使の終である。

注意 630年「遣唐使の始」の項参照

(年記)

607 法隆寺建立

608年 第二回遣隋使(推古16年9月)

○ 八名の 我が學生が 行く支那へ……608

610 (推古18) ③ 高麗僧曇徴等来る

614 (推古22) ⑥ 大上御田鈿を隋に遣す(翌年帰る)

- 616 (全24) ③ 桓武の人來る
 618 (全26) ④ 高麗朝貢 ⑤ 支那隋亡び唐興る
 620 (全28) 天皇紀、国紀を撰ぶ

622年 聖徳太子薨す (推古30年2月)

太子は攝政として三十年の間に光輝ある治績をお残しになった。即ち制度を改革して、冠位十二階を定め、憲法十七條を制し、百濟傳来の曆を採用し、天皇紀、国紀を撰み、支那との交通を開き、殊に佛教の興隆に力を尽されたから佛寺の建築盛に起り寺工、佛工、瓦工、画工等朝鮮及支那から渡来して我邦の美術工藝大に発展した。

当時帝都は大和の飛鳥地方にあったから美術史上飛鳥時代又は推古時代と云ふ重要な一時期を爲して居るのは太子の御力に由るのである。然るに御年四十九(一説五〇)で遂に此年2月22日飽波宮で薨去された。時の人大に之を哀んだ。

○ 人は皆 薨去の皇子を 悲しがり……622

(附記) 推古代の遺物

推古天皇元年に大和元興寺に始めて塔を建て又15年に建てられた法隆寺は推古式の典型で、金堂、五重塔、中門廻廊等は世界最古の木造建築であり、内に美術工藝品を多く藏して居る。当時の佛工としては鳥佛師(轉作鳥)があり、高麗から来た僧曇徴は画に巧みであり又紙墨等の製法を傳えた。

630年 遣唐使の始 (舒明2年8月)

遣隋使によって支那と我国との国交開かれたが、その後支那は隋亡んで唐が興った。遂に此年^{イカミマサ}犬上御田鍬、^{スシノ}葉師^{エニテ}惠日等天皇の命を受けて支那に行った。これが遣唐使の始である。時に唐は太宗の代であった。これから宇多天皇の寛平六年に至る凡そ二百年間に十二度の派遣あり、支那の文化は直接我国に入り、文物技藝大に開けた。

○ 船の月 支那へと犬が 渡る日に……630

(年記)

- 631 (舒明3) 攝州有馬温泉始めて湧く ④ 天皇幸す
 632 (全4) ⑩ 唐使高表仁來る、僧旻從り歸る
 637 (全9) 上毛野形名蝦夷を伐つ

640年 留学生(高向玄理、南淵請安等)唐より歸る (舒明12年10月)

○ はるばると 唐より歸る 倭学生……640

643 (皇極2) ⑪ 入鹿、山背大兄王を害す

645年 蘇我氏亡ぶ (孝徳、大化1年6月)

物部氏滅んで馬子独り威を振り、崇峻天皇の英明を恐れ弑し推古天皇を立て無道の振舞が多かった。その子^{エミシ}蝦夷大臣となり益々横暴を極めた。蝦夷の子入鹿は悪逆父にもまさり、聖徳太子の御子^{ヤマシロ}山背大兄王の人望を厭って之を害し、その一族を滅した。又わか家を^{ミカド}宮門、その子を王子と呼び衣服出入皆天皇の如くしたおど専横益々

甚しくして之を怨む声が高くなった。偶々皇極天皇の四年、三韓朝貢の日、中臣鎌足は同志石川麻呂が表文を読み終るを機とし、舒明天皇の御子中大兄皇子(後の天智天皇)と共に、大極殿上に侍する入鹿を斬り、直ちにその父蝦夷を攻めて自殺せしめ、こゝに蘇我氏亡んだ。其内宿弥が大臣となつてから、こゝに至る約五百年である。

○ 滅ぶなり 罪故蘇我の 根を絶えて……645

(附記) 1. 氏族制度

氏の制 我が国民は由来祖先を尊び血統を重んずる風習があつて上古は氏族制度により、国家社会を組織した。即ち同一の祖先から出た多人数の集團を氏と云い各氏には氏の上が居てその一族を統べ、多くの部民(部曲=伴部)及土地を私有し、一定の職業を世襲し、職名、地名を氏の名とし代々朝廷に仕えた。

齊部氏、王造氏(職名)葛城氏(地名)など。

部民も亦其職を世襲した。中臣氏には中臣部があつて、祭祀に従ひ、弓削氏には弓削部があつて弓矢製作に従ふなど。部民の大祖を伴連、祖頭と伴連と云い、伴連は(後)部民の

氏姓の制 氏姓とは家格を示す名称で、臣、連、直、首等

臣は皇別(皇族の子孫)連は神別(建國元勳の子孫)特に連はれて大政に参與するものを大臣大連と云つた。

此の氏と姓とを併せ稱えるのは普通より云へば何れも貴族である、例へば中臣連何某、藤原朝臣何某の中臣、藤原は氏、連朝臣は姓である。普通は只中臣部、秦部等稱えて姓はあつたそれ以下賤民は氏も無い。

○ 天皇は日本全国の宗家で各氏の上を点充せ給ひ直轄地には御縣、宅倉あり、直轄の部民には御名代部又は御子代部があつた。

2. 氏姓の整理 世を至るにつれ、氏姓が乱れたので元智天皇の時盟神探湯を以て之を正された。

大化の新政で氏族部民の制を止め、世襲の官職をやめ人材登用の路を開かれたが、猶氏姓は重んぜられ、後に天武天皇の時姓の等級を改め真人、朝臣、宿弥、忌寸、道師、臣、連、稻置の八等を定められたが永く行われず空名となった。

3. 名字 子孫の増すに従ひ同一氏でも更に称号を分る必要が起り、藤原頃から名字(苗字)が行われた。今は名字を氏とも云ひ昔の氏を姓とも云う。

第二史期 (大化新政一平氏滅亡)

646年 大化の新政 (孝徳、大化2年1月)

孝徳天皇位に即き、皇太子中大兄皇子中臣鎌足と共に天皇を輔け新に左右大臣、内臣を置き始めて年号を立て、大化と云い、此年改新の大詔をお下しになった。

此の時の新政は明治の維新と共に日本の二大変革で、国家の形骸はこの時できたと云ってよい。即ち今までは神武帝以来氏族政治であったが、年代を至て漸く弊害を生じたので之を一変し大改革をなしたものである。

新政の大要は

1. 官職の世襲を廃し、皇族以下諸豪族の私有した土地人民を悉く朝廷に収めて公地公民にした。
2. 人民を校べて戸籍を作り、班田收受法を設けて人毎に口分田を給した。
3. 税制を定めて租庸調の法を設けた。
4. 地方を国郡里に別け今迄の国造縣主をやめ、新に国司、郡司を置き、要地に關を立て諸道に駅馬、傳馬を置いた。これ後世宿場の起原である。
5. のち大化五年中央政府に八省百官を置き政務を分掌せしめ官位、礼法を定め、人の才能により官位を授けた。

この新政はさきに支那に留學して帰った高向玄理僧足等を用ひ隋唐の制度を参酌して定めたもので中央集権の實漸く成り天皇は直接人民を統治なさる事となった。

○ 人仰げ 大化の御代の 日の光り……646

(附記)

1. 班田收受法 男女六才になれば男には二段、女には其三分の二の田地を授け、其人が死ぬば朝廷に収める。此の制度は延喜の御代全く滅んだ。
2. 租庸調 (税法)
租は田地の收穫中から一定の稲を納めしめること。
庸は公役に人民を用ひ又は其代りとして米布等を納めしめる事。
調は絹綿其他各地の産物を貢がしめること。
3. 牛乳と蘇 孝徳天皇の時善那(一説福常)が始めて牛乳を献上し、賞して和葉使主の百姓を賜ひ代々牛乳の事を知った向、蘇と云う今日のコンデンスミルクの如きも此頃造られたと云う。

(年記)

649年 冠位を制し八省百官を置く (孝徳大化5年2月)

○ 八省を 立ひ政務の 掃きあげ……(49)

650 (孝徳、白雉1) ② 改元の始 (大化改め白雉)

655 (斉明1) ① 皇極坐祚 (坐祚の始)

658年 阿倍比羅夫蝦夷と肅慎を討つ (斉明、4年4月)

東国の蝦夷は既に従ったが、日本海岸の越蝦夷はまだ従わなかったが孝徳帝の時越国に淨足、磐舟の二柵を設けて之を鎮められた。

孝徳帝崩じて中大兄始めて寧詔され斉明帝と申し中大兄

皇子が政をお執りになった。

遂に此年、越国守阿倍比羅夫は命により舟師百八十艘を以て今の秋田、青森、北海道辺を平げ、翌年郡領をシリベシに置いて帰り、更に其翌年蝦夷を案内として露領沿海州辺に居た靺鞨(靺鞨ト云云)を伐つて大功を立てた。

○ 比羅夫とは 苦手だなど 弱る賊……658

(附記) 朝鮮半島の抛棄

新羅は任那を滅して後、独り勢を張り唐の援を得て遂に660年百濟を降した。百濟の遺臣(鬼室福信) 回後を圍り、援を我に請うたので齊明帝皇太子と共に御親征あり筑前に進み、朝倉宮で崩じ給ひ、皇太子は阿曇比羅夫、阿倍比羅夫等として行き討たしめ、我軍唐兵と白桂江(錦江)に戦つて利よく百濟終に滅びた。後五年高麗も亦唐に滅された。皇太子筑紫より帰り大津宮で即位し天智天皇と申す。

天皇よく時勢を察し、半島保有の不利を見よと棄て専ら内政に心を注ぎ給うた。そこで神功皇后親征以來四百年間服属した半島全く我を離れ、新羅は半島を一統し表面唐に服した。尚武国は唐の来襲に備ふる為、筑紫に水城を築き、志岐村馬を囲めたが何事もなく、再び好き通じ、遣唐使をも遣した。

{年記}

- 659 (齊明5) ③ 比羅夫東段夷を平げ郡令領をシリベシに置く
- 660 (天智1) ④ 比羅夫再び靺鞨を伐つ ⑤ 中大兄皇子始に漏刻を作る
- 661 (天智2) ① 新羅親征 ② 齊明帝朝倉行宮に崩す(壽68) 皇太子制を統す(辛酉甲子に當る)
- 662 (天智3) 帝始て令を制定す
- 663 (天智4) ⑧ 新羅百濟を亡す
- 666 (天智7) 僧智由指南車を作る

667年 大津遷都 (天智6年3月)

(天智天皇の御事業)

齊明天皇の崩後六年の間、中大兄皇子は尚皇太子として政を執り此年遂に都を近江の志賀大津宮に遷して翌年即位し益々諸政をお整えになった。これを天智天皇と申す。

帝は皇子として前に蘇我氏を滅し皇太子として大化の新政、蝦夷征伐、朝鮮半島放棄等の大業を断行され、御即位の後は専ら心を内政に用ひ給ひ、中臣鎌足に命じて始めて近江朝廷の令を制し又始めて学校を興し城を築き戸籍を定めて庚午の年籍を作りなど著しく御治績をお給うたので、後世帝を我国中興の英主と仰ぎ奉る。

○ 琵琶の湖に 花の影添う 都成り……667

(附記)

1. 日本国号

東国通鑑に「新羅の文武王十年に倭国改めて日本と号す、自ら言ふは出る所に近しと以て名と為す」と。此時は天智天皇の九年(670年)であつて、支那では唐高宗の咸亨元年のこと。唐書にも同様の記事があり、それ以来全書に日本又は日本東と曰うのを見れば、天智天皇が国号を改めて之を外邦にお告げになつたものかとも思われる。

2. 時計及時の鐘

660年、天智帝まだ皇子の時始めて漏刻を造つて時を計り、670年即天皇の九年諸公卿勤向及下万民の業、用向殊に約束の延引万事好都合とあつて諸国に令し始めて時の鐘をうたしめられた。

3. 壬申の乱

天智天皇は始め皇弟大海人皇子を皇太子とせられたが推古
 帝以来皇后の立たれる例により、皇后を戴き大友王之を輔
 佐せられる意味で大海人皇子は之を辞した。しかるに671年
 天智天皇崩じ、大友皇子 権臣に推され即位したが流言多く
 (弘文天皇)

翌年吉野に僧とあつて居られた大海人皇子は兵を起し、不破
 (美濃)から近江に向われた。近江軍利おく大友皇子遂に近
 江の山前で崩せられ673年大海人皇子(天武天皇)の即位と
 あつた。

4. 志賀の都の廢滅

当時大津遷都を好まないものが多かったから天武天皇は再
 び都を大和の飛鳥淨見原にお遷しになった。

さび波や志賀の都は荒れに
 昔ながらの山嶽かな(平忠度)

(年記)

668(天智7)⑦ 越国、燃土、燃水を献ず⑧ 唐高麗を七す

669年 中臣鎌足薨ず(天智、8年10月)

中臣鎌足は鎌子五世の孫で博学にして見識高く、中大
 兄皇子と共に蘇我氏を滅し、皇極、孝徳、天智の三朝に
 仕え大化以来常に内外の政に契つて力を尽し、天智天皇
 を輔けてその大業を成さしめ奉つた。此年五十六才で
 薨じたが、臨終には天皇親しくその邸に臨んで慰問され
 大織冠(最高位)を授け、藤原の姓を賜つた。死後大和
 の多武峰(談山神社)に祀られ子孫長く栄えた。

○ 藤原の 一葉を惜む 綸旨あり……669

(年記)

670(天智9)② 戸籍を作り盜賊と浮浪を断ず(庚午の年籍)

671(天智10)① 大友皇子始めて太政大臣とある② 弘文即位?

672(弘文1)③ 大海人皇子兵を起す(壬申の乱)

676(天武4)④ 肉食を禁ぜらる(肉食禁止の令)

684(天武12)⑤ 八色姓を定む

690(持統4)⑥ 元嘉、儀鳳の兩元を行す

697(文武9)⑦ 先帝持統を太上天皇と稱す(太上天皇の始)

699(天智3)⑧ 多祇、掖珥の未朝す

700(天智4)⑨ 僧道照を火葬す(火葬の始)

701年 大寶律令成る(文武、大宝1年8月)

天智天皇の近江の令を天武天皇の時修成され、更に文
 武天皇は^{オホカミ}忍壁親王、藤原不比等(鎌足の子)に命じて律令を
 改修せしめられ、大宝元年に完成した。之を大寶律令と
 云う。律は刑法で、罪を決する標準規定 令は法令で
 政務に関する種々の規定である。

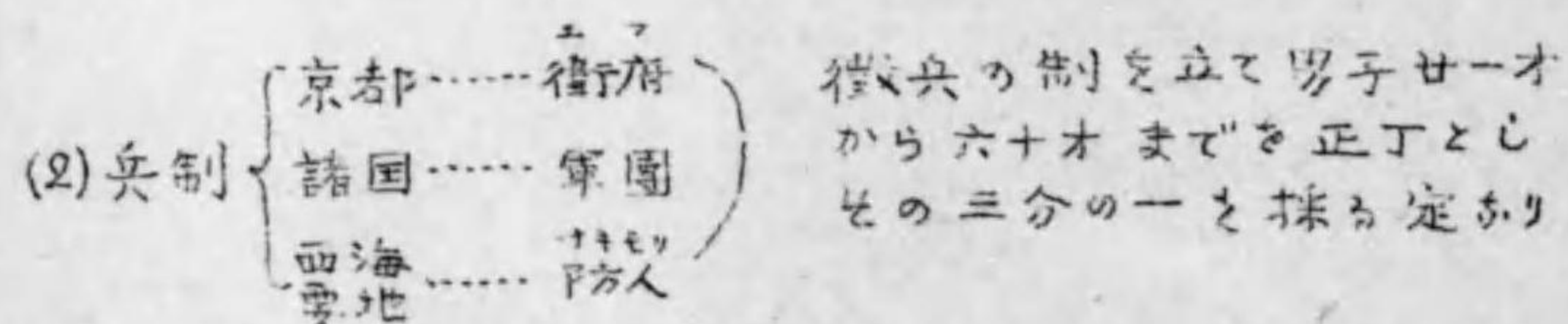
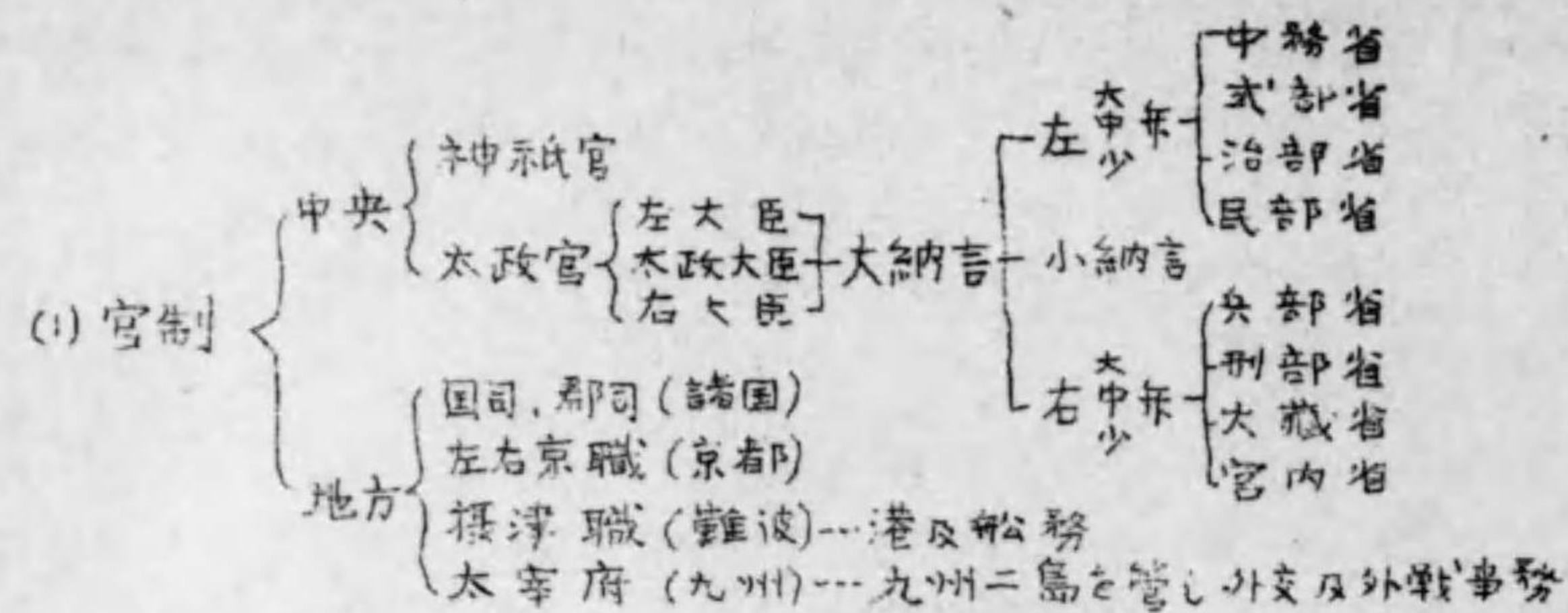
尚律令は元正天皇の時藤原不比等をして更に修正を加
 えしめられたのが養老律令である。

以上の律令は唐制に模し我国古来の習慣を斟酌して定
 められたもので、永く我国法制の根本とあり明治に及ん
 だ。

○ 文武の世 我が律令が 撰ばれる……701

(附記)

1. 大寶律令の大要



(3) 学制 { 大学 (京都) } 其卒業者は官吏に採用する。
 { 国学 (諸国)

(4) 田制税法 = 略大化の制度に同じく口分田を班せ授け六年毎に收授し、租庸調の税法を行う。

(5) 刑律 = 笞、杖、徒、流、死の五刑、君親に対す罪尤重し

2. 格と式

格とは時代の進むにつれ法令の範囲内に於て起る変化を云い、式は實際に行う法令の細目である。

(年記)

707 元明即位。

708 (元明、和銅1) ① 武藏和銅を献ず ② 和銅開珎を鑄る。

710年 奈良奠都 (元明、和銅3年3月)

上古は殆ど代毎に新宮を営み、都を遷されたが外国との交通も開け、国運進むにつれ、帝都を壮大にする必要が起ったので、天皇は大和奈良の地を相し、唐の長安の

都に倣い、左右の両京を立て条坊の制を定め、立派な帝都をお建てになった。これが此後光仁天皇まで七代七十余年間の都となった平城京である。

此京は三方山で囲まれ南方開け交通の便あり、飛鳥地方旧族の圧迫を離れ自由に政を行ふ事ができた。遷都の布告は和銅元年に出たが工事成つてお移りなされたのは和銅三年の花さく春であった。

○ 都遷り 老も若きも 笑う春 ... 710

(附記)

1. 貨幣の鑄造 (和同開珎)

元明天皇御即位の始、武藏国から銅を献じたから年号を和銅と改めまた和銅開珎 (同は銅、珎は宝の略) と云う銅銭を鑄造された。これ我國の貨幣の始で、これから追々物々交易の不便が除かれた。

2. 卑人及西南諸島の服属

熊襲は神功皇后の時以来帰順したが九州南部の卑人は長く従わなかつた。元明天皇の時薩摩の卑人入朝し、その一部元正天皇の御代再び叛いたので大伴旅人を遣つて鎮定せしめ漸く皇威に服した。又大隅以南の諸島中掖珎 (屋久島) は推古朝に入貢し、次で文武天皇の時代多禮 (種子島) 奄美 (大島) 鹿野 (徳之島) 等来貢、元明天皇の時、信覺 (石垣島) 赤美 (久米島) 等の人民亦服属し、西南諸島も亦漸く王化に浴するに至つた。

712年 古事記成る (元明、和銅5年1月)

元明天皇は太安麻呂に詔して、さきに 稗田阿礼 が天武天皇の命を受けて、口傳を暗記して居るものを書き記さ

しめ給うた。これが即ち古事記三巻で、我國開闢の初から推古天皇の御代に至るまでの事を記し今に残って居る尤も古く貴い書物である。

○ 百千代の ^{イニ}古語る ^{ニシ}古事の書……712

713年 風土記を編まじむ (元明、和銅6年5月)

古事記のできた翌年、天皇諸国に詔して地名を二字に改め、且つ好字を撰ばしめ、国々の山川、原野、地味、産物、傳説等を記して上らしめ給うた。之を風土記と云い、我國地理書の始である。但し今残ってゐるのは、常陸、出雲、播磨、肥前、豊後の五つだけ。

○ めいめいに 編んで風土記を さげけり……713

(年記)

715 ④ 元正即位

717 (元正、養老1) ③ 吉備真備、阿倍仲麻呂入唐

718 (全 全 2) ⑤ 藤原不比等大宝律令を修正し養老律令成る

720年 日本書紀成る (元正、養老4年5月)

元正帝が、舍人親王、太安麻呂等に命じ、国史を漢文で編まじめられたものが日本書紀で、紀三十巻、系圖一卷あり、神代から持統天皇の朝まで記してある。

○ みこと受け ^{カラヨウ}漢様で書く 我が歴史……720

(附記) 六国史

これから平安朝の中頃まで"に次々に国史が編まれ書記と共に六国史と呼ばれ今に傳つて居る。

書名	記載区間	撰修の時代	撰者
日本書紀	神武—持統	元正天皇	舍人親王等
続日本書紀	文武—桓武	桓武天皇	藤原繼縄等
日本後記	平城—涼和	仁明天皇	藤原冬嗣等
続日本後記	仁明御—代	清和天皇	春澄善繩等
文徳実録	文徳御—代	陽成天皇	藤原基至等
三代実録	清和御—代	醍醐天皇	藤原時平等

(年記)

720 ⑥ 藤原不比等死す

724年 聖武天皇即位 (聖武、神龜4年2月)

文武天皇崩じ給ひ、皇子猶幼く在したので御母元明天皇、御姉元正天皇相ついで位に即き以て皇子の御成長をお待ちなされた。然るに皇子既に長じ給うたので此年元正天皇位を譲り皇子の即位とふつた。これを第四十五代聖武天皇と申す。天皇始て陸奥国に鎮守府を置きて東夷を防ぎ又篤く佛教を信じ親ら三宝の奴と称して盛んに佛教を弘め、堂塔を興し給うたので美術工藝発達し學問又興つた。後749年(天平感宝元年)位を孝謙天皇に譲りついで太上天皇と称し、薙髮して勝滿と号せられた。至尊の出家こゝに始る後、756年(天平勝宝8年)寿五十六を以て崩じ給うた。

○ 守祀神 君九重に 立ちまじぬ……724

(附記) 光明皇后

天皇、皇太子の時藤原不比等の女^{ア スツレ}安宿媛を納りて妃とし、即位の後皇后となされた。藤原氏立后の始である。皇后容貌美しく光耀ありとて世に光明皇后と申す。慈悲の御心深く、天皇と共に篤く佛教を信じ、悲田院、施薬院 などを設け 孤兒、貧病者をお救にあつた。

(年記)

727年 渤海使始めて入朝す (聖武、神龜4年12月)

○ ^{マツ}蘇我の ^{カシ}頭がよこす 貢物...724
(但し入貢は翌年1月のこと)

729 (聖武、天平1) ⑧ 藤原光明子を皇后とす

730 (全 全 2) ④ 施薬院、悲田院を置く

736 (全 全 8) ⑫ 葛城王に橘の姓を賜ふ (橘氏の始)

740 (全 全 12) ④ 藤原元嗣反す (10月伏誅)

741年 国分寺を諸国に建つ (聖武、天平13年3月)

○ みこと受け 寺国々に 営みぬ...741

745 (聖武、天平17) ⑪ 僧玄昉を筑紫に貶す

747 (全 全 19) ④ 東大寺大佛 鑄造に着手

749 (全、天平勝宝1) ② 僧行基死 (782) ④ 孝謙即位

751 (全 全 3) 東大寺大佛殿成る

752年 奈良の大佛成る (孝謙、天平勝宝4年4月)

聖武天皇の御代は我国文明史上、天平時代と云って奈良時代の最盛期を爲した。当時支那は文化の最盛えた唐玄宗の時代で、その文化が我が留学生、遣唐使等によつてもたらされ日本に咲き誇つたのである。殊に聖武天皇は篤く佛教を信じ、諸国に勅して国分寺、国分尼寺を建てしめ、奈良に東大寺を造り、總国分寺とし大佛を安置

されに。

此の大佛は僧良年、僧行基等の勧めもあり、天皇の御発願によつて建てられたもので、天平十九年に工を起し三年を至て此年完成した。像の高さは16メートル余で我国古今第一の大作であり、又その前年でき上つた大佛殿は世界最大の木造建築物である。たゞ此後度々兵火に罹り、修補して大佛も今は僅にその一部のみに此時のを残して居るに過ぎない。尚奈良時代と云つて佛教が稍々日本的と云つたのは注意すべき事である。

○ 御佛や 奈良は七重の 雲迷い...752

(附記)

奈良朝時代の文物

1. 佛教の興隆とその六宗 初期に義淵あり、其の弟子に玄昉、良年、行基、道鏡などが出、唐僧鑑真又有焉である。殊に行基は諸国を巡つて人を教化し公益を計つた。此時の宗派には三論、成実、法相、俱舍、華嚴、律の六宗があった。

2. 美術工藝の進歩 佛教興隆の爲、東大寺、西大寺、薬師寺、唐招提寺等建立され従つて佛像、佛具等の製作多く、美術工藝の発達誠に空前である。当代の優麗、精巧の遺物は孝謙天皇の時建てられた奈良の正倉院に約三十点、今も保存せられて居て、世界の宝である。

3. 學問の発達 漢文学は唐との交通の爲大に進み、^{キビマキビ}吉備真備

阿倍仲麻呂は才名を唐まで表かした。

我国詩集の第一なる懷風藻は此代にかつた。

和歌亦大に榮え文武帝の代に柿本人麿が出 聖武時代山部赤人、山上憶良、大伴家持等が出た。これ等の人々の

歌を集めた 万葉集 は 我 國歌集の始で 国歌 の宝典である。又此時代の末には 印刷術 も起り。石上宅嗣の 莚 は図書館の始である。

4. 風俗 大化頃から奈良時代にかけて風俗も唐風を模して華美に流る。衣服はもと左袒であったのが右袒に改り袖も長くなり、屋根は碧瓦でふき、柱を赤く塗るふとの風起り、奈良の都は明るかったが、地方は未だ閉ざれて暗かった。
△青丹よし奈良の都は咲く花の白ふが女はく今盛あり (小野老)
△家にあるは詩に盛る飯を草枕旅にあれば柱の葉に盛る (有馬皇子)

{年記}

- 756 ⑤ 聖武天皇崩 (寿56)
758 ⑧ 淳仁即位
760 (淳仁、天平宝字4) ① 惠美押勝 (名原仲麿) を大師とす。
764 (全 全 8) ⑨ 押勝反死す ⑩ 孝謙皇祚
765 (称徳、天平神護1) ⑩ 道鏡を太政大臣・禪師とす
766 (全 全 2) ⑩ 道鏡法王とある。

769年 和氣清麻呂の忠節 (称徳、神護景雲3年9月)

奈良時代には佛教の隆盛につれて名僧も出たが、又我倭者も出て屢々紛乱を起した。

聖武天皇の御代に僧玄昉宮中に出入して専横、藤原広嗣之を除こうとして太宰府に兵を起し誅せられ、後、玄昉も退けられた。聖武天皇の皇女孝謙天皇立ち厚く佛を信じ、又不比等の孫藤原仲麿を信任してその勸により位を淳仁天皇に譲られ、仲麿は上皇から惠美押勝の名を賜り勢があったが、僧道鏡が用いられるに及んで之を怨み叛いて誅せられ上皇再び位に即き称徳天皇と申した。

時に道鏡益々信任太政大臣・禪師となり、法王の位を賜り恣に政を執り行った。此年太宰主神習宜阿曾麻呂、宇佐八幡の神託と称し「道鏡を皇位に即け給わば天下泰平ならん」と奏した。天皇まごは和氣清麻呂を宇佐に遣し神託を聞かしめられた。清麿は道鏡の威嚇を意とせず、天皇及び「廷臣列座の前で」還り奏して曰く「我邦は開闢以来君臣の分定まれり天日嗣は必ず皇統を立てよ。無道の者は速かに除くべし。」と憚る所なく述べたので道鏡大いに怒り清麿をカレロ穢麿と改め官を奪って大隅に流した。併し清麿の忠節によって道鏡の非望は挫かれ我が国体全きを得た。

○ 無茶坊主 腹を立て立て 落第し……769

(附記) 1. 水鏡によると阿曾麻呂の述べた宇佐八幡の神託を奏したのは清麿の姉法均尼である。故に此道鏡事件は始から阿曾麻呂、清麿、法均、藤原良継、百川等相謀って横道鏡を除く手段を言講じたものとも云われて居る。

2. 光仁天皇と天長節

翌770年称徳天皇崩じ、広嗣の弟藤原百川等は天智帝の御孫光仁天皇を迎え奉った。天皇直に道鏡を下野に逐ひつゝ清麻呂を召還し勤儉勵精弊政を除き給うた。天長節は此御代に始り、其後永く中絶して居たが明治元年再興せられた。

{年記}

- 770 (光仁、宝龜1) ⑧ 道鏡を下野に流す ⑨ 清麿を召す ⑩ 光仁即位

770年 經文印刷成る(光仁、宝龜1年)

○見事なる 物に陀羅尼の 和印刷……770

775年 此頃カナ(日本字)成る(光仁、宝龜6年)

○皆人よ 学べ日本字、日本語……775

775(光仁、宝龜6)⑩ 天長節の始 ○吉備真備死

781 ④ 桓武即位

784年 長岡奠都(桓武、延暦3年11月)

○蒙長岡 宿る暫しの 帝都かな……784

785(桓武、延暦4)⑧ 大伴家持死す

788(全 全 7) 最澄比叡山に延暦寺を創む ⑨ 紀古佐美を 征東大使とす

791(全 全 10) 大伴弟麻呂を征夷大使とす

794年 平安奠都(桓武、延暦13年10月)

第五十代桓武天皇は、平城京の情弊を一新するため、藤原種継の発議で、一旦山背(山城)の長岡に都を遷さる十年を全てさらに和氣清麻呂の議により山背国葛野郡宇太村の地を相し、此年都を此処にお奠めにあつた。

この京は平城京に倣ひ更に規模を大にしたもので中央に朱雀大路があつて左京、右京を分ち、その真北に大内裏、真南に羅城門あり、内裏の中央より少し東北に皇居あり諸官省整然とその周りに建てられて居た。

此平安京即ち今の京都の地であつて、この時から、明治天皇の東京奠都(明治二年)迄一千七十五年間歴代の天

皇は概ねこゝを都となさつた。

○都遷り 玲瓏として 天も晴れ……794

(附記) 平安時代 延暦13年から寿永4年平氏の滅亡まで約四百年間は天下の政令常に平安京から出たから、世に此時代を平安時代と云う。

(年記)

797(桓武、延暦16)⑪ 阪上田村麿 征夷大將軍となる

799(全 全 18)⑫ 和氣清麿死(年67)⑬ 天竺人錦標をもたす

801年 阪上田村麿 蝦夷を平ぐ(桓武、延暦20年9月)

阿倍比羅夫征伐の後も東北の蝦夷は屢々叛いたから、聖武天皇は大野東人を遣し陸奥(今の陸中)に多賀城、出羽(今の羽後)に秋田城を築かして之に備えられたがまだよく鎮まらなかつた。依て桓武天皇は延暦十六年、阪上田村麿を征夷大將軍に任じ之を討たしめられた。田村麿進んで此年開伊に至り、敵の巢窟をくつがえし翌年陸奥に膽沢城(今の陸中)を築いて鎮所とした。

田村麿は阿知使主の子孫で勇力人にすぐれ身の長五尺八寸(1.76米)胸の厚さは一尺二寸(0.31米)鬚は針金の如く、眼は鷹の眼の如くであつたと云う。

○勇と智の 我が田村麿 蝦夷恐れ……501

(附記) (1) 將軍塚 田村麿は811年5月年54で死んだが武裝のまま、皇城に向けて葬り国家の鎮護となさしめられた。此後將軍の出征ある毎にこの詔の例とあり世に將軍と云う。

(2) 嵯峨天皇の時 ^{ブンヤクマロ} 文屋綿麻呂 再び蝦夷の余類を平け、
膽沢城に鎮守府將軍を置かれた。

13) 朝鮮半島の變遷

天智天皇の7年使を遣り新羅に朝貢せしめられたが聖武
天皇以来礼を欠いたので淳仁天皇大に討伐せんとして米を
水ず935年(朱雀帝の時)新羅は高麗の王建に亡された。
王建は開城に都して半島を一統しその後五百年間続いた。

(4) 渤海の入貢

渤海は満洲地方に起りもと高句麗に属し、大祚榮の時には唐
に従り國勢張り、聖武帝の時我國に入貢した。桓武天皇の
時入貢は六年に一回と定め、此から百余年間我と交り、醍醐
天皇の時契丹に滅された。

(年記)

804 (桓武延暦23) 最澄空海入唐す

805年 最澄天台宗を傳す (桓武延暦24年7月)

○ 世にひびく 我が天台の 法の声…805

806 (平城、大同1) ④ 桓武崩 (寿70) ⑤ 平城即位

806年 空海真言宗を傳す (平城、大同1年8月)

○ 世に傳う 我が真言の 秘密法…806

809 ④ 嵯峨帝即位

810 (嵯峨、弘仁1) ③ 藏人所を置く

810年 葉子の乱 (嵯峨、弘仁1年9月)

桓武天皇の後に御子平城天皇立ち、御病を以て三年後、
御弟嵯峨天皇に位を譲り給うた。

種継の女荻原葉子は、平城帝の尚侍であったが、此年
兄仲成と謀り、平城上皇を再び位に即け奉り自ら皇后た
らんと、上皇に勧めて兵を起さしめた。

事敗れて上皇は剃髪し、仲成は誅せられ葉子は毒を仰

いで"死んだ"。此の乱について、上皇と天皇との御間柄
を疑う者があるが此お二人の間柄は甚だ睦じかつたので
あって、之を離間したのは全く葉子等一味の陰謀による
のである。

○ 夢を追う 兄と葉子の 悪企み…810

(附記) 制度の改革 (藏人所と檢非違使)

嵯峨天皇時勢を察し、此乱に先ち宮中に藏人所を置いて
機密文書を掌らせ、又830年檢非違使を置いて京都の警察
裁判を掌らせにふた。よって太政官の政務は多く藏人所
に、衛府の権力は檢非違使に移り大宝令の制度漸く改
った。

(年記)

811 (嵯峨、弘仁2) ② 平上田村麿死 (年54)

813 (全 全 4) ④ 文屋綿麻呂 蝦夷を平く

814 (全 全 5) ⑤ 皇子大納言 信に源の女を賜ふ (源氏の始)

815 (全 全 6) ⑥ 諸國に茶を植えしむの勅 撰姓氏録成る

816年 空海高野山を開く (嵯峨、弘仁7年)

佛教は奈良時代既に盛であったが、平安時代の初に、
最澄、空海の二高僧が出て新しい宗派を傳え更に一層隆
盛となった。此の二人は共に804年遣唐使に従って
入唐し、最澄は翌年帰朝して天台宗を傳え、更にその翌
年空海帰朝して真言宗を傳えた。

空海博学多能上下の尊信を得、遂に此年高野山に金剛
峰寺を建て、大に教を広め、諸國を巡って民利を興した

が、遂に835年六十二才を以て寂した。この後、醍醐

天皇の延喜二十一年(921年)弘法大師と謚された。

○ 世の無常 教え弘法 法を説き……816

(附記)

1. 大師号の始 最澄は1788年比叡山に延暦寺を建て、822年死んだが、清和帝の時(866年)傳教大師と謚された。これが大師号の始である。

2. 佛教の八宗 奈良時代の佛教は三論、法相、華嚴、俱舍、律、成實の六派で、三論、法相尤盛であったが平安時代天台、真言大に行われ八宗となり他を圧倒した。尚最澄、空海は天台、密宗佛教であったものを山岳に移す端を開いた。

3. 本地垂迹説 奈良時代に僧行基は神佛調和説を立てたが、最澄、空海等は更に一步を進めて本地垂迹説(神佛同作の説)の基をなし、我々敬神の人情に合せたから此後佛教益々弘く行われ神佛混淆する事となった。

4. 漢文学の隆盛と三筆

嵯峨、淳和、西帝の御好學により大に発達し小野篁、大江音人、都良香、菅原是善等の文学者が出た。殊に嵯峨帝は詩文に篁と才を競い、書では僧空海、橘道勢と並び三筆と称せられ論うた。

5. 学校 平安時には貴族が各々私立学校を立て子弟を教育した。重なるものは藤原氏の在学院、和氣氏の弘文院、在原氏の興学院、橘氏の学館院等である。亦空海は京都に^{ジュギョウ}紫雲^{シヨウ}種智院を建て、平民の子弟を教育し、異彩を放った。

(年記)

820 (嵯峨、弘仁11)④ 冬嗣、弘仁格式、内裡式を撰す

821年 藤原冬嗣 在学院を建つ(嵯峨、弘仁12年)
(私立学校の起り)

○ 世教への 在学院の 教の座……821

822 (嵯峨、弘仁13)⑥ 最澄寂す(年54又56)

826 (淳和、天長3)⑦ 冬嗣死(年52)

827 (全 全 4) ⑧ 藤原親王の子高棟王に平姓を賜ふ(平氏の始)

830 (全 全 7) 檢非違使廳を設く

842 (仁明、兼和9) 承和の変(皇太子恒貞親王廃せらる)

857 (文徳、天安1)⑨ 良房太政大臣となる

858年 藤原良房摂政となる(清和、天安2年11月)

(人臣摂政の始)

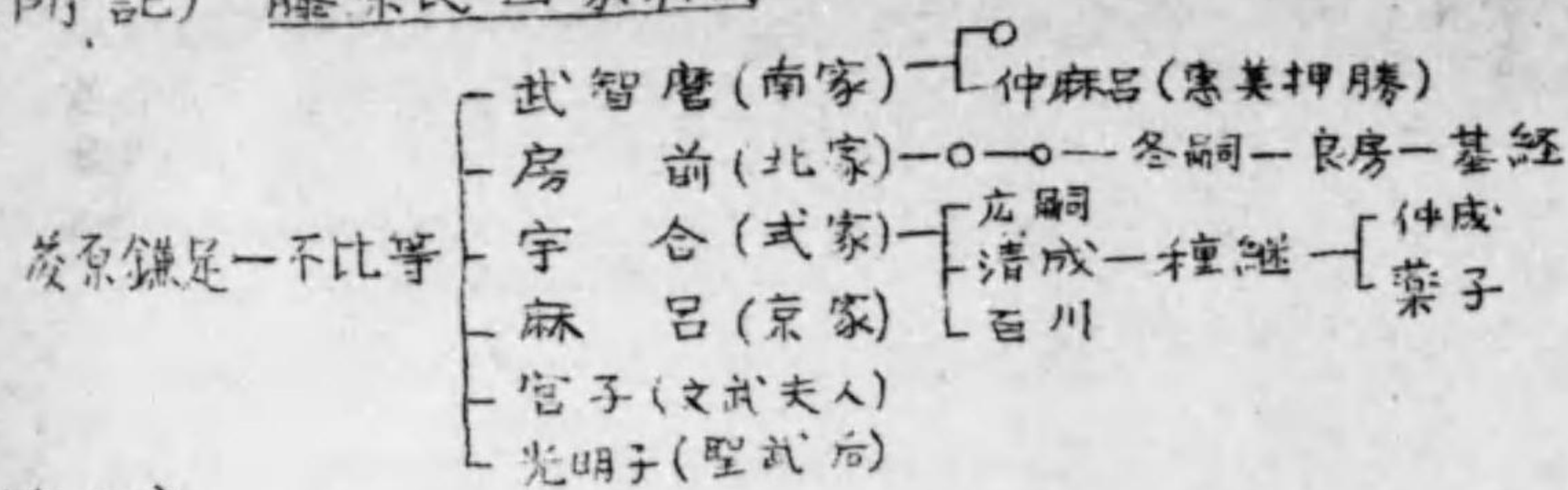
藤原不比等の子孫は、南、北、京、式の四家に分れたが南家の仲麿謀叛の後、式家の人々勢を得、平安初期北家に冬嗣が出て、皇室の外戚とかり此家ひとり栄えた。

即ち冬嗣は嵯峨天皇の御信任を得、藏人頭から左大臣に進み、其女は仁明帝の女御となり、文徳天皇を生んだ。冬嗣の子良房は嵯峨帝の皇女を賜りその女、明子は文徳天皇の女御となって惟仁親王を生み奉ったので良房次第に勢力を得、終に太政大臣に任ぜられた。此人臣太政大臣の始である。やがて藤原氏は文徳帝の皇長子、惟喬親王を斥けて、生後九ヶ月の惟仁親王を皇太子にすゝめた。

此年文徳帝崩じて僅か九才の親王即位あり、清和天皇と申し良房外祖を以て政を撰した。此人臣摂政の始である。

○ 良房が 名は攝政の 役に生き……858

(附記) 藤原氏四家系図



(年記)

- 861(清和,貞観3) ⑤ 宣明曆を用う(此後823年間行わる)
- 866(全 全 8) ⑦ 最澄に傳教大師と言諭す(大師号の始) 藤原良房重ねて摂政とある。
- 867(全 全 9) ④ 始めて東西京に常平倉を置く
- 872(全 全 14) ⑤ 良房死す(年69)
- 880(陽成,元慶4) ⑤ 在原業平死(年56)
- 881(全 全 5) 在原行平葬学院を建つ
- 884(全 全 8) ② 基経天皇を廢す,光孝即位,基経諸政を執る。

887年 藤原基経関白となる(宇多,仁和3年11月)

良房薨じ養子基経、摂政となりついで陽成帝の時太政大臣となった。天皇御病弱に在したので基経之を廢し、光孝天皇を立て奉った。天皇は諸政皆基経にはかつて後奏上せしめられたが、偶々此年天皇崩じ宇多帝即位し、十一月詔して、万機の政は皆基経に關白せしめられた。こゝが關白の始でこれから藤原氏は天皇幼き時は摂政、御成年後に関白となり他家を排して政を擅にした。

○ 役は關白 よろづ基経 申し上げ……887

(附記) 阿衡事件

宇多天皇即位の後基経に勅書し、「宜しく阿衡の任を以て卿の任とすべし」と云ふ句があったが此文の撰者橘広相

も疑す為藤原佐世が基全を訪ねて、「阿衡は位で職はない、摂政の役は罷めさせられたのだ」と出鱈目と云ったが基経怒り紛議を起したので全く儒臣門閥の争が政治上に反んだものである。此時菅原道真が書を上って広相を救った事が宇多天皇の注目をひき後に登用される途を開いた。

(年記)

- 889(宇多,寛平1) 高望王に平姓を賜ふ
- 890(全 全 2) ① 四方拜の始(基経関白を辞す)
- 891(全 全 3) ① 基全死す(年56)

894年 遣唐使の停止(宇多,寛平6年9月)

舒明天皇の時始めて遣唐使を出してから仁明天皇の時迄凡二百年間に十二度の派遣があり、此年宇多天皇は菅原道真を遣唐大使に、紀長谷雄を副使となさつたが、道真は唐既に衰えて文化の採るべきもの少く、且つその航路の頗る困難な事情を速べて之を停められん事を請い遂に許され支那と表向の国交は絶えたが、僧侶商人は此後も猶往来して居た。

○ 止す方の 利を道真が 説いて居り……894

(年記)

- 899(醍醐,昌泰2) ② 藤原時平左大臣、菅原道真右大臣とある
- ③ 宇多上皇落飾(法皇の始)

901年 菅原道真筑紫に流さる(醍醐,延喜1年1月)

宇多天皇は藤原氏の専權を厭わせられ、基経死後は、關白を置かず御親征あり、菅原道真を擧げ用い、基経の子時平と共に政を輔けしめ給うた。やがて天皇位を皇子

醍醐天皇に譲り、髪を剃って仁和寺に退隠し法皇と称せられた。これ法皇の始である。

やがて時平は左大臣、道真は右大臣となったが、道真の声望高く法皇は天皇とはかり之を関白と為さんとせられたが、道真之を辞した。年少で家柄に誇る時平は道真の声望を妬み、同門の人々と謀りし道真は天皇を廢して皇弟^{嵯峨}世親王を立てる心だと讒奏したので、道真は太宰権帥に貶され、筑紫に遷された。

○ 淪落の 我が身を庭の 梅に告げ……901

(附記)

1. 道真配所に死す

道真配所に在って深く身を謹み、皇恩を思ひ忠誠の志を詩歌に託し、三年後(903年)五十九才を以て死んだ。後天皇道真の官を復し、一條天皇は正一位太政大臣を追贈させた。京氏亦その威徳を追慕し北野に祀り天満天神とあがめ今全国に多く此の社を見る。

2. 延喜の治 醍醐天皇長じて仁慈下情を察し、又なく諫を入れて政治にお厲みにかつたから、世よく治り人は太平を樂んだ。之を延喜の治と云う。但し從來「暮夜に御衣をぬぎ」民の苦を知り給うと云うのは誤で、一條天皇の御事ととり違えたものである。

3. 地方の情況 平安時代の中頃藤原氏が政を專にしてから政務を怠り驕奢逸樂に耽つたので地方政治は大に乱れ、大空をカ利漸くゆるみ、豪族は土地を私有し(荘園)地方官は自利を計り軍閥の制乱れて盜賊横行し我國政尤も廢敗した。

4. 武士の起原 桓武天皇の時から、皇族に姓を賜り臣下とせられたのが後迄々多くあり、藤原氏の中でも都に志を得ない者は、地方に出て国司となり、は満ちこみ帰らず遂に地方

に永住して土地人民を私有し、武を練り兵を蓄えて自ら衛るに至った。これが武士の起原である。此の中にも桓武天皇から出た平氏と、清和帝から出た源氏が尤も著れた。

(年記)

903 (醍醐、延喜3) ② 道真配所にて死す(年59)

905年 古今和歌集成 (醍醐、延喜5辛卯)

奈良朝以後平安時代の初期に盛であった漢文学は遣唐使廢止の影響を受けて衰え国文学が大に盛になった。これは奈良時代までは国語を記すにも漢字を用いたが平安時代に入り平假名、片假名の使用始めて起り国語を記すことが容易くなったから、国文や和歌が大に起つたのである。和歌の名人には清和天皇の頃に在原業平等があり、延喜の御代に紀貫之等が出た。貫之は凡河内躬恒等と共に、さきに醍醐天皇の勅を奉じて、万葉集以後の歌を集め此年でき上った。これ実に我が国勅撰和歌集の始で、此後歴代歌集の勅撰があり廿一代集など云われて居るが、その第一書は實にこの古今和歌集二十卷である。

○ 例のない 和歌集古今 廿卷……905

(附記) 平安時代の文物

(1) 国文学隆盛

原因 =	假名の使用、才媛の輩出
	国文……竹取物語、土佐日記、源氏物語、枕草子等
	作者 = 紀貫之、紫式部、清少納言等
和歌 =	古今集、後撰集、拾遺集等

- (2) 美術工芸
- 書道 = 三跡 (小野道長、菅原元理、空行成)
 - 絵画 = 巨勢金剛、宅間為成
 - 建築 = 法成寺、平等院等
 - 彫刻 = 定朝

(3) 風俗 - 寝殿造、公卿の遊樂、加持祈禱

(年記)

- 909 (醍醐朝、延喜9) ④ 時平死す (年39)
- 914 (全 全 14) 三善清行意見封事を上る
- 935 (朱雀、兼平5) 新羅高麗に降る。平将門、国香を殺す ⑤ 兵越入貢

939年 平将門の乱起る (朱雀、天慶2年11月)
(承平天慶の乱)

平高望、上總の国司となつてから、一族東国にはびこりその孫将門武勇あり、摂政藤原忠平に仕え檢非違使となる事を求めて得ず、大に怒り国に歸つて乱を起し兼平五年には伯父常陸大掾^{ツナカ}国香を殺し、此年下總の猿島^{サマ}に拠つて叛した。又伊豫掾藤原純友は伊豫に留つて海賊を集め、山陽南海地方を荒した。

○ 流浪した 末に将門 乱を爲し --- 939

(附記)

1. 将門純友共謀ならず
世間では此の二人を共当時から共謀と思ひ、将門曾て純友と共に比叡山に登り皇城を下瞰し、他日志を得ば、われ皇族故天子となるべし、卿は公家氏なれば「関白となれ」と語つたと史にも記してあるが、これは誤で、共謀ではなかつたのである。
2. 兼平天慶の乱終る 朝廷、将門を平げる爲、藤原忠文を征東

大將軍とし行き討たしめ、それがまた達しない中に平貞盛 (国香の子) 藤原秀御と共に将門を亡ぼした。時に天慶3年(940年)であった。翌年小野女子古、源至基等亦純友を平け東西の乱を止めた。世に之を兼平天慶の乱と云ふ。此乱後貞盛、秀御、至基等は戦功により各鎮守府將軍に任ぜられた。

實に此乱は地方の豪族が始めて中央政府に反抗した事件で武門興起の一大現象。征伐に従つた貞盛は平氏の祖、至基は源氏の祖となり、此後源平両氏は漸次勢を張つた。

(年記)

- 940 (朱雀、天慶3) ⑤ 平将門伏誅
- 941年 藤原純友伏誅 (兼平天慶乱終る) (朱雀、天慶4年7月)
○ 将が死く 遂に純友 往生し --- 941

- 946 (朱雀、天慶9) 紀貫之死す
- 966 (村上、康保3) ④ 小野道風死す (年71)
- 969 (冷泉、安和2) ③ 安和の變、此年天皇を冷泉院と号す (天子院号の始)
- 972 (円融、天保3) ④ 藤原兼通 關白となる
- 985 (花山、寛和1) ① 良源寂 (年74) --- 僧兵の起り

1000年 藤原彰子中宮となる (一条、長保2年2月)

彰子は道長の第三女である。長保元年入内して女御となり、此年中宮となつた。長和元年皇太后となり、寛仁二年太皇太后となり万寿三年上東門院と号した。門院号の始である。遂に承保元年崩じた。

彰子中宮となつた時、既に藤原道隆の女定子が中宮であつたが、道長は己の女が定子より下にあるを喜ばず、同じく中宮とし、定子は皇后と称した。皇后と中宮とは名異なるも實は同等格のものであるから、これに至つて二人の嫡妻

相並ぶの奇観を呈した。これ後藤道長が権勢の爲にした
変態である。

△ わが影に 笑う道長 わが光り……1000

(注意) 千年代の三節おほえ句には皆一の冠を附けて
呼ぶのだが便宜上省いてある。

おれの影じゃと 笑うは大臣 我が子影子の 錦帽子……1000

(附記) 中宮と皇后

中宮はもと皇后、皇太后、太皇太后の總稱であつたが醍醐
天皇の時、皇后藤原頼子を中宮と称してから皇后の別称
とあつた。此朝皇后中宮而立するに及んで中宮は皇后
以外の女尊の義とあつた。明治に至って中宮の稱は廢せられた。

(年記)

1016 (後一条長和5) ① 藤原道長攝政となる

1017 (全 全 1) ② 道長攝政をやめ親通代る ③ 道長太政大臣とさう

1019年 刀伊賊入寇す(後一条、寛仁3年3月)

都で貴族が榮華に耽り、遊宴に日を送って居た時突然
その夢を驚かしたのは刀伊の入寇であつた。

刀伊は女真とも云い遼に属し、朝鮮東北部(黒龍江地方)
に居た種族であるが、此年突然兵船五十艘を以て入寇し
対馬壹岐を侵し筑前に進んだ。太宰権帥、藤原隆家は大
藏種材と共に肥筑の兵を以て奮戦して之を退けた。

△ 我が日本を襲った刀伊の 乱賊等……1019

恐れ気もなく 我が神国に 鬼の刀伊めが 狼籍す……1019

(附記)

1. 菊池氏と秋月氏

隆家の子孫は、世々肥後に居て菊池氏となり、種材の子孫
は筑前に居て秋月氏と稱した。

2. 平忠常の乱 刀伊入寇の後9年即ち1028年(後一条、長元1)

前上總介平忠常下總に擧げて反りた。朝廷平直方に命じて
之を討たしめられたが功なく、更に源頼信を遣し之を討平
せしめられた。これ以後東国では平氏の勢衰え源氏の勢
漸く盛んになった。

(年記)

1021 (後一条、治安1) 源頼光死す

1022 (全 全 2) ① 法成寺成る(1019起工)

1027年 藤原道長死す(後一条、万寿4年12月)

朱雀天皇の次に村上天皇立たれ、承平天慶の乱の後を
承け、政治に勤め給ひ、世よく治り天曆の治と呼ばれて
延喜の代と並に稱せられたに至った。然し此時も依然、
藤原氏の権強く、地方は顧みられずして紊れ、武士の勢
増し朝廷大に衰えた。即ち藤原氏はさきに菅原氏排斥
以後、高位高官を独占し、殊に冷泉天皇から後冷泉天皇
迄八代百余年間は権柄攝關となり、后妃も多くその門か
ら出てひとり政權を握り榮華を極め、とり分け道長に至
ってその絶頂に達した。即ちその三女は三天皇の中宮に
上り、三天皇の外戚となり、三朝に任えてその專政二十
余年に及び、位人臣を極め、富は皇室を凌ぎ、榮華の限

を盡した。

この世をば 我が世とぞ思ふ望月
かけたる事もふしと思えば 月の歌を見ても
得意の様が窺われる。

晩年法成寺を建て、住み、御堂関白と呼ばれて榮華は
元の儘ながら、寿命は如何ともし難く遂に此年六十二才
を以て死んだ。

▲ 我が影も 雲間がくれば 望^{モト}の月…1027

己の世じゃふと 笑ふも一時 雲に隠れた 望の月…1027

(附記) 宇治関白頼通

道長の子 頼通も 三代院に仕え 執政 五十余年の後、晩年宇治
に閑居し、宇治関白と称せられ 著を著めたが、藤原氏の勢は
此時から漸く傾きはじめて。

(年記)

1018年 平忠常反す(後一条長元1年6月)

▲ 腕白が 昂じ忠常 弓をひき…1018

腕が鳴るとして 思ききめて きかて忠常 弓をひき…1018

1031(後一条長元4)④源頼信、平忠常の乱を平ぐ

1051年 紫式部死す(後一条長元4年)

藤原氏は榮華に耽り、權勢を張る爲 努めてその女を宮
中に納れ、才女を選んで侍女としたので自ら女子の学識
を勵まし、女流の名家雲の如く輩出した。中にも名高い
紫式部は、藤原為時の女で、一度藤原宣孝に嫁し、宣孝

歿後又嫁せず、上東門院に仕え、貞淑の譽が高かった。
学は和漢に通じ、和歌を能くし、其著源氏物語五十四帖
は、日本文学の華と称せられて居る。又紫式部日記の著
がある。

▲ 忘れぬや その紫の あわれさを…1031

色も香もある 若紫を 偲ぶ面影 あととめて…1031

(附記) 平安朝の才女

此頃才女並び立つ中にも 紫女の外、清少納言、赤染衛門
和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔等が尤有名で、清少
納言の十帖草子は源氏物語と並び称せられて居る。

(年記)

1036 ⑦ 後朱雀即位

1051(後冷泉、永業6) 安倍頼時反す

1053年 鳳凰堂建立(後冷泉、天喜1年3月)

▲ 我が国に 匂う美術の 園の花…1053

宇治の御堂は 我が王代に 匂う美術の 園の花…1053

1056(後冷泉、天喜4)⑧ 源頼義、安倍頼時を伐つ

1057(全 全 5)⑨ 頼時伏誅 ⑩ 貞任を伐たしむ

1062年 前九年の役終る(後冷泉、康平5年9月)

1051年(永業6年) 陸奥の俘囚長安倍頼時が反いたが、
国司は微力で之を制することができなかつたので1056
年(天喜4年) 源頼義を陸奥守兼鎮守府將軍として討たし
められた。 会々大赦に会い兵を解いたが、頼時その子

貞任と共に再び叛いて衣川(陸中)に拠った。

頼義その子義家と共に討ち、頼時は誅せられたが貞任・宗任兄弟の勢強く、官軍屢々敗れた。

時に出羽の豪族、清原武則兵一万余を以て来り援けるに及んで官軍振り、此年先ず衣川柵を陥れ、ついで厨川柵陥り、貞任は殺され、宗任は捕われて乱平いた。

頼義の出征から此時迄九年(乱の初からは十二年)であつたから立を後三年の役に対して前九年役と云う。

これから源氏の名東国に振った。

△ ^{ワカバ}病葉の 吹き落されし 厨川……1069

歌の戦に わびしいを ひいて綻が 衣川……1069

(附記) 源義家は文武に秀でた名将で、その勿末の間に落花を詠んだ「吹く風を勿末の門と思へども道もせに散る山栴藍はよく人に知られと居、又衣川の戦に敵を追うてし衣のたては言定びにけり」と云うと貞任が「年を全し衆の乱れの苦しさに」と附けたふと風流なる言に富んで居る。

(年記)

1069(後三条、延久1)④ 新置の荘園を停む

1069年 記録所を置く(後三条、延久1年間10月)

後冷泉天皇について後三条天皇が立ち給うた。醍醐天皇以後これまで代々の天皇は藤原氏の出であつたが、天皇の御母は三条帝の皇女で藤原氏に憚り少く且つ天資英

明に在したから、政を親らして他の権力を抑えに居た。

この頃貴族社寺等の荘園増して、朝廷の歳入が減つたので、天皇は新置の荘園を停め、始めて記録所(記録荘園券契所)を設けて荘園を取調べ、後朱雀帝の寛徳二年以後のもの及び証文下明のものは悉く之を停め給うた。

△ わからない 半端な土地の 将をつけ……1069

置いた記録所 わからぬ土地の 法を整え 将をつけ……1069

(附記)

1. 後三条天皇の御事蹟 天皇は源氏を抑え、荘園の整理をなさつた外、全年国司の宣任を禁じ、亮官の弊を改め自ら節儉を行ひ、又斗外^{トウノ}の制や秤の法を定め(但し斗外を始めて造られたのは文武帝の慶雲二年)所謂 延久の宣旨^ノを布く給うたが、治績著り皇威張り天下を仰ぎ奉つた。天皇は在位五年で位を白河天皇に譲り、自ら院政を以て権臣を抑えようとなつたが1073年寿40で崩御あり御志成らなかつた。

2. 荘園 荘とは田開の家、園は園地の謂で各私有の土地を云う。もと荒れた田野を皇族や廷臣に賜つて之を開墾して別荘とせしめられたものに始まり、墾田、賜田、功田、寺田等の別がある。之等は所謂国司不入の地で、領主は庄司(荘長)を置いて之を支配した。

土地は大化改新後大伴公有に於つたが奈良時代、元正帝の時墾田を賜ふ事始り、聖武帝の時之を私有する事が公許され、平安朝に入つて之等私有地は益々多かつた。

(年記)

1072(後三条、延久4)④ 斗外の法を定め(延久宣旨)

1074(白河、養保1)⑥ 叡山の僧、園城寺を焼く

1087年 白河上皇の院政(堀河、寛治1年)

後三条天皇は院政の御志を果されずして崩じ給うたが

御子白河天皇その志をついで仁を早く堀河天皇に譲り、院中で政をお執りになった。よって茲に院政始り、院宣(院より出る詔)は詔勅よりも重く、此後、堀河、鳥羽、崇徳の三朝四十四年間行われて、大臣關白は殆ど空名となり、藤原氏大に衰えた。

▲ 我君は 世に白河のまつりごとと……1087

院政起って 我が大君は 世に白河のまつりごとと……1087

(注意) 院政の起りをこの前年と見る人もあり。

(附記)

1. 上皇の崇佛 白河上皇、深く佛を崇め、後剃髪して法皇となり、豪華を好み、その長さ院政の中、宮殿を堂の寺塔と連て、屢々高野熊野に幸し、頻りに法会を堂みおこした。そのたので、国費不足と政紊れ、国司の重仕、売官の弊再び起るに至った。

2. 僧兵 律教盛となり、諸大寺は広大な莊園をもち、多くの僧兵を養って自ら衛するに至ったが、此頃白河法皇の御崇佛に榮じ、横暴を極め、中には唐の山や通稱寺は日吉の神興を以て、奈良興福寺は春日神木を以て常に朝廷に強訴し、其他、圓城寺、石清水八幡、東大寺、談山神社等の僧兵は互に争ひ騒いだ。

3. 北面武士 尚上皇は院に北面武士を置き、警衛に当らしめられたので、これから武士登用の途が開かれた。

1087年 後三年の役終る(堀河寛治元年12月)

前九年役後二十余年で又奥羽が亂れた。清原武則は前九年役の功により、安倍氏の旧地を領し、一族榮え真衡に至って勢大に張った。偶々異母弟、家衡、及び叔父武

衡と争った。依て先に陸奥守兼鎮守府將軍とあった義家は真衡を援けて、家衡等を金沢村に圍んだが、容易に抜けぬのを聞いて義家の弟、新羅三郎義光来り援け、又家衡方の藤原清衡帰服して力昂り、柵中の糧尽きて逃げる敵を追い、家衡、武衡を斬り奥羽全く平定した。

亂平ぎ之を奏上したが、朝廷の謝と見なして顧みられなかつたので、義家は私財を傾けて將士の勞に西州の東國の武士は益々源氏に服した。

▲ 我が度も やつと義家 田かなり……1087

敵受けずば 我が身の難儀 申し罷ら雁 亂れ雁……1087

(附記) 1. 義家が雁の亂れろくを見て伏兵を知り、敵を破った有名な話は、此時の事である。

2. 平氏は此頃、白河、鳥羽兩法皇の信任を得、貞盛五世の孫忠盛は屢々瀬戸内海に海賊を破って功を立て、勢力次第に西國に及んだ。源平二氏は斯うして東西に各勢を得、遂に中原に競争するに至った。

3. 藤原清衡は秀郷の子孫で、後三年役後、清原氏に代つて其地を領し、これから四代の約百年間今の平泉に拠つて勢を振つた。清衡の建てた中尊寺の光堂は今も其富強を誇つて居る。

(年記)

1108 (鳥羽、天仁1) 源義家死す(年68)

1111 (全 天永2) ①大江匡房死(年71)

1129 (崇徳、大治4) 鳥羽上皇の院政始る ②平忠盛、山陽、南海の海賊、捕ら。

1140 (全 保延6) 佐藤義清、近世出家西行と稱す

1153 (建徳、仁平3) 平忠盛死す(年55)

1156年 保元の乱 (後白河、保元1年7月)

保元の乱の原因は、皇室の御不和と藤原氏兄弟の争によるもので、皇室にあっては鳥羽法皇が、御子崇徳上皇を愛せられず、強いて美福門院の生んだ、まだ三才の近衛天皇に譲位になり、やがて近衛天皇崩御の後、法皇は関白藤原忠通と謀り上皇の御弟、後白河天皇を立てられたので、崇徳上皇は此度こそ御子重仁に立ち給う事と思召された望破れ御心大に平でなかつた。又藤原氏にあっては左大臣頼長が兄と関白を争った。

偶々此年鳥羽法皇崩じ給うに及び、崇徳上皇は頼長と謀り、源為義其子為朝、平忠正等を召し兵を挙げ給ひ、これに対して天皇は為義の長子義朝、忠正の甥清盛を召し、夜俄に上皇方を襲われた。

上皇の軍敗れ、頼長流矢に中って死に、上皇は讃岐に遷され為義、忠正は殺され為朝は伊豆の大島に流されて乱終った。

▲ 愛憎の 中に保元の 火の車……1156

愛に笑おか 怨に泣こか 中に保元の 火の車……1156

(附記) 1、此乱、皇室、摂家、武将等皆、父子、兄弟、叔姪相分れて争ふ事、道徳の乱れを思ふべきである。

② 金原西八郎為朝 源為義の第八子で、名として名高い。

為朝は十三才の時、既に九州で、勇名を馳せ、十九才父に従って白河殿に参じ、夜討を建議して頼長に斥けられ、戦敗れ、伊豆大島に流され、後、近海を掠めたが、高倉天皇の時、官軍に討たれ、刃腹して死んだ。武士の刃腹は此頃から始まつたと言ふ。

1159年 平治の乱 (二条、平治1年12月)

保元の乱後、後白河上皇の寵臣、藤原信頼は近衛大將たり人と請ひしを、藤原通憲(信西)に妨げられて果さず深く之を怨んだ。

時に源義朝は、平清盛が通憲と婚を通じ、勢力の盛なのを知み、此れかに信頼と結ぶ、二人は通憲、清盛を倒す機会をねらつて居た。

偶々平治元年、清盛の熊野詣の不在に乘じ二人は兵をあげ、天皇、上皇を幽し奉り通憲を殺した。清盛敵により途中から引返し、天皇を六波羅の白邸に迎え、子重盛をして信頼、義朝を破らせた。かくて信頼は殺され、義朝は東国に逃れようとして尾張で、臣長田忠政に殺され乱終った。

保元の乱頃から、源平二氏は鮮かに対立の姿を見せたが、この乱後源氏の勢全く衰え、平氏独り栄えた。

▲ 鬼の留守 ねらつて平治に 乱を為し……1159

伊勢の親子に 怨がござる 命んで倒せや 留守の間……1159

1160年 源頼朝伊豆に流さる(二条永暦1年3月)

頼朝は義朝の第三子である。平治の乱起るに及び、父に従って六波羅を攻め、遂に破れ、東国に逃れる途中、一族にはぐれ、平宗清に捕えられた。宗清之を憐み、池禪尼(清盛の継母)によって清盛に請うたので、死を免れて伊豆の蜷ヶ小島に流された。時に年十四才であった。

▲ 運命を 踏んで行く子の 別れ霜……1160

味気ない世の 生命を一人 踏んで行く子の 別れ霜……1160

1167年 平清盛太政大臣となる(六条、仁安2年2月)

保元、平治の乱により源氏衰えて平氏独り栄え、清盛は平治乱後、参議となり、権大納言、内大臣を全て此年太政大臣に上り、朝政に興った。次で清盛の妻の妹、建礼門院の生んだ高倉天皇が御位に即かせられ、其勢愈々加わり、文徳子(建礼門院)を天皇の中宮とし、天下の政権全く清盛の手に戻し、一族々朝宮に列する者六十余人、采邑三丁余国に亘った。

されば、平時忠(清盛の妻の兄)亦どは「方今の世平氏に非る者は人に非ず」と傲語するに至った。清盛の専横を悪む者も多かったが如何ともする事ができなかった。かく

▲ 伊勢蝦が 跳ね返つたる 身の栄華……1167

いっせいと 威張るが無理か 独り天下の 身の栄華……1167

(年記)

1170 (高倉、嘉應2)④ 源為朝を大島に討つ⑤ 後京秀衡將軍任

1171 (全 美安1)⑥ 清盛の女徳子(年15)入内、翌年2月中宮とす。

● 1174 (全 全4) 此年源義全鞍馬寺を脱し奥州に下る(年16)

1175年 僧源空 浄土宗を開く(高倉、安元1年)

▲ 一念に 御佛たのむ 法の声……1175

一念発起し 阿弥陀にすがる 無量寿光の 法の園……1175

1177年 鹿ヶ谷の會合(高倉、治承1年7月)

(藤原成親等の陰謀)

清盛の我侪を憤る者は、後白河法皇を初として可ふり多かつた。此年、法皇の寵臣、藤原成親、僧西光、僧俊寛、平康頼等は俊寛の鹿ヶ谷の山荘に會して、平氏を滅そうと謀ったが事あらわれて成親西光は殺され、俊寛、康頼及び成親の子成経は鬼界ヶ島に流された。

▲ 運命の 真弓に鹿の 的が外れ……1177

うらみ佗びては 命を鹿の 的が外れて 身が細る……1177

(附記) 此時清盛は法皇をも幽し奉ろうとしたが重盛の諫により事なきを得た。尚流人の中成経、康頼は翌年赦に會つて召還されたが、俊寛は一人残されて全島で死んだ。

1179年 平重盛薨す(高倉治承3年7月)

重盛は清盛の長男で、内大臣に拜し、至忠至孝、沈着でしかも武勇であったから、朝野に人望が高く、よく清盛の横暴を制して事なからしめたのは全く此人の力であった。然るに此年遂に病に罹り四十二才を以て世を去ってからは清盛の無道益々加わり、平氏はやがてその末路に急ぐ事となった。

▲ あゝ重盛が 御墓にしげき 冷露かな……1179

あわわ小松の ^{ナガ}大臣を言えは ^{カゴト}虫が ^{コト}御言の ^{カネ}鈴を振る……1179

(年記)

1179(高倉治承3) ① 清盛法皇を幽し、近臣の官職を奪う。

1180(全 全 4) ② 高倉護は、仁徳受平

1180年 源頼政兵を挙ぐ(安徳治承4年5月)

平氏が榮華に耽り、太平の夢を貪って居る間に、諸国の源氏は徐ろに再興の機を窺って居た。

時に源頼光の玄孫、頼政は従三位に叙せられ入道して居たが、清盛の専横の益々甚しいのを憤り平氏を滅さんとし、此年後白河法皇の皇子以仁王(高倉宮)を説いた。

王は事成るとの相者の言を信じ終に之に同意あり。依て頼政は令を諸国の源氏に傳えて兵を募った。

事漏れるに及んで、急に王を奉じ、平氏の知盛、重衡等の軍と宇治に戦い敗れ、王は流天に中って薨じ已は平等院で自殺した。頼政此時已に七十七才の高齡でありその企ては成らなかつたが、これがやがて諸源を起す導きとなり、同年八月頼朝、全九月義仲が兵を挙げるに及んで遂に彼の志は遂げられるに至つたのである。

▲ 老ほれの 矢を頼政が 笑われる……1180

老に惚れぬど 命を的の 弓に立てたい 我が思ひ……1180

(附言) 以仁王は高倉天皇の兄であるが、母の尊からざる故天皇に超えられ不平に在した。後平氏が三才の皇子(安徳帝)を立てるを見大に憤り給うた。其時相御に妙き得、易相少納言の鯨名ある後原宗綱が王を相して「王は慥かに国を受け給うべき相あり」と云つたので王喜び、是れを頼にして非難を思い、忽ち矢以ふさつた。

(年記)

全年 ⑥ 福原遷都 ⑦ 頼朝挙兵(石橋山の戦)。頼朝侍所を置く ⑧ 源義仲起兵 ⑨ 平軍富士川に敗る。

1181年 平清盛死す(安徳、養和1年閏2月)

清盛は忠盛の子である。久安二年安藝守となり保元、平治の乱後、官益々進み、仁安元年従一位太政大臣となりついで出家して淨海と称し、太政入道となつた。

治承中後白河法皇を鳥羽宮に幽し、治承四年五月安徳天皇を擁して都を己の別荘地根津の福原(今の神戸市西部)に移したが、半年にして後京都に復した。

源頼朝挙兵の翌年病を得、此年死に臨み、一族子弟と集めて曰く「死後は供養を用う勿れ、唯頼朝の首を墓前に供えよ」と云い、劇しい熱病に苦みぬいて六十四才を一期に死んで行った。

▲ 医者殿に 焼けどをさせる 熱さかな……1181

うわさだけでも 熱とうな話 焼けどしたとは 医者^の嘘……1181

(附記)

1. 清盛の人物 清盛は実に識見ある政治家で、外国貿易を大に振起する者から先ず西海の権を握り、宋貿易を振作し、警備の境音戸を閉いで船の往來に便し、釜島を兵庫に築いて物資の陸上輸送を簡にし、福原に別邸を造って貿易を督し又東進して琵琶湖の南端を討らしめたなど、頗る活眼ある進取も兼ねてゐる。風采又高雅であつたと云う。

2. 福原遷都と京都 清盛が福原に都を遷してから京都の荒廢した様は治承四年八月十日 徳大寺実定卿が竹野から京に上り近衛河原の大宮に参じた時詠んだと云う
ふるき都を来て見れば 浅茅が原とどおりにける
月の光はくまなくて 秋風のみに身にはしむ
と嘆じた今様歌を見て分かる。

1183年 木曾義仲入京す(安徳、寿永2年7月)

治承四年八月、頼朝の挙兵の翌月、その従弟源義仲も亦以仁王の令旨を奉じて兵を信濃に挙げ、北陸道を従え維盛の大軍を越中石碓山(倶利伽羅峠)に破り、勢に乗じ、長駈して比叡山に拠り京都に迫った。時に清盛既に死んで、子宗盛の世であつたが、彼大に木曾軍を恐れ、

その一族を率ひ、天皇及び建礼門院(徳子)を奉じ、神器を擁して西国に遁れた。依て義中郡に入り盛に荒掠を恣にしたので大に人望を失つた。

▲ 猪の ように義仲 沙汰をされ……1183

赤の旗影 旭におじて やがて都は 白ばかり……1183

(附記) 源義仲は義賢の子、中原兼遠に養われ、木曾に育つて木曾冠者と稱し、作大に力強く騎射を能くした。入京後横暴がたつたので、後白河法皇は頼朝に命じて討たしめ、弟範頼、義正が西上して之を攻めた。寿永3年1月義仲もつ将、今井兼平等と之を宇治、勢多に防いだ。義正の將佐の木高綱、梶原景季等宇治川を渡り攻め寄せ、義仲は遂に近江の粟津に戦死した。享年31才。斯うして彗星の如く中央に現れて消えた旭將軍の末路は又哀れむべきであつた。

(年記)

1184(安徳、寿永3)① 義仲敗死(年31)② 一谷の戦 ③ 頼朝、公文所及問注所を鎌倉に設く。

1185年 平家七つ(安徳、寿永4年3月)
(屋島・壇浦の戦)

源頼朝伊豆に在ること二十年、1180年以仁王の令旨を受け北条時政と謀つて兵をあげ、先ず百代平兼隆を斬つて相模に入り石碓山に大庭景親と戦つて大敗したが、やがて勢を得、房聰、武相を従え、鎌倉に拠つて威を振つた。清盛聞いて大に驚き、嫡孫、維盛等をして頼朝を討たしめたが、一夜維盛は富士河畔、水鳥の羽音に驚いて、戦わずして逃れた。其後間もなく清盛死し宗盛家

まついた。 偶々義仲に攻められ平氏は近海に奔り、四
国九州の豪族の内應を得たので、再び京都を回復せんと、
天皇を奉じて福原に還り一ヶ谷の要害に拠った。 範頼、
義経の軍夾み撃つに及んで、一族海に浮び屋島に走った。

やがて範頼は山陽道から九州に向い、義経は急に屋島
を襲って敵を破り、逃げろを遂うて長門の壇浦に戦った。

平氏の武運こゝに尽き、天皇は清盛の妻二位尼に抱か
れて海に沈み給ひ、知盛、教盛、経盛等殺死し、宗盛は
捕われて殺され平氏こゝに亡んだ。

清盛が政権を握ってから、此時迄僅かに十九年、平治
乱後栄華を極めたのも思えば廿余年の夢であった。

▲ 驕る平氏の 夢は見果ぬ 廿年……1185

驕る平氏の 栄華も尽きて 夢を流した 長門浦……1185

(附記) 崇神天皇の時模造にふった神鏡は壇浦海戦の時
海に沈み、其後は他の宝剣に代え給うた。但し神代から傳る
草薙劍は熱田神宮に祀ってある。

(年記)

1185(後鳥羽文治) ⑩ 頼朝守護地頭を置く

1189年 源義経の最期(後鳥羽文治5年間4月)

源義経は義朝の第九子、九郎判官と称し、幼名を牛苜
と云った。 六カヨリ鞍馬寺に長じ、兼安四年十六才で關東
に下り、藤原秀衡に寄った。

頼朝が石橋山に兵をあげた時、遠く来て之を援け、義
仲、平氏を滅して大功を立てたが、事に由って頼朝に忌
まれ、平氏とび其抽屬を送つて關東に下った時も、鎌倉
に入るを許されず、ついで頼朝は土佐坊屋使を京都に遣
してさう釘を繁わしめた。

義経大いに怨み、叔父行家と共に頼朝を討たんとして
後白河法皇の院宣を受けたが、大軍攻来るとき、二人は
京を去り、行家は和泉に捕われて殺され、義経は諸所を
流浪の後、奥州に奔って再び秀衡に依った。

頼朝、法皇に請うて義経を討つた院宣を得たが強大な
秀衡を輝って果さなかつた。 偶々秀衡死に子奉衡は頼朝
を恐れ、遂に此年義経を衣川に攻め、首を獲て鎌倉に送
つた。 義経時に年三十一歳、平治乱後母常磐に抱かれて
雪の大和路にさまようた時から衣川に死ぬまで、その一
生は数奇を極めたものであった。

▲ 英雄の 夢朽ち果てし 落花かな……1189

いとうごせんす 牛苜丸は 世にも九郎の 輪廻とや……1189

(附記)

1 守護、地頭 頼朝は大江山の議を用い、義経を追捕
し兼て反乱を防ぐを名として、平家滅亡の年即ち文治元年
(1185年) 奏請して諸国に 守護(軍卒、警察を司る)、公領庄
園に 地頭(土地管理、租税徴収を司る)を置き、家人を以て之
に充てた。

その結果、国司、領主等の権は武士に守護、地頭の手に帰し、頼朝は總追捕使として居ながら天下を制するに至った。

2. 奥州征伐 頼朝は、泰衡が早く義経を討たなかつたを名とし文治五年自ら大軍を率いて之を攻滅し、葛西清盛を奥州總奉行に任じ其地を治めさせた。よって始めに天下一統した。

3. 義経生存説 義経は衣川で"死んだ"のではなく、北海道に逃れて酋長になったとか、甚しいのは蒙古の成吉思汗は彼の後身だ"など、で"たうたのこどつけまする者が"あうが"誤られまはあうぬ

(年記)

1189 (後鳥羽, 文治1) ① 頼朝が原泰衡を討て之を滅す

1191年 僧榮西, 臨濟禪を傳う (後鳥羽, 建久2年7月)

▲ 榮西が 臨濟禪の 教えして... 1191

榮西禪師の 庵に生いし 臨濟自力の 教え草... 1191

第三史期 (鎌倉開府一開ヶ原戦)

1192年 源頼朝征夷大將軍となる (後鳥羽, 建久3年7月)
(源氏の天下一統)

頼朝、兵を挙げてから旧縁深く且つ要害に當む鎌倉の地に居る構え、治承四年先ず侍所を設け、和田義盛を別当として軍事警察の事を掌らせ、又寿永三年、公文所(後政所と改む)を設け、大江広元を別当として政務を執らしめ同時に問注所を置いて三善康信を執事とし、裁判を掌らせた。依て全く鎌倉幕府の基が置き、武家政治の端にこゝに開かれた。實に大化新政後五百三十五年後の事である。其後諸国に守護、地頭を置いて、国司及領主の権を收り、議奏及京都守護を置いて、朝廷を制し、政治の實権を握り、遂に此年、頼朝が征夷大將軍に仕せられるに及んで武家政治は名實共に備った。この後征夷大將軍は常置の職となり、武家の棟梁は大抵此職に任ぜられて政権を握り、明治維新に及んだ。

▲ 天が下の 利は頼朝が 位山... 1192

いよゝ征夷の 威名も榮えて 例の武を布く 鎌倉に... 1192

(附記) 鎌倉幕府の組織 { 1. 中央(鎌倉) { (ア) 侍所 = 軍事警察 (別当, 和田義盛)
(イ) 政所 = 庶政... (別当, 大江広元)
(ウ) 問注所 = 訴訟... (執事, 三善康信)
2. 地方 { 守護地頭 (諸国) 京都守護 (京都)
奥州總奉行 (奥州) 奥州總奉行 (奥州)

1193年 曾我兄弟の仇討(後鳥羽、建久4年5月)

源範頼 殺さる (五 全 8月)

此年五月、頼朝富士野に狩し、範頼は命を受けて鎌倉に留守して居たが、偶々曾我十郎祐成、五郎時致兄弟は父の仇工藤祐経と獵營に殺した。

△ 親の仇を 獵營に討つ 曾我兄弟…1193

親の川津の 怨も晴れて 霊が浮びか 五月晴…1193

此時、鎌倉で頼朝害せられたとの流言があつて、夫人政子が悲んだので、範頼之を慰めし安心しなさい範頼が居るからと云つたが、後、頼朝之を聞き、範頼の異心を疑ひ、如何に年疏しても聞入れず、遂に捕えて伊豆の修禪寺に幽じ、ついで八月之を殺した。

△ 恩を仇 礼に範頼 死刑あり…1193

1199年 源頼朝の死(土御門、正治1年1月)

頼朝は逆境に生立ち、平氏を滅じ、政權を握り、藤原氏以来長き京都文弱の弊を一洗して武家政治を創め、勤儉尚武、風紀を張り紊れられた地方政治を整え、よく家を興すと共に國を興した英雄であるが、たゞ惜むらくは猜疑心深く、功多き義経、範頼等を殺し源氏滅亡の因を作つたのは欠点であつた。

功成り名遂げて 遂に此年正月十三歳を以て世を去つた。その昔殺さるべきであつたので助けられ、此に至ると思えば運命の手は又彼に於て奇しきかな。

△ 運命の 利を頼朝は 流後に得て…1199

運も良かった 頭もあった 流後の頼朝 利が附いた…1199

{年記}

1200 (土御門、正治3) ① 頼朝を時殺さる

1203年 北条時政執權となる(土御門、建仁3年9月)

△ 鎌倉を 我物顔にする老爺…1203

秋も最中の 鎌倉山は わけて芒の さやくとが…1203

全年 比企能員殺さる。頼朝のせう北条朝將軍とある。

1204 (土御門、元久1) ① 時政、頼朝を害す

1205 (全 全 2) ① 新古今集成 ② 北条義時執權 畠山重忠殺さる

1208 (全 美元2) ① 源空、親鸞流さる ② 熊谷直実死す

1213 (順徳、建略3) ① 和田義盛亡ぶ、鴨長明死

1218 (全 建保6) ① 源実朝右大臣とある

1219年 源実朝の最期(順徳、美久1年1月)

(源氏せう)

頼朝の死後、長子頼朝將軍職をついだが、公かいので、母政子が其父時政と共に政を執つた。然るに時政はさきに比企能員を亡し元久元年、頼朝を伊豆の修禪寺に害したので、ついで十幡、將軍となり実朝と云つた。時政は依然執權として權を專にし、源氏の功臣畠山重忠を殺

し、実朝を廃し、その子、一統を執り、
存けられ、其子義時執権となった。彼権謀に過ぎ、侍
所より別当和田義盛を亡して政治軍事の権を恣にした。

実朝有為の才を以て、義時の専横を悪んが、一族の
臣多く除かれて、如何ともするおく、只和歌風流に耽つ
て陸を遣り、又源氏の命運の久くないのを察して、頻
りに官位を望んで家名をあげんとし、遂に右大臣に昇り、
此年正月、拜賀の礼を窪岡八幡宮に行った。

頼朝の子、備前公暁は、豫て実朝をこの仇として居たので、
にわかには此日実朝を害し、己は義時に殺された。

斯くて源氏の世も僅か三代二十八年を以てせんた。

△ 鎌倉も あゝ三代の 理乱のみ……1219

いでいなげと 暑りを見せた 歌に副うとは 持もなや……1219

(附記)

1. 実朝の人物 実朝の生れたのは、父頼朝が將軍になった
年なので、その寿命は源氏の世と共に28であった。
その歌集 金葉集 は高き彼の人物を盛る。
山はさけ 海はあせおん 世ふりとも 君に二心われあうめやは

2. 尼將軍政子 実朝被殺後、頼朝の遠縁に當る九条道家
の子、頼全を鎌倉の主としたが、時に年僅かに二才であった
から政子が藤中に政をき、義時依然執権であった。
政子智略に富み、よく諸將を統御したから世に之を
尼將軍と云う。

(年記)

1219 (1119征、美久) ⑥ 後頼全鎌倉の主とある

1221年 承久の乱 (仲恭、承久3年5月)

後鳥羽上皇は、久しく政権の武門に歸して居るのを憤
り、之を御回復の御志あり。且執権 義時が屢々上皇の
御旨に背いたので、遂に順徳上皇と共に竊に兵をお募り
になった。義時は政子と謀り、其子泰時、弟時房等を將
として東海、東山、北陸の三道から大軍を進め官軍を美
濃、尾張、宇治勢多に破り京都に討入った。

官軍敗れて乱終り、北条氏は仲恭天皇を廢して後堀河
天皇を立て、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、
土御門上皇を土佐(後に阿波)に遷し奉り、謀に與った公
卿將士を流斬に処した。後鳥羽上皇隱岐にこの御掣に、

我こそは 新島守よ 隱岐の海の
荒き浪風 心して 吹け。と。

△ 雲飛んで 京鎌倉の 腕まくり……1221

打てば響いて 京鎌倉の かつと怒った 腕こがし……1221

(附記)

1. 六波羅探題の始 乱後、泰時は北、時房は南の西六波
羅に留って京都を鎮め、ひたかに朝廷を抑え、兼て近畿、
四國を統制した。此北西六波羅探題の始である。斯くて
益々朝廷を衰え、政権全く北条氏の手に移った。

2. 新補地頭 義時は承久役に與った公卿將士の領地
三十余ヶ所を扱めて、自家の將士に分與し、新に地頭を
補した。之を新補地頭と云い、旧来のを本補地頭と云
った。

(年記)

1221 (仲崇、基久3) 大波羅府の創設

1224年 僧親齋浄土真宗を開く (後堀河、元仁1年1月)

▲ 見真の 心は固き 誓して……1224

石の念に 心を踏んで 見真浄土の 月を見る……1224

1224 ④ 北条泰時執権とある

1225 (堀河、基録1) ④ 大正天皇(年78) ④ 政子死(年69)

1226 (全 全 2) ④ 頼朝が太政大臣とある

1227年 僧道元、曹洞宗を開く (後堀河、寛弘1年)

▲ 帰依つて、心を据らん 弥陀の慈悲……1227

いとゆる、心を据つて 君は頼る 弥陀の慈悲……1227

全年 藤原景正(藤原)道元に從つて帰る

1232年 貞永式目成る (後堀河、貞永1年8月)

承久の乱後三年が義時卒したので、泰時は鎌倉に帰つて執権職をつき、叔父時房を連署とし、政所に評定衆を置いて政務を合議させ、又三善康連と議し、頼朝以来の慣例を本とし、古代法制を参考して、御成敗式目五十一ヶ条を定め之を法橋町全に起草させた。貞永元年にでき上ったから之を奉成式目とも云ふ。簡易でよく實際に適し、此後永く武家法制の根本となった。

▲ 鎌倉の しきたり規程 国の法……1232

撰り貞永 式目五十 それに一足す 国の法……1232

(P付記)

1. 執権泰時の治 泰時、年六十で仁治三年に死ぬ迄、職に在ること十九年、質素を旨とし、父祖に背ず仁政を施したから、大に人心を得、世よく治った。

2. 執権時頼の治 泰時の後、孫全時、時頼相攻で執権となった。時頼、將軍頼朝を廢し、後醍醐天皇の皇子宗尊親王を迎えて將軍とし自ら政を行つた。在任十一年民政に意を注ぎ、勤儉節用武政所に引付衆を置いて評をきかせた。又執権職をヤマト最明寺に入り尚民政に力を尽した。北条氏が陪臣の身で以て政権を握り民意を得たのは、泰時、時頼等による。

時頼の母 松下禪尼 が陪子の切張をして破れては進もうか心と後宗を殺したりは有るか話がある。

(年記)

1241 (四條、仁治3) ④ 藤原定家死す(年80)

1242 (後堀河、仁治3) ④ 泰時死す(年60)

1244 (全 寛治2) ④ 頼朝死す其子頼朝將軍任

1246年 北条時頼執権とある (後嵯峨、寛仁4年3月)

▲ 鎌倉に 時頼立ちて 春の風……1246

鬼が住むとの 鎌倉山も 立てば時頼 春の風……1246

1247 (後深草、宝治1) ④ 時頼三浦氏を討つ

1252 (全 建長4) ④ 宗尊將軍とある鎌倉大佛を造る (注)

1253年 日蓮、法華宗を開く (後深草、建長5年4月)

奈良朝、平安朝の佛教は貴族的で、多く上流階級に行われ、現世の苦楽に就ての祈禱で、一般民衆の信仰には適しなかつた。それが段々腐敗して僧兵などの跋扈となり、其後戦乱が打續いて、人生の無常のあたりに

見れば、魂の救を布う心も強く、新宗教の出現を望んで居た。斯うして鎌倉時代にはその簡易、質朴な政治と共に平民的な新宗教が行われるようになった。しかも是等は保守的な都を離れて、多く本拠を地方に求めた為、寺院の地方的分存と、地方人士の誘導に功があった。

さきに浄土宗は法然により、浄土真宗は其弟子、親鸞によって唱えられ、禅宗は荣西、道玄等によって傳えられ、又後に至って一遍は時宗を唱えた。

日蓮は刻苦して佛道を修業し、遂に法華宗を唱えて他宗を罵り、しばしば流罪に処せられたが、晩年、甲斐の身延山に久遠寺を営み益々教義を弘め、弘安五年、年六十一歳で死んだ。宗教上の人物には殊に虚説が多いから注意を要する。日蓮にも「龍の口の御難」だとか其他色々の虚言が傳えられて居る。

▲ 国人に 日蓮説けば 空舌し……1253
意志の日の子が 国救わんと 名のある袂に 騒ぐ風……1253

(附記) 1. 鎌倉時代の文物

- (1) 風俗
 - (a) 武士の気風 = 質素、儉約、尚武 — 武士道
 - (b) 武士の遊戯 = 大追物、空懸、流鏝馬、相撲、狩獵
 - (c) 一般風俗 = 質朴、簡單、實用
- (2) 佛教
 - (a) 浄土宗 = 法然(法然上人) — 智恵院
 - (b) 浄土真宗 = 親鸞(親鸞上人) — 本願寺
 - (c) 禅宗(臨濟派) = 栄西 — 建礼寺

- (a) 法華宗 = 日蓮 — 久遠寺
- (b) 時宗 = 智真(一遍上人) — 遊行寺
- (3) 文學
 - (a) 戦記文 = 和漢混淆文 — 保元、平治、平家物語
 - (b) 和歌 = 新古今集
 - (c) 作者 = 俊成、定家、家隆、西行、実朝
- (4) 美術工藝
 - (a) 絵画 = 土佐光長、河原信実 — 絵巻物
 - (b) 彫刻 = 運慶、湛慶
 - (c) 建築 = 寺院
 - (d) 製陶 = 加藤景正(瀬戸物)
 - (e) 武器 = 粟田口古光、岡崎正宗

2. 修験道 此頃 役の小角を祖とする修験道が起つた。之を修験家又は雜宗と云い、佛教神道以外に立ち、その行者は験者又は山伏と称して高山に修行し勢力を振つた。
3. 金沢文庫 此代、北条義時の孫、実時その子 顯時は武蔵国金沢に文庫を建て、多く書を蔵し學問に資した。

- (年記)
- 1262 (龜山、弘長2) ④ 僧親鸞死(年40)
 - 1263 (正 永3) ④ 時頼死す(年37)
 - 1267 (正 文永4) 蒙古が来る

1268年 蒙古の使者来る (龜山、文永5年2月)
(元寇の発端)

鎌倉時代の初段、支那北部の蒙古に成吉思汗起り、四方を征服し、亜細亞の大部、ヨーロッパの一部を占領し廣大な蒙古帝国を起した。その孫忽必烈(元の世祖)の時、勢力を張り、兵の強、国の大古今に比ぶく、朝鮮を服した勢に乗じ、我国をも従えんと、此年高麗王を介して国書を送つて来たが、其書辞無礼であったから、朝儀之に答えずして斥け、蒙古の難を太廟、諸社に告げて来れば来

川の覚悟とこめた。

▲ 来て見ると 忽必烈の書を 破りすて……1268

破す忽必烈 来らば来よと 腹は据えたり 日本洲……1268

(附記) 此³月 北条時宗が 執権となった。尚蒙古が国号を元と改めたのは、此後三年を経てからである。

1274年 文永の役 (龜山、文永11年10月) (元寇第一役)

元は 翌文永六年再び使をおこしたが、幕府は戦うつもりで居たので、逐事をせずに使をかえし、西海の將士に命じて兵備を嚴にさせた。元からは文永八年にも九年にも十年にも使が来たが皆逐い逐した。

依て元主忽必烈大に怒り、此年十月、^ツ竹^ツ都を將とし元と高麗の軍約四万人、戦艦九百余艘を以て来寇し、まず対馬を侵して、守護代宇助国を倒し、住民を屠殺し、壱岐を掠めて守護代平景隆を自殺せしめ、進んで博多に達り、鉄砲を放って我が軍を苦めた。時に九州の豪族、小貳、大友、菊池等力戦して之を防いだ。偶々大風起るに及んで、敵艦多く破れ、残兵夜に集じて避れ去った。之を文永の役と云う。

▲ ^ツ竹^ツ都の軍 先ず壱岐対馬 血で洗い……1274

壱岐や対馬に 噛みつく蒙古 無茶に暴れる 血の湯き……1274

(附記) 元寇と世間

時宗は退いて元寇を防ぐばかりでなく、却って自ら進んで敵を攻めんとし、建治元年異国征伐の号令を発し、少弐全資武田信時等に出師準備をおさしめた。

此の計画は実行はされなかつたが士氣を鼓舞した功は大きかった。一ニの例をあげると、

肥後の家人 井芹秀重は八十五の高齡で歩行ができぬがとて 嫡子 永英を代りに出征せしめたいと願ったがその永英已に六十五才の老人であつた。又 裏阿と云う地頭は自身一寡婦で行かぬかつたので最愛の子息と女侍とを引征に就かしめようとした。此等を見ては当時の國民の意氣が偲ばれる。

(年記)

1275 (後宇多、建治1) ① 始めて北条実政を九州探題とす。

1277年 僧一遍 時宗を唱う (後宇多、建治2年)
或は前年ともある

▲ 国中を 廻り時宗を 広めけり……1276

一遍だけども 帰依して見よと 廻る浮世に 法を説く……1276

1281年 弘安の役 (後宇多、弘安4年5月7日) (元寇第二役)

時宗は、文永役後二度元使を斬り、北条実政(当時七才)を九州探題に任じ、九州の諸豪族に命じて博多附近の海岸に石壘を築かしめ又弟、北条宗頼を長門守護として此地を守らしめるなど益々の防備を嚴にし進んで高麗及元を征伐するなどの準備をした。

忽必烈は前の戦に負けた事や、度々使者の斬られた事等で益々怒り、此時既に支那の宋を滅ぼして国内を統一した勢に乗じ一挙に我国をおみにじらんとして、此年、

東路、江南兩軍を合し、東路軍は物部、^{淡茶立}之を率いて元軍三万、高麗軍一万、戦艦九百余艘を以て五月先ず鹿嶋を犯し、進んで筑前に迫ったが、我將 河野通有、竹崎季長等奮戦し奇襲を以て大に敵を悩ました。

やがて敵將 范文虎、江南軍十余万人、戦艦三十五艘を以て肥前へ海に未襲したから、海島に敵艦を蔽わせた。我軍敵の新武巻の手痛い攻撃を意とせずよく戦ったので、敵遂に退き肥前の鷹島に拠った。

偶々七月晦日の夜から大風起り、敵艦破れ、溺る、者寡く、我軍之に乗じて進み撃ったので、敵將范文虎等僅に身を以て遁れ還った。之を弘安役と云う。

忽必烈 敗報を得大いに怒って、後屢々再挙を謀り、我々防備を嚴にして之に備えたが事なくして終った。此戦で元兵生きて還る者僅に三人、他は悉く玄海の浪に呑まれた。但し此の生還者三人説は、日本 支那の史料ともに出で居る事だが、三万の方を除いたものらしいと云われて居る。

△ 神風の 大和島根に 仇あし...1281

仇が滅んだ 喧嘩の灘に やがて日影が うらうらと...1281

(附記) 1 戦月勝の原因 (1) 皇室の御統威 (2) 将卒の一致 (3) 頼朝以来養った武士的精神 (4) 泰時、時頼等の善政

(1) 時宗の果斷 (2) 天佑...等による。

2 元寇の結果 (1) 軍費及び祈禱料莫大で国力疲弊 (2) 将士恩賞の困難 (3) 戦後余侈の風起り (4) 幕府の失政(征伐など)で天下の人心荒み 北条氏の衰亡を来した。

3 九州探題と長門探題の起原 元寇に際し、北条時宗が九州に遣したのが九州探題の起りで、宗朝は長門を守らせたのが長門探題の起原と云う。

(年記)

1282 (後宇多、弘安5) ⑩ 日蓮宗(年1) 時宗、円覚寺を建つ

1288 ⑪ 伏見帝即位 (1293年7月 後伏見帝に譲位)

1299 (後伏見、正安1) ⑫ 元徳帝一山未る

1305 (後=条、嘉元3) ⑬ 京都、治政を禁ず

⑭ 龜山法皇崩(55) 南朝(1333)の起り

1316 (花園、正和 5) ⑮ 高村執権、此頃 北条時宗の金沢に文庫を立つ。

1324年 正中の変 (後醍醐朝、正中1年9月)

(四皇統の争と北条氏)

北条氏はさきに、土御門上皇が承久の御企てを諫め給うたのを徳とし、四條帝の崩御生の皇子を位に即け奉った。即ち後嵯峨天皇である。天皇崩れなく位を御子後深草天皇に譲られ、後深草帝は御弟龜山天皇にお譲りになつた。然るに其後、後嵯峨上皇の遺詔により、皇位は龜山天皇の御子孫に譲る事になり、その皇子、後宇多天皇が位をお受けになつた。依て後深草上皇下平に在したつて、北条時宗は龜山上皇に奏請し、後深草上皇の皇子伏見天皇を後宇多天皇の嗣と定め奉った。これから龜山、

後深草四上皇の間、御不和となり、近臣又党を争して争うに至った。もと後宇多上皇は大覚寺(嵯峨)に居給うたが、その御子孫は大覚寺統と申し、伏見上皇は持明院(京師)に居給うたからその統を持明院統と申し、両統の争益々烈しくなつた。

依て北条貞時は兼して両統十年毎に交立する事となし、後伏見帝の次は後二条(大覚寺統) 花園(持明院統)立ち給ひ、次に大覚寺統の後醍醐天皇の御代となったが、北条氏は機会ある毎に皇室の事に干渉し、持明院統を援けて大覚寺統を抑えた。よつて後醍醐天皇は幕府を倒し、政權を回復せんと思召された。偶々幕府にあつては北条高時、暗愚で、元寇以来財政の困難になつたのを思はず、日夜、田樂、闘犬等の遊樂に耽り、輔佐の臣長崎高経又専横政を失し、人心日々北条氏を去るを見給ひ、此年日野資朝、全俊基と四ツ、密に諸国の武士を召集し給うた。土岐頼兼、多治見国長等召に應じて来て討幕の議に賛したが、謀洩れて大波羅の兵に囲まれ奮戦して歿し、ついで資朝、俊基は捕えられて鎌倉に拘せられた。

尚高時は天皇をも廃せんとしたが、誓言を賜り僅に事おきを得た。世に之を正中の変と云う。

▲ 正中に 国は乱れし 天狗舞……1324

愚者だよ 執權殿は 国はどうなる 天狗舞……1324

(附記) 五攝家 攝家は頼朝の時、近衛、九条の二家に分れたが、北条氏の末には近衛家から新に鷹司家分れ、九条家から一条、二条の二家を出し、遂にこれ等五家代る代る攝関となる事となった。之を五攝家と云い、後藤氏の勢力に及ばれた。

2. 資朝と俊基 翌年中二年資朝は佐後に流され、俊基は捕らされて帰京したが、元弘二年六月二人は遂に殺された。

(年記)

- 1325 (後醍醐、正中2) 日野資朝を佐後に流し、全俊基殺さる
- 1326 (全 嘉暦1) ⑦ 量仁親王を皇太子とす
- 1331 (全 元弘1) ⑧ 天皇笠置に幸す

1331年 元弘の乱 (後醍醐、元弘1年5月)

(楠木正成義兵をめぐり9月)

後醍醐天皇は、邦長親王を皇太子とせられたが、その薨後、高時天皇の御旨にそむき、後伏見天皇の皇子量仁親王を皇太子としたので、天皇憤慨 再び討幕の企をなされた。先ず嘉暦二年、護良親王(尊雲法親王)を天台座主として僧徒と結ばしめ、機を待たれたが高時覺り、此年大軍を以て京都を攻めたので、八月天皇笠置に行幸あり、九月高時 光嚴院(量仁親王)を擁立し、笠置を囲み、次で之を陥れた。

やがて諸所に勤王の軍起り、中には河内の楠木正成は

天皇の召に應じて直に義兵をあげ、赤坂城に拠つた。同時に備後の人 梯山翁俊 も兵をあげ遂に正成に應じた。が笠置陥ると聞いて自殺し、十月赤坂も亦陥った。

△ 末ながく そり名薫れり 赤坂城……1331

命的にし それ楠が 冴えて薫るよ 赤坂に……1331

(附記) 乱後の状況 翌年三月高時は天皇を隱岐に遷し奉り、六月資朝、俊基等を斬り、其他事に與つた人々を流斬に処した。正成は四月赤坂を復し、冬十早に築き、護良親王を吉野に築き給うた。

(年記)

全年 ①天皇笠置に奉り ②高時光嚴院を擁立、笠置陥る
③赤坂城陥る

1332 (後醍醐朝, 元弘2) ④天皇隱岐に遷幸 ⑤資朝、俊基等殺さる ⑥冬、正成十早に護良親王吉野に築城

1333年 北條氏七郎 (後醍醐朝, 元弘3年5月)
(鎌倉陥る)

此年閏二月、天皇は隱岐を逃れて伯耆に渡り、名和長年に身を寄せ給うた。此頃、土居得能両氏は伊予に、菊池武時は肥後に、赤松則村は播磨に各義兵をあげ、官軍の勢盛になつたので、高時は驚いて、其將足利高氏を西上させたが、高氏は却つて官軍に降り、赤松則村等と共に五月六波羅を攻めて之を陥れた。

又新田義貞は初め幕軍に従つて居たが、遂に之に叛き、兵を御国 上野 に起し、此年進んで三方から鎌倉を攻め

火を放つたので、高時以下防戦効なく、遂に一家主從別離の酒宴を開き、悉く自殺して果てた。斯うして時政以来執権として威を振つた北條氏は十四代にして全く亡び、鎌倉幕府終を告げた。

△ 死水に 酒は高時の 思案なり……1333

運を打つ槌 さんざん狂れて 死んで行く身を 酒の宴……1333

(年記)

全年 ①天皇船上りを筆詔して光嚴院を廃す ②天皇遷幸、護良親王を征夷大將軍に任ず

1334年 建武中興成る (後醍醐朝, 建武1年5月)

前年、後醍醐天皇は、伯耆の船上山で六波羅陥落の報を得給ひ、詔して光嚴院を廃し、楠木正成、赤松則村等に迎えられ、帰途鎌倉陥落の報に接せられ六月京都にお歸りになった。かくて公武合体の大政治を興さんとて、記録所を再興して親ら政を執り、護良親王を征夷大將軍とし、猶 雜許決断所を設けて土地に關する訴を裁決せしめ又 武者所を置いて武士を収縮せ給うた。

地方には新に国司を任じ、公卿武士の功ある者を之に充て、北畠顯家を陸奥守とし結城宗広と共に皇子義良親王を奉じて奥羽を治め、足利直義を相模守として皇子、成良親王を兼鎌倉に居て関東を治めしめられた。

扱愈々こゝに至る功を論じ、賞を行ひ、やがて此年正月、建武と改元あつたので、世に之を建武中興と云ふ。

斯うして頼朝以来百四十二年間打続いた鎌倉幕府も、茲に倒れて政權再び朝廷に帰った。しかし中興の業は、世人の期待に合はずして永續せず、翌年 尊氏が叛するに及んで世は又乱世に入った。

▲ 五月闇 暫しは晴れて 月さやか...1334

玉のまつりに 五月の闇が 暫し晴れたる 月今宵...1334

(附記) 1. 中興の論功行賞

足利尊氏 = 武藏、常陸、下總 (天皇の御諱 (尊治) の一字を賜り高氏を尊氏と改め、戦功ありとして鎮守府將軍に補せられ、参議に任せられた。

新田義貞 = 越後、上野、播磨

楠木正成 = 摂津、河内

名和長年 = 田幡、伯耆

赤松則村 = 播磨の一莊

2. 中興失敗の原因 (ア) 論功行賞 公平を欠き不平の徒多し

(イ) 公卿は武士を軽蔑し公武不和 (ウ) 公卿政治に別れず幸祿滯る (エ) 大内義隆の益重税を課し人民不平 (オ) 財政窮乏 紙幣を発行して土民苦む。

3. 新田氏と足利氏 両氏はもと、源義家の子義国から出た。

即ち義国の嫡子義重上野の新田にあって新田氏を称し、義重の弟義隆下野の足利にあって足利氏を称した。其後新田氏は世に現れあつたが、足利氏は常に幕府に親み名望が高かつた。

(年記)

全年 ⑩ 護良親王幽せらる

1335 (後醍醐朝、建武2) ⑨ 北条時行の乱に護良親王弑せらる。

1335年 足利尊氏叛す (後醍醐朝、建武2年10月)

尊氏かねてより野心あり、建武新政の世に喜ばれず、ひそかに武家政治を慕う者多しを見て、巧に私恩を施し是等不平の徒の心を収め、又護良親王と新田義貞とを深く忌み、先ず親王を讒し捕えて鎌倉におしこめ奉つた。偶々此年七月高時の子 時行兵を信濃にあげ、進んで鎌倉を襲った時 (中先代の乱) 直義は護良親王を弑し奉つて走つた。やがて尊氏は時行を誅伐し、乱後自ら征夷大將軍と称して、京都には居らず、次で義貞を除、を名として兵を鎌倉に挙げたが、不平の徒争つて之に附き勢振つた。天皇、此年十一月尊氏の官爵を削り、義貞、顯家をして之を討たしめられたが、翌月義貞は賊軍と竹下 (駿河) 箱根 (相模) に戦い敗れて西に帰り、尊氏兄弟之を追うて京に迫つた。ついで行賞に不平な赤松則村も又叛して尊氏に應じ、東西から京都を攻めたので翌年天皇睿山に行幸あり、再び世は争亂の巻と化した。

▲ 先のより しまつの悪い 名も足利...1335

あしと云う名に その実見せて 末の世に立つ ならず者...1335

(年記)

1336 (後醍醐朝、延元1) ③ 多々良浜の戦 ④ 尊氏大挙九州を発す

1336年 楠木正成戦死す(後醍醐朝、延元1年5月)
(湊川の戦)

尊氏、直義、則村等の攻撃により、此年正月天皇は、比叡山に行幸になったがやがて北畠顕家が陸奥から来て義貞、正成等と力を協せ、賊軍を破り京都を回復したので、尊氏は九州に走り、天皇再び京都に御還りになった。さて九州に敗走した尊氏は、菊池武敏と執前の多良良浜に戦い之を破り、直義と共に九州、四国、中国の大兵を以て東上した。之に対する楠木正成が深謀の計画容れられず、遂に義貞と共に、兵庫に之を迎え討つに至つたが衆寡敵せず、弟正季と共に、五月兵庫の湊川に戦死した。義貞も亦京都に敗れ還り、天皇再び叡山に幸ありついで十二月吉野にお遷りになった。時に名和長年等も戦死して官軍益々非違に向つた。

今神戸市兵庫にある別格官幣社 湊川神社は楠木正成を祀つて居る。

△ 咲く花の しがらみ清し 兵庫川……1336

石の忠義を しがらみとめて 末は湊か 兵庫川……1336

(年記)

全年 ① 尊氏、光明院(豊仁親王)を擁立……北朝の祖
② 建武式目十七条成る

1337(後醍醐朝、延元2) ③ 金ヶ崎落城、④ 北畠顕家鎌倉を陥る

1338(延元3) ⑤ 北畠顕家石津に戦死

(附記) 1. 正成死を急がず

従来、正成はその建策の用いられざるを惜り、殊更湊川に死を急いだかろく云う人があったが、重野博士の説の如く之は誤で、湊川戦は直義の大軍に対抗し苦戦奮闘、根氣も殆ど尽きた時更に細川定禪に後を絶たれ、絶体絶命目撃したので死を急いだのでは無い。

曾て笠置山で天皇に謁した時「臣が生きて居る中は御心安く思召せ」と云つて天下の重きを自任して居た正成は決して軽々に身を捨てはしなかつた。

2. 吉野の朝廷(南北兩朝の対立)

北条氏は元弘の乱の際に光厳院を立て、假の天皇としたが、尊氏も京都に侵入して後、光厳院の御弟、光明院(豊仁親王)を立て、賊名を避けんとし、神昏を新帝に譲り給う事を後醍醐帝に請うた。よつて天皇偽器を受け、潜に吉野に幸せられた。時に延元元年(1336年)12月で、この後四代(後醍醐、後村、長慶、後龜山)の天皇は吉野の行宮で政をき、給うた。

これから吉野の朝廷を南朝と呼び、他を北朝と云う。当時、楠木氏は河内、和泉に、新田氏は越前に、北畠氏は陸奥に、菊池氏は九州にあって各勤王の軍を起し、天下南北の両派に分れて五十七年の間争乱が続いた。

1338年 新田義貞戦死す(後醍醐朝、延元3年閏7月)
(藤島の戦)

足利尊氏が九州に走り、天皇京都にお遷りになった時、義貞は力を奉じて北国を全管せんと、皇太子恒良親王及尊良親王を奉じて越前に赴き、金ヶ崎城に拠り義兵を募り、勢綯振つたが、1337年高師泰来り攻めろに及び、二月、瓜生保は金ヶ崎城を援けて戦死し、翌月全城陥り、恒良親王執えられ、尊良親王は新田義顕等と共に戦死さつた。義貞は尚此後、越前和山に拠つて勢の回復に

つとめたが、此年同月、白河 新汲高社と足羽城に攻めようとして越前藤島に至りこゝに戦死し、これから、北国の官軍衰えた。義貞時に年三十八才。今別格官幣社、藤島神社に之を祀る。

△ 杣山中 死を鳴く鳥の 行く見えて……1338

● 哀れ吹き行く 杣山風が 誘う嵐と 世を捨て……1338

(附記)

1. 新田義貞嘗て帝より下された^{ウツ}勾当内侍に迷い、尊氏を返撃せず降城を誤ったと云ふ説が太平記にあり人々傳承するが之は全く誤で、跡方しむること、思ひに平家物語の頼政と菅原の前の事をして之に採擬したのだと云う。

2. 北畠顕家の戦死 此年陸奥の^{ツル}霊山に居た、北畠顕家、義良親王を奉じて西上し、尊氏の子義詮を破り、進んで根津に入ったが、賊将高師直と阿部野に戦つて敗れ、五月初九の石津に戦死した。

又その身 顕信は奥羽を鎮し正平二年敗れて吉野に帰り、十四年征西將軍 懐良親王に従ひ小惑頼尚を筑前に討ち戦死した。

3. 宗良親王は北畠父子と行動を共にせられ、遠江の井伊谷に於て清兵に降戦せられた。

(年記)

全年⑧ 尊氏自ら將軍を稱す

1339 (後醍醐、延元4)⑤ 後醍醐天皇崩(寿52)

1343 (後村上、興國4) 叙エ正宗 京都に位す

1348年 楠木正行戦死す(後村上、正平3年1月)

(四條畷の戦)

延元四年、後醍醐天皇 行宮に崩じ、後村上天皇ついで

立ち給うた。当時親房吉野に還つて朝政を統べ、諸国と連絡をとり、楠木正行又よく小勢を以て大敵に當つた。

此年賊は高師直、師泰兄弟をして吉野を攻めしめたので、正行死を決し前年十二月廿七日吉野の皇居に参つて天皇にお暇を告げ、先皇(後醍醐帝)の廟を拜し、その日の中に進んで河内の四條畷に敵を迎え討ち、奮闘して一度之を破つたが衆寡敵せず、遂に弟正時と共に此処に戦死した。正行時に年廿三才であつた。今四條畷神社にそり灵を祀る。

△ 四條畷に 散るは若木の 山櫻……1348

歌を吉野に その身はこゝに とめて果てたる 山櫻……1348

(附記)

1. 足利氏の内訌 尊氏さまに権に京都に幕府を開き、自ら將軍と稱し政務は弟直義に委せた。然るに百もあく直義は、兄の執事高師直と権を争ひ1351年之を殺した。此年あつて尊氏、直義兄弟の争とあり遂にその翌年(1352年)尊氏は直義を鎌倉に殺した。

2. 官軍の形勢 正行死後、師直、吉野を犯したので、天皇は賀名生にお遷りにあつた。後義詮、後村上天皇の還幸を請うたので天皇男山に幸せられ官軍京都を回復したが、間もなく義詮又反き男山を攻めたので、天皇再び賀名生に幸あさつた。其後官軍 足利氏の内訌に累じ二度近京都を復したが、永く保たずして形勢非となつた。

3. 新田義興 義貞の子義興は東国に於て賊と戦ひ利あく1358年武蔵の矢口で殺された。

(年記)

- 1348 (後村上, 正平3) 正行死後、帥直吉野を犯し、天皇賀名生に還幸
- 1349 (全 全 4) ①足利基氏鎌倉管領とある(南東管領の始)
- 1351 (全 全 6) ②高師直、師泰殺さる ③僧 疏石死(年76)
- 1352 (全 全 7) ④尊氏、直義を殺す(年47)

1354年 北畠親房死す(後村上, 正平9年4月)

親房は、後醍醐、後村上二朝に仕え、吉野朝廷唯一の画策者として功績最も多かつた。長子顯家の義良親王を奉じて奥羽を鎮するを助け、顯家が石津に戦死した後、子顯信、結城宗広と共に義良、宗良二親王を奉じ、伊勢を念し、海路陸奥に行かんとして偶々颶風に遭い、船山散し、義良親王及び顯信、宗広等は伊勢に吹戻され、宗良親王は遠江に漂着せられ、親房独り常陸に入り、小田城に在って東国の官軍を指揮し、興国二年高師冬と戦い退いて関城を保った。彼文筆に長じ忙しい兵馬の間に在って 神皇正統記 を著し、吉野朝廷の正統なる事を明にした。後京都に還り、天皇を援けて画策したが、此年遂に六十三歳を以て賀名生で死んだ。彼の死後吉野朝廷甚だ振れかくなつた。

▲ 正統を 速べて親房 土に入り……1354

赤い誠が 四月の花に なって親房 散って行く……1354

(附記)

1. 九州の形勢 九州では菊池武敏の子武光が征西將軍

懐良親王を奉じ 1357年賊將小貳頼尚の軍を大に筑後川の辺に破り勢振ったが親王薨じて後は菊池氏も衰えた。

2. 楠木正儀 正行、正時死後、楠氏の中堅正儀は南朝の爲に尽したが、足利義満將軍を称した翌(正平24)年即1369年義満に降った。此に就て世間その心事を疑うが、久米博士の説によると彼は南朝の將來をうらえ、南北両朝の和睦を謀らんが爲にしたのだと云う。即此目的の爲には此の時期が南朝の爲に尤も好い時であつたのだが、惜むらく、後村上天皇の崩御によりて果されず、此後北朝の勢張り、愈々南北合一の果された時には南朝の不利と云つた。此間にあつて善処せんとした正儀の心事は又憐れむべきである。

(年記)

- 1358 (後村上, 正平13) ④足利尊氏死(年54) ⑩新田義興矢口に誘殺さる ⑪義詮將軍自稱
- 1359 (全 全 14) ⑧菊池武光、少貳頼尚を筑後川に破る
- 1367 (全 全 22) ②元使倭寇の策を乞ふ ⑩細川頼之管領とある ⑫義詮死、義満つぐ
- 1368 (全 全 23) ③後村上天皇崩御(寿40) 長慶天皇即位
- 1370 (長慶, 建徳1) ⑩今川了俊九州探題とある
- 1378 (全, 天授4) ③室町花御所成る ④懐良親王、了俊を破る
- 1391 (後龜山, 元中8) ⑫義満、山名氏清を亡す(明徳の乱)

1392年 李成桂 朝鮮王となる(後龜山, 元中9年7月)

弘安の役後高麗は財政いたく乱れ、その上倭寇の侵略を蒙つて大に疲弊した。偶々權臣李成桂、倭寇を退けて民望を得、此年高麗王を廢して自立し、国を朝鮮と号し都を漢城(京城)に奠めた。之を太祖と云い、李王家の祖である。やがて朝鮮 我国に通商を請うたので、幕府は大内氏(後に宗氏)をして之に當らしめた。

(東洋全年代参照)

▲ 成桂が 乱を鎮めて 国を奪り……1392

(附記) 倭寇 鎌倉時代の末(吉野朝)頃から内地に志を得
ふい者や、西海の辺民が、支那、朝鮮の沿岸を去し、明初に
其害殊に甚しく、支那人は倭寇と称して大に恐れた。

明(ば)しばその防圧を請い、義満の時之を禁じたので一時
衰えたが、應仁以来国内の乱るにつれ、倭寇再び盛にあり、
八幡大菩薩の旗を立てた舟にのり盛に沿岸を荒した。
明人八幡賊として恐れた。

これ等は我国人の元気の表れで 後には南洋地方に航し
武名を海外に轟かす者も出るに至った。

1392年 南北両朝の合一 (後龜山、元中9年閏10月
北朝、後小松、明徳3年)

楠木正成 戦死の年、尊氏 光明院を立て 同年後醍醐天皇が
吉野にお遷りになってから既に五十七年に及んで争が絶
えなかったが、此年義満は大内義弘をして吉野に詣り、
後龜山天皇の還幸を請い奉ったので、天皇之を許して京
都に還御、神器を北朝の後小松天皇にお傳えになった。
依て南北両朝合一し天下始めて一統した。

▲ 末長く 両河の流 合一し……1392

今は怨も 清い捨て、両河一つに 北南……1392

(附記) 西統交立の約 義満は、後龜山天皇に両統の迭立
を誓って、神器を後小松帝に譲り給ふよう申上げたが、迭
立は行われず、これから皇位は持明院統に帰した。

南朝方は義満に其欠かれて怒り、又誠心合一に働いた
大内義弘は違約の責を負い、南朝への情誼に忍びず、後、
應永六年、足利氏に反旗を翻したのである。

室町幕府の成立 (尊氏、義詮二代)

初め足利尊氏は擅に征夷大將軍となって幕府を開き、建武武
臣を以て將士を取締り、武家政治を再考したが、その子義詮
までの間は戦乱相つぎ、且一族諸將思になれ足利氏の威
令行われなかつた。

(2) 將軍義満 義満は1367年家をつぎ、名臣細川頼之の補佐を
受け1378年室町に花御所を營み1391年驕臣山名氏清(六方一職)
を除き諸將を服服し、ついで南北両朝合一に尽力して征夷大將
軍とあり大に威を振り幕府の制度を整えた。
義満が室町の邸には花を多く植えたから花御所と呼ばれ又
ここに居て政をとつたから室町幕府の名も起つた。

室町幕府の組織

- (1) 中央 { 室町幕府の組織は鎌倉幕府に倣つた
將軍一管領 { 政所(執事)……一般行政
侍所(所司)……軍事警察
問注所(執事)……裁判
- (2) 三管領 = 鎌倉時代の執権に当る將軍の補佐役、細川、畠山、
斯波三氏、任ぜられた依て三管領(三職)と云う
- (3) 四職 = 侍所の長官を所司と云い、赤松、一色、山名、京極の四氏
之に任ぜられ、権力管領に次いだ之を四職と云う。
- (4) 地方 { 關東管領 = 鎌倉に置き東國を統べしめた義詮の弟基氏の子孫世襲
探題 = 九州と奥羽にかく、
守寶、地頭 = 諸國にかく

(年記)

1397年 金閣成り義満移る (後小松、應永4年4月)

▲ 三層の 樓に義満 身を奢り……1397

暗月夜を その三層の 樓に見飽かぬ 身の奢り……1397

1398 (後小松、應永5) 三管領、四職、七頭をおく

1399年 應永の乱 (後小松、應永6年10月-12)
(大内義弘反逆)

▲ 堺の 乱に大内 零落し……1399

應永六年 堺の浦の 乱に大内 零落し……1399

1401年 義満、明と好を通ず(後小松、應永8年3月)

義満さまに山名氏清(明徳の乱)後に大内義弘(應永の乱)を滅して長く打続いた戦乱も止み、心驕り、さまに應永元年十二月軍職を義持に譲って、太政大臣に任ぜられ、日々遊樂に耽り豪奢を極め、出入の儀衛を上皇に擬し諸方に巡遊した。又頻りに土木を起し、花御所を造り、また京都北山に別邸を営んで「隱居の地とし、林泉の美を極め、金閣を起し風流を尽した。斯して財政困難となったので、彼は明と貿易し、明主から日本国王の号を受け、その利を喜んで臣礼を以て之に仕え、大義名分を乱った。

△ たわけ者 僅かの銀を うれしがり……1401!

いづれ落ち行く 血獄の蓋を わけて出る気が 穴の銭……1401!

(附記)

1. 公方 世、義満を呼んで「公方」と云い、又北山殿と云った。公方とはもと朝家の義であるが、これから遂に轉じて征夷大將軍の別称となった。
2. 天龍寺船 これより前、足利義満が、天龍寺造営の資を得る為、毎年、船二艘を元に遣し通商せしめた。世に之を天龍寺船と呼んだ。
3. 勘合符 室町時代入明船の航海見状で、幕府之を明より受けて渡航者に與え、海賊船と區別せしめた。亦か幕府で之を監し、幕府兼て往來は大内氏之に當り貿易の利を占めた。

{年記}

1404(後小松、應永11) 明の勘合符を得、船と人の数を定む
1419(後小松、應永26) の

1419(後小松、應永26) ④ 足利義持明と絶つ
1432(後花園、永享4) ⑧ 足利義教明と交を復す

1438年 永享の乱起る(後花園、永享10年8月)

鎌倉は頼朝以来武家の根拠地なので、軍氏は次子基氏を關東管領として茲に居らしめ上杉氏を執事とし、東国よく治った。然るに基氏の子氏満心驕り自ら關東公方と称し自立を企てたので、執事上杉憲春之を諫死した。

その子満兼の時(應永6年) 大内義弘は之と結んで京都を攻めようとしたが、義弘堺で敗死した為、満兼やむなく將軍と和した。之を應永の乱と云う。

京都では義満の後、義持、義隆將軍となりその死後、義持の弟義田還俗して義教と改め將軍となった。

持氏は豫て將軍たらんと思つて居たので「我何ぞ還俗將軍に屈せんや」と豪語して事毎に反抗、執事上杉憲実の諫めをきかず却つて之を殺そうとした為め、義教は憲実を助け、此年持氏を討ち永享の乱こゝに起った。

翌十一年二月、持氏敗れて自殺し乱終り、茲に關東管領家は四代氏を九十年にして亡び、これから關東の実権上杉氏に歸した。

△ 櫓をつく 新將軍の 義教に……1438

あんな坊主と つい口ずべり さんざやうれた 義教に……1438

(附記)

1. 嘉吉の乱 將軍義教は性果斷さきに持氏を滅し頼りに強賊の勢力を殺いで、幕政を張ろうとしたが、こゝに赤松満祐自領の削らるゝを聞き、遂に嘉吉元年(1441年)將軍を自邸に招いて饗宴に集じ之を殺し本国播磨に歸つた。義教の子義勝立ち、山名持豊(宗全)を遣いて満祐を滅した。依て一時衰えた山名氏再び興り軍職は義勝の弟義政がついた。

2. 関東の分裂 (古河公方と堀越公方)

持氏の死後、鎌倉に主がないので上杉氏は將軍義勝に請ひ、持氏の子成氏を迎えて関東管領とした。然るに成氏は父の仇として上杉氏を怨んだ為、上杉氏に攻められて下野の古河に走つた。之を古河公方と云う。

依て上杉氏は又義政に請ひその弟政知を迎えて東国の主とし、伊豆の堀越に居らしめた。之を堀越公方と云ひ古河に対抗した。

(年記)

1439 (後花園、永享11) ② 永享の乱 終る

1440 (仁 全 12) ③ 結城合戦

1441年 嘉吉の乱 (後花園、嘉吉1年6月-9月)

(赤松満祐、義教を害す……6月)

△ 罪と罰 土に義教 入り果て……1441

赤川木公の木 カで押せば つりに血を見る あべこべに……1441

1449 (後花園、室徳1) ① 足利成氏 関東管領とある

④ 義政將軍とある

1455 (仁 康正1) ⑤ 成氏 幕府に討たれ、古河に拠る(古河公方)

1457年 太田道灌、江戸城を築く(後花園、長祿4月)

関東管領家が、古河と堀越の両家に分れるより前、上杉氏に於ても、山内、扇谷の二家に分れて互に相争つたが、扇谷家には名臣 太田道灌 (持資) が出て、此年江戸城を築いて古河に備え、山内家とも和して一時靡きを得たが、道灌が主家に疑われ暗殺せられて後は関東再び騒しくなつた。

道灌は實に文武の才に富み、和歌に巧で、此年築いて拠つた江戸城は、後に徳川家康の居城となりその地は明治に至って帝都となり、世界屈指の大都會となつた。

道灌の詠に

わが庵は 松原つゞき 海近く

富士の高嶺を軒端にぞ見る

とあるが、その頃城は、夕立の空より広い荒涼たる武蔵野の原に淋しく立って居たのであろう。

△ たゞじゃよと 軒端の富士を 見せて云い……1457

江戸の道灌 たづぬて行けば 何もないかと 窓の富士……1457

(附記)

1. 江戸の地は鎌倉時代の江戸氏(室継、室長等)によって創められたのがその起りだ」と云う。

2. 山吹の話 傳説によると、道灌は若年武勇粗野、遊獵に耽り、一日雨に遇ひ、装借る爲に民家に入ると、少女が山吹の一枝を採りて、行くと……

これから歌に志したとあるが之は誤で、老士語録には少女であく、老女が山吹の歌を誦したとあり居るの事附会しての語であらう。とい南道達は父の教によりまかり和歌に長じ文をよくした。

(年記)

全年 ⑬ 足利政知を関東の主とす(堀越公方)

1467年 應仁の乱起る(後土御門、應仁1年7月)

此の大乱は、権臣の跋扈と、義政の悪政と、將軍継嗣の争と、其他諸氏の家督争等に因って起ったもので、初め足利義政は職を弟義視に譲ろうとし、細川勝元に之を補佐せしめたが、間もなく義尚が生れると、夫人富子は家督を之に傳え度く、山名持豊(宗全)に託した。

其頃島山氏は、持国の実子義就と、養子政長と家督を争い、又斯波氏でも義敏、義廉二養子の相継争があつたが、宗全は義就、義廉を、勝元は政長、義敏を誘ひ、各大兵を集め、遂に此年 勝元の軍は幕府の東に、宗全の軍は西に陣し京都の内外に争うに至つた。

文明五年、宗全、勝元相次で死に、義政は職を義尚に譲つたが、其党尚兵を解かず、其後四年、文明九年(2137年)に至つて、諸將、戦に倦み、各々兵を収めて領国に歸り戦漸く終つた。

其間實に十一年、京都は戦乱の巻となつて、御所、

幕府、社寺、民家多く兵火に罹り、朝廷は衰え、幕府の威信は地におち、豪族各地に割拠して戦国の世の導きとなつた。義政の祐筆 飯尾六左衛門の歌に

な水や知る者^Pは野辺の夕雲雀

あがるを見ても落つる涙は とあるが

此の戦で都は全く荒野原と化したのである。

△ 誰か知る 雲雀鳴く野が 都とは……1467

鬼火怪しく 街は荒れて 骨が鳴くのか 虫の宿……1467

(附記) 徳政(義政の悪政)

義政長じて政治を怠り、奢侈に耽り、財政窮乏して、段銭標別銭等の重税を課し又屢々 徳政の暴令を出して士民の苦を思わなかつた。

徳政とはもと天災凶年などに、田租、課役を免除して貧窮老疾を救ふ善政であつたが、後には債権、債務を破棄する暴令の名とあつた。鎌倉時代の末に既に此の暴令あつたが、室町時代亦之に倣ひ、殊に義政は一代に十三度も此令を発し、政を台つたので、後花園天皇は憂慮して戒められるに至つた。

(年記)

1469(後土御門、文明1) ① 義政 義尚を頼とす

1473年 山名宗全②、細川勝元⑤ 死す(後土御門、文明5年)

△ 戦を 冥途の土産に 死つ二人……1473

おくれ先だつ 露の身二人 三つ瀬細川 死出の山……1473

全年 ⑭ 義尚 將軍とある

1477年 應仁の乱止む(後土御門、文明9年12月)

△ たゞ荒れて 都大路は 見えわかず……1477

戦終つて 立寄り身…… 都大路に 虫が鳴く……1477

1483年 銀閣成り義政之に移る(後土御門,文明15年6月)

▲ 民の苦も 義政殿は 知らぬ産夏……1483

奢り極めて 立てたは東山の御殿を じろがねに……1483

1486(後土御門,文明18)㊦ 上杉定正,道灌を殺す(年55)

1490(全 延徳2)㊦ 義政死す(年56)

1491(全 全 3)㊦ 政知病死す(堀越公方と伊勢長氏)
伊豆に起る

室町時代の文物

1. 佛教 { 禅宗 = 雪村、義満の準信、京都、金兼倉の五山
一向宗 = 蓮如上人等により平民層に弘通
日蓮宗 = 弘通
2. 文学 { 漢詩文 = 一条兼良、冬良、五山の僧、上杉憲実の奨学
和歌・連歌 = 太田道灌、東常縁、宗祇、尚相
国文 = 吉田兼好(徒然草)
謡曲 = 能学の流行
3. 美術工芸 { 義政の東山時代に発達
絵画 { 佛画 = 明兆
墨絵 = 如雪、周文、雪舟
狩野派 = 狩野元信
土佐派 = 土佐光信
建築 = 金閣寺、銀閣寺
金工 = 後藤祐兼(金工の祖)
陶磁器 = 祥瑞五郎太夫
漆器 = 藤崎珠に精巧
4. 風俗 { 服装
家屋 = 茶院造
遊技 = 茶湯、挿花、香合、能狂言、田楽、猿樂

1495年 北条早雲,小田原城を取る(後土御門,明應4年2月)

應仁乱後幕府の威信全く地に墜ち、將軍は只名のみで政令行われず、地方の守護地頭各地に割拠して擅に政を行ひ、兵を蓄えて勢を張らんとし、この後百余年間は我が政治的統一を失ひ、戦乱絶ゆることなく所謂戦国時代となった。

今川氏の容許 伊勢長氏は延徳三年堀越御所の乱に乗じ、政知の子茶々丸を殺して伊豆を略し、莖山城に拠ったが、遂に此年小田原の大森藤頼を襲って小田原を取り、比叡に居城を定め、九月北条氏を名づり後入道して早雲と号した。尚頼りに附進の地を蚕食して勢強く関東の雄となった。實に彼は空拳を振って起った戦国英雄のその最初の人である。

▲ 奪るよ小田原 乱世の雄 長氏が 1495

うしと見し間を 取られた城に ラカン頭が にくらとい 1495

(附記)

1. 北条氏の強盛 北条氏は早雲の子氏綱の時、旁聴の豪族里見氏、小弓氏の聯合軍を国府台に破り、其地を併せた。その子氏康は西上杉の聯合軍を武蔵の川越に破り、扇谷と杉を滅し、上杉憲政を逐らし、古河公方を滅すなどして関東の大半を収め、小田原大に業をたてた。

2. 群雄割拠の形勢

関東 = 北条氏
上野 = 上杉氏
越後 = 上杉氏
越前 = 上杉氏
美濃 = 斎藤氏
尾張 = 織田氏
伊豆 = 北条氏

- 甲越一 武田氏、上杉氏
- 東海一 今川、徳川、織田諸氏
- 近畿一 浅井、朝倉、斎藤、北条諸氏
- 北陸一 一向宗徒、(富樫氏、越前)
- 中国一 尼子、宇喜多、大内、毛利諸氏
- 四国一 長宗我部氏
- 九州一 島津、大友、龍造寺諸氏

{年記}

- 1519 (後柏原、永正16) ② 早雲蒞山城に死す(年98)
- 1521 (全 大永1) ③ 踐祚後廿二年目に即位礼を行ふ
- 1522 (全 全 4) ① 北条氏綱江戸城を取る
- 1536 (後奈良、天文5) ② 踐祚後十年目に即位礼を行ふ。豊後吉生
- 1539 (全 全 7) ④ 小弓義明、北条氏綱と国府台に戦い死す

1543年 ポルトガル人鉄砲を傳ふ (後奈良、天文12年8月)
(欧人渡来の始)

我が戦国時代の初にあたり、ヨーロッパでは航海術大いに開け、マルコ・ポーロの記録に刺戟されて、コロンブスのアメリカ発見、ガマの印度航路発見などとなり、ヨーロッパ人が多く東洋に来うようになった。

此年ポルトガルの商船一隻、我が大隅の種子島に漂着して鉄砲を傳へ、島主種子島時義之を島津貴久に献じた。これ欧人渡来、鉄砲傳來の始である。

これから鉄砲は急に諸国に広まり、我が戦術、築城法に一大変革を興えた。

△ 流氷弾 鉄砲渡る 島の秋……1543

恐ろしいぞえ 流氷で寄って 鉄砲傳わる 島の秋……1543

{附記}

1. 鉄砲の傳來は普通上説の通だが、一説には是より前天文八年八月、薩摩国赤尾木の港に南蛮の船が来て、ムラヤンと云ふ者が在りて日本人に砲術を傳へたと云ふ。
2. 南蛮人 ポルトガル人及び、西の西人等、呂宋のマニラを根拠地として移住し、ポルトガル人と共に貿易を営んだ。彼等は薩摩方面から来たので、我々人々を誤称して南蛮人といひ、此等年々増え来た。
3. 大砲の傳來 天文四年の夏、南蛮から石火矢を肥後にもたらした。大友宗麟等に悦ばせ、豊後臼杵の莊丹生の島に運ばし名を國嶺と云つたと云ふ。

{年記}

- 1545 (後奈良、天文14) ⑤ 上杉憲政川越を圍む

1549年 基督教の傳來 (後奈良、天文18年7月)

ポルトガル人、イスパニヤ人等所謂南蛮人の往來が益々繁くなると共に西歐の文物が追々我国に入つて来た。

此年、ポルトガルの宣教師、イスパニヤ人、フランシス・ザビエル (Francisco Xavier) は鹿兒島に来て、始めて基督教を傳えた。此時傳つたのは基督教中のエスイタ派と云つて、これより九年前の西暦1540年にイスパニヤ人イグナチオ・ロヨラが新教に反抗して創設した極めて厳格な旧教の一派であつて、我国で之を天主教又は切支丹宗と呼んだ。

△ 日本にも 傳わる耶蘇の 靈の声……1549

愛の教を 日本に傳え 説くよザビエル 聖の声……1549

(附記)

キリスト教の弘通 此後天主教は九州、四国、中用から近畿、奥羽まで弘まり、中には織田信長は政略上その公布を許し、京都に南蛮堂を建て布教を助けた。又尤も熱心な信者 豊後の大友義鎮 肥前の大村純忠、有馬晴信等は天正十年邊に使者(伊東義賢、千石清方エ門)をローマ法王 グレゴリー八世の許に送った。これ 邦人渡欧の始である。

(年記)

全年 ③ 織田信秀死(年42) 信長家をつく ○家康駿府に領とふる
1551 (後奈良、天文20) ④ 陶晴賢、大内義隆を害す ⑤ 上杉憲政 越後に奔る
1553 (全 全 22) ⑥ 信玄、信濃を略す ⑦ 村上義清、謙信に依る

1555年 川中島、前の戦 (後奈良、天文24年7月)

越後の長尾景虎は雄壯で、機略に富み、俠氣があった。さきの上杉憲政が氏康に逐われて来り投じたので、これから屢々兵を関東に出して北条氏と争い、西方越中、能登を平げて京都に入ろうとした。

此頃甲斐に武田晴信(信玄)あり、国富み共強く、信濃の諏訪氏を滅し、木曾を降し、村上、小笠原諸氏の地を取った。村上義清遂に越後に走り謙信に頼ったので、謙信は此年七月、兵を信濃に出して善光寺に陣し、信玄は川中島に陣して救度激しい戦をしたが、十月に至ってもまだ勝敗は決まらなかった。此時の戦は川中島前役と

呼ばれ、何今天下の二英雄の鉢合せてあるから、すばらしい戦が行われた。

△ 二英雄の 名にこそ残れ 中の島 ……1555

上杉武田の 名乗りを浮べ ながれ寄る瀬の 中の島 ……1555

(附記)

川中島 後の戦 1561年(正親町、永録4年4月) 西軍又川中島に戦った。此時甲州軍は稍方其色が悪く、信玄の弟信繁も戦死したが、結局勝負はつかず物分れとふつた。俗書に『兩軍戦に倦み、各力せを出し相撲で勝負を附けた』と云うのは言外である。

1555年 嚴島の戦 (後奈良、天文24年10月)

(毛利氏興る)

周防の大内氏は、義興の子義隆の時、六国を領し、明と通じて貿易の利を占め、富み且強く、その城下山口は、当時困窮した公卿学者の来る者多く、京都の文化が茲に移されたかの趣があつて、小田原と共に東西繁華の中心であつたが、従つて義隆は驕奢に流れ、文藝に耽り、政緩み、1551年遂にその臣、陶晴賢に殺された。

大内氏の部將毛利元就は主の仇を報ぜんとして義兵を起し、此年晴賢の大軍を安藝の嚴島に誘い、其子隆元、吉川元春、小早川隆景等と共に、風雨に乗じ、奇計を以て前後から夾撃したので、晴賢逃る、術なく遂に自殺した。これから毛利氏の志望しつゝが、十余州を回復す

るに至った。

△ 何だこりゃ 中は^ス飽えたる ならずもの……1555
(附記)

嚴島山 波風荒れて 西に毛利の 名があがる……1555

(附記)

1. 元就の遺訓 元就臨終に、その子弟を呼び「一箭折れ易く 枚箭折れ難きを 説いて訓を垂れたと云うのは誤で、之は 支那の吐谷渾の阿柴の故事を元就に附会したのである。

2. 戦国の三義戦 嚴島の戦と、山崎の戦と川中島の戦とは 戦国の三義戦と云われて居る。之に小牧戦を加え3人もある。

1560年 桶狭間の戦 (正親町、永録3年5月)
(織田信長の興起)

織田氏はもと管領斯波氏の重臣で、世々尾張に住んで 居た。主家衰え、信秀の時、自立して勢張り、勤王の 志厚く、献金して御料を助けた。

その子信長 英邁で大志あり、当時今川氏は其領地、駿 遠、参に跨り勢大であつたが、此年信長、僅か二千の 兵を以て、今川義元の大軍四万を、尾張の桶狭間に破り、 義元を斬つて威名急に天下に顕れた。これ彼が、後年 天下を一統する事業の手初めであつた。

△ 信長に はかなく桶の 割られけり……1560

驕る今川 望みの風雨 不意に織田氏が 割つた桶……1560

(附記)

皇室の衰微

足利時代の末、應仁大乱後は、天下麻の如く乱れ、 皇室の御料所は豪族が横領して、御収入の道亦く、 内裏荒れ、大儀行われず、日々の供御にも事を欠かせ 給らばかり、皇室の衰微比時より甚しい事はあつた。 即ち後土御門、後柏原、後奈良、正親町、四天皇の御治 世が最も衰微に、殊に後奈良天皇の時御困窮甚しく 内裏の御垣崩れて、賢所の燈火は三条橋上から望 むを得、紫宸殿前には市人茶店を開いたと云う、而 かも斯る御困窮の中に天皇は下民を憐み、皇室の尊嚴を 維持し給うた。

(1) 後土御門天皇崩御の時、送葬の費用亦く、四十余日 後、近江の佐々木高頼の献金によって漸く之を行つた。

(2) 後柏原天皇の即位の大礼行はず、三条西宮隆の遊 説により廿二年の後、本願寺光兼(實3)の献金により行われた。

(3) 後奈良天皇亦、大内義隆、及び北条、朝倉諸氏の献金に より即位礼をあげ給うた。

(4) 正親町天皇は毛利元就の献金により即位式をあげ給うた。

斯る時、織田信長起つて 漸く天下平定し曙光見え、殆り て供御を増し、慶典を起し 朝威の復興を果し奉つた。 朝廷尚斯の如くであつたから、公卿の困窮は尤も 甚しく 各々 縁を求めて、奈良の寺院に、或は同防山 口の太内氏に頼つて之の保護を受けた。

幕府の衰微

應仁乱後將軍は有名無実、臣下の爲に自由に廃立さ れた。將軍義尚文武の才を以て幕府の勢を復せんと したが 早世し義統、義隆、義晴、義輝は 何れも臣下 に左右され 幕府の勢 愈々衰えた。

(年記)

1561 (正親町、永禄4) ⑩ 川中島後の戦

1565 (正 永禄8) ⑪ 松永久秀、義輝を弑す

1567 (正 永禄10) ⑫ 信長再、御料所復興の事を辨す

1568 (全 全 11) ③ 信長義昭を奉じて入京す。京都に南無寺を建つ
1570 (全 元龜 1) ④ 姉川の戦
1572 (全 全 3) ⑤ 三方ヶ原の戦

1573年 武田信玄死す (正親町、天正1年4月)

武田氏は源義家の弟義光に出、世々甲斐に居た。

信玄大志あり、又軍略に長じ、村上、諏訪、小笠原の族と戦い、又村上義清の事により謙信と川中島に戦い、互に勝敗あり。其間信濃を取り、西上野、碓氷等を略した。永禄十一年、駿河を破り、十二年北条氏康と戦い、勝敗決せず、元龜三年、徳川、織田の軍と三方ヶ原に戦って之を破り、是より徳川氏と対抗止む時なく、遂に天正元年三河に入り、野田城を囲み之を陥れたが、間もなく軍中に病歿した。年五十三。斯して彼は空しく雄心を抱いて歿し、京都に出て天下に号令する志は成りなかつたが、それは地の利を得なかつた事も大に關係して居る。

英雄只英雄の心を知る、信玄の死を聞いた時、謙信は食を止め、涙を流してその死を惜んだと云う。

△ 野の笛を 耳に信玄 死んで行く……1573

あわ水武田の 望もむだに 空し落ち行く 里の路……1573

(附記) 武田氏亡ぶ 信玄の死後、其子勝頼家を継いだ。これから武田氏振るふなくなつた。天正三年長篠役に家康、信長の軍に敗れ、更に天正十年その大軍に攻められて

勝頼は甲斐の天目山に走り、夫人及び子信頼と共にこゝで自殺し、武田氏遂に亡んだ。本能寺の変と同年。

1573年 足利氏亡ぶ (正親町、天正1年7月)

さきに正親町天皇は、遙かに信長の威名を聞召し、勅書を下されたので、信長感激し上京の準備をした。偶々足利義昭亦来つて助力を求めたので、永禄十一年(1568)信長は義昭を奉じて入京し、三好、松永の党を下して、義昭に將軍職をつがしめた。

義昭、初めは信長を徳としたが、後その声望を妬み、彼を除こうとしたので、信長怒り之を二条第に囲んだ。後一旦和したが、やがて義昭又兵をあげたので、信長は此年遂に之を河内に逐ひ放ち、こゝに足利將軍家亡んだ。實に義満が將軍となつてから十三代百八十年、尊氏が、征夷大將軍と僭稱してから十五代二百三十六年である。

△ 信長に 負けて足利 それつきり……1573

あしと云う名を 流してこゝに めでためてたの その終り……1573

(附記)

義昭の末路 河内に走つた義昭は、後各地を漂泊して終に毛利元就に依り、後京都に歸り、慶長二年大阪で死んだ。

(年記)

全年 ⑧ 浅井、朝倉二氏亡ぶ

1575 (正親町、天正3) ⑨ 長篠の戦

1576 (全 54) ⑨ 安土城成り、信長之に移る(始めて天主閣あり)
1577 (全 55) ⑩ 信長、秀吉に中国を略せしむ

1578年 上杉謙信死す(正親町、天正6年3月)

上杉氏はもと長尾氏と云って平氏の支族である。世々上杉氏に属して居たが、父為景の時自立して越後を領した。謙信幼名を猿松丸と云い年少から勇名があった。後景虎と名乗り、天文廿年上杉憲政が北条氏に逐われて来て、管領職と上杉の名字とを譲ってから上杉氏を称し、次で髪を剃って謙信と号し、後將軍義輝の諱を賜って輝虎と改めた。

謙信大志あり、さきに北条氏と争い、越中、能登を平げ又武田氏と兵を構え、遂に足利義昭及び本願寺の内應を得て上京しようとしたが、偶々病を以て、此年四十九才で世を去り雄圖は成らなかつた。併し仁義武勇の名は後の世に薫り、今米沢の上杉神社に祀られて居る。

△ 長尾氏が 冥途に急ぐ 弥生月...1578

腕をさすって 望を嘆き むざと散りゆく 雪の花!578

(附記)

謙信の義侠 武田氏が、北条氏康及び今川氏真に塩で苦められるのを謙信が援けたのは有名な話である。謙信死後は、養子景勝が家を嗣いだ。

(年記)

1582 武田氏亡ぶ(正親町、天正10年3月)

△ 名のみにて 世に勝頼の 甲斐もなし...1582

家を亡し 名のみは高い 山の勝頼 甲斐性なし...1582

全年 ⑤ 秀吉の高松城水攻め

1582年 本能寺の変(正親町、天正10年6月) (織田信長の死)

織田信長は尾張に起り、桶狭間の一戦に、今川義元を斬って威名をあげ、三河の徳川氏と結び、美濃の斎藤氏を亡して岐阜に移り、義昭を奉じて上京し、皇居を修理し御料を上って朝儀を興すなど勤王の志厚く、公卿を接けて京都の民政を整え、伊勢の北畠氏を服し、姉川の戦いに大勝して浮井、朝倉二氏を亡し、延暦寺を焼拂つて僧徒の横暴を挫き、伊勢長島の一向宗一揆を平げ、又石山の本願寺と和して大阪を攻めなど、轉戦皆功を奏して近畿全く平定した。

又東国の経略に当り、信玄と三方ヶ原に戦い敗れたが、彼死んで勝頼を長篠に破り、甲斐を役して武田氏を亡ぼした。

其頃上杉謙信既に死んで、此の方面の憂がなくなったので、愈々中国を定めようと、天正六年羽柴秀吉を遣ふ

して毛利氏を討たしめ、先づ尼子、宇喜多の諸將を滅し
 此年進んで備中の高松城を囲み、水攻にして苦しめた
 が、城主清水宗治よく防ぎ、毛利氏未だ敵を援けるに及
 び秀吉援兵を請うた。よって信長自ら出で援け人と京都
 に入り、本能寺に宿した。然るに其臣明智光秀急に反し
 不意に本能寺を襲ったので信長奮戦、遂に火を放って死
 んだ。時に信長年四十九才、長子信忠又二条城に自殺し
 た。斯うして信長が天下統一の大業半にして倒れたのは
 惜むべき事であった。

△ 信長の夢を流した京の水…1582

織田の偉業もなかばに朽ちて 夢を流した京の水…1582

(附記)

1. 明智光秀 光秀は美濃の人で、浪人して居たのを信長に知られ
 重用されたもので、才はあつたが大量はなかつた。事を以て
 信長を怨み之を仆して得意になつたが、山崎の戦に秀吉
 に破られ走つて小栗栖に行き土民に殺された。兵をあげて
 から死ぬまで「僅か十三日であつたから 三日天下」と云ふので居る。

2. 安土時代 1576年(天正4) 信長は結構壮麗、七重の天主閣
 をもつた安土城を近江に築いてこゝに移つてから、信長の
 時代を安土時代とも云う。

此城は西洋の築城法をも加えた、劃時代的の築造
 であつたが、天正10年6月兵火に罹つて焼失した。

(年記)

全年⑥ 山崎の戦の大村、大友、有馬三氏使をローマに遣す(野人渡り)
 の始

1583 (正親町、天正11) ① 賤ヶ岳の戦 ② 大阪城修築

1584 (全 全 12) ③ 小牧、長久手戦 ④ 大阪城成る

1585 (全 全 13) ⑤ 四国平定、秀吉従一位関白となる ⑥ 五
 奉行をおく

- 1586 (全 全 14) ⑦ 秀吉、家康と和す
- 1587 (後陽成、全 15) ⑧ 九州平定 ⑨ 秀吉聚樂第に移る
- 1588 (全 全 16) ⑩ 聚樂行幸
- 1589 (全 全 17) 秀吉領地を始む
- 1590 (全 全 18) ⑪ 小田原征伐 ⑫ 北条氏と和す

1590年 秀吉の天下一統 (後陽成、天正18年7月)

天正十年六月、秀吉本能寺の変を聞き、急に高松城を
 攻め落して毛利氏と和し、山崎の一戦に主の仇明智光秀
 を滅し、京都に入り信忠の子秀信を後嗣と定めた。然る
 に秀吉の声望を妬む織田氏の宿將、柴田勝家、瀧川一益
 等は信長の第三子信孝を奉じて兵をあげ、秀吉を除こう
 としたので、秀吉は信雄(信長の次子)と結び、天正十一年
 勝家の軍を賤ヶ岳に破り、越前に攻入り之を北莊(福井)
 に滅し、信孝自殺、一益は降つた。

依て秀吉は、もと本願寺光佐の拠つた石山城を修築し
 て天下第一の堅、大阪城を起し自ら此処に居り、堺、伏
 見の高家を移して一大都会を始めた。

程なく信雄は秀吉を除く為、徳川家康に援を求めたが
 其の軍は天正十二年、尾張小牧山に拠り、秀吉の別軍を
 長久手に破つた。秀吉は戦の不利を知つて家康と和した。

此後秀吉は紀伊の根来寺の僧徒を征服し、雑賀の一揆
 を平け、四国の長曾我部元親を降して南海を鎮め、越中

の佐々成政、越後の上杉景勝を服して北陸を定め、
天正十五年、島津義久を攻め降して九州を平げ、更に
天正十八年小田原城を攻め、約半年で之を陥れ、氏政
(氏康の子)を滅して関東を収めた。

此時、伊達政宗 其他奥羽の豪族も来り降り、忽に以東
乱れに乱れた日本国内、こゝに百二十余年で始めて一
統した。

△ 日本中 雷雨も止んで 渡る風…… 1590

喚めき交した 日本国土に 乱も収まり 渡る風…… 1590

(附記)

1. 秀吉の人相 秀吉の顔が猿に似て居たと云うのは全然
誤であるが、何故此の説が行われたかと云うと、(1)
生年丙申なりしこと、(2)母が日枝神社に祈って生れた故、
その使わぬ猿を思ったこと (3) 幼少時より敏捷で猿
ようだと云われた為の訛り傳等によるのである。故に三上
治博士は「秀吉が猿に似て居たとすれば、大抵の人は
皆猿に似て居る」と云われた。

2. 蒲生氏郷毒殺説 は全く無根で、彼は1595年病死したのだ。

3. 秀次の罪状 秀吉は1591年、関白職を養嗣秀次に譲つ
たが、名護屋在陣中、秀頼の生れたのを知り、石田三成を遣
し、大阪の淀君の安否を伺わせた。

三成は淀君に説いて、秀次を除かんとし共に秀吉に之
を譲じた、秀次又素行修まらず、遂に1595年死を見
易った。彼は文学を好み、學術を愛し、徳川時代
文学の興隆は彼に根すと云われて居るが、秀頼の生
れた事と、石田の讒構とにより、叛逆の汚名を蒙つて終つた。

{年記} 全年⑧家康江戸城に入るの狩野永徳死(年48)
1591(後陽成、天正19) 征韓令を下すの書をアフリッピン太守に共

1592年 秀吉の朝鮮遠征(後陽成、文禄1年1月)
(文禄の役)

国内茲に統一したので、秀吉は豫て懐いて居た海外征
服の志を果さうと、天正十九年原田孫七郎を遣つて、フ
ィリッピン¹の太守に入貢を促し又台湾にも書を送つた。
しかし彼の志は大明の征伐にあつたので、朝鮮に遠征の
案内を命じたが、朝鮮王李昫は明を恐れ従わなかつた
から、先ず朝鮮を伐とうと、天正十九年関白職を養子秀
次に譲り自ら太閤と称し、征韓令を下して肥前の名護屋
にその本營を設け、外征の準備をした。

翌文禄元年即ち此年諸將を部署し、宇喜多秀家を總大
將とし、小西行長等六將を第一先鋒、加藤清正等三將を
第二先鋒とし、總兵十三万、別に九鬼嘉隆、藤堂高虎を
以て水軍九千の將とし海陸より進んだ。其後水軍は屢々
敵將李舜臣に悩まされたが、陸軍は釜山に上陸し、進ん
で四月京城を陥れた。よつて国王出奔して救を明に請う
た。行長王を追うて平壤を取り、清正は咸鏡道に入つて
七月、二王子を虜にした。明主又兵を出して朝鮮を援け
たが、行長之を平壤に撃破つた。明軍大に恐れ沈惟敬
に和を乞わしめた。

△ 日本軍 燎原の火の 加羅を行く…… 1592

腕に覚えの日本の兵が 令に勇んで 加羅を行く……1592

(附記)

1. 争先論 文禄征韓に当り、小西行長と加藤清正が、先鋒を争ったと云うのは誤で、秀吉は詳かに先ず諸將を部署し、次第を規定したため争いは起らなかった。但し争いを争う事は当然であろう。

2. 碧蹄館の戦 明主は惟敬に和を乞わめながら、又ひそかに李如松に命じて十万の大軍を以て来り攻めて行長を破り、平壤を回復し、將に京城に入ろうとしたので文禄二年正月、小早川隆景奮戦之を碧蹄館に打破った。

(年記)

全年 ① 征韓諸將部署、再び聚楽算行幸 ④ 京城陥落
⑦ 朝鮮二王子を捕り、安定館の戦、大政所死す
⑧ 明人沈惟敬和を議す

1593 (後陽成、文禄2) ① 碧蹄館の戦 ⑤ 諸將釜山に還る
○ 明使来り和を乞う ⑩ 台湾に服従を促す

1595 (全 全 4) ② 蒲生氏郷病死(年40) ⑦ 高野山
に出家自殺

1596 (全 慶長1) ③ 明使来朝 ⑨ 和議破る

1597年 朝鮮再征 (後陽成、慶長2年1月)

(慶長の役)

文禄役に我軍が到る処に大勝利を得たので、明主大に恐れ、さきに沈惟敬に和を乞わしめ、文禄二年四月再び惟敬を以て行長について和を謀らしめた。

和約すべて七条、朝鮮の南半四道を日本領とす。

朝鮮の王子大臣を質として日本に送る等の条件で秀吉

和を許し、釜山に守將を留めて兵を引上げしめた。

斯くて慶長元年、明使楊方亨が惟敬と共に来朝し、六月伏見城に入り、秀吉之も大阪城(予定の伏見城は此年七月の地震に破壊した為)に引見したが、明の国書の趣は全く先約と違ひ、殊にその中に「再を封じて日本国王と為す」との語があつたので、秀吉大に怒り、直ちに明使を逐ひ、再征の命を下して部署を定め、あけて此年正月、再び征韓軍を出した。

▲ 二度の戦 令して秀吉 無念がり……1597

怒る秀吉 二度目の令に 雷を落して 眼をみはる……1597

(附記)

1. 戦況及び結果 此役小早川秀秋を總大將とし、毛利秀元、宇喜多秀家副大將、黒田孝高参謀、清正、行長を先鋒として兵約十三万再び朝鮮に攻入った。加藤清正、浅野幸長の蔚山の苦戦、島津義弘の泗川の勝利等あつたが、水軍は「しは」李麟臣に破られ、軍糧は振れなかつた。

斯くて年を越えて慶長三年八月秀吉歿し、その遺命により在外の軍は引上げる事にあつた。

② 朝鮮役は前後七年に亘り、その目的を達する事はできなかったが、併し之により室町時代の屈辱外交を一掃して、国威を海外に輝かし、国民に進取の氣象を促し、後世邦人の海外発展を助けた事は甚大である。

2. 明の国書を裂くとの説 文禄役の講和に当り、秀吉怒つて明の封冊を引裂き抛付けたと云われて居るのは誤で、此の封冊は現にそのまゝ石川家に所藏されて居る。

(年記)

全年 ① 呂宋入貢 ② 大泥国未貢、足利義昭死(年61)
③ 蔚山の戦

1598年 豊臣秀吉死す(後陽成、慶長3年8月)

秀吉は、尾張国中村の農家に、木下弥右衛門の子として生れ、初め松下嘉兵衛の奴となり、後去って信長に仕え、木下藤吉郎と云った。信長その才を愛して部將とし、後屢々戦功を立て、羽柴秀吉と改称し、山崎の帛合戦後益々勢を得、各地に轉戦して遂に天下を一統し、皇室を尊崇し、民治に意を用い、五奉行を置き、政務を分掌せしめ、後、五大老をその上に置いて大事を議せしめ、所謂天正文祿の檢地を為して田制の乱れを正し、石高を定め、又幣政を立て、大判、小判、丁銀を鑄、大いに土木を起して、大阪城、聚樂第を築き、京都に大佛を造営し、晩年桃山に伏見城を築いて移り住み、又北野に大茶の湯の会を開き、後陽成天皇に聚樂の行幸を乞うなど大いに人心を新にした。

官位また頻りに進んで、天正十三年には、正二位右大臣となり、次でその年七月関白となり、從一位に叙せられ、更に翌年には太政大臣に任ぜられ、豊臣の姓を賜った。斯して位人臣を極め、豪華比なく、晩年外征を企て先ず朝鮮を討って国威を輝かしたが、壯図半にして此年八月十八日山城の伏見城中で世を終った。年六十三。

その辞世の歌

露とおき 露と消えぬる我身かな

浪花のことは夢のまた夢

その一生を顧る時、六十余年の生涯の轉變は、夢としか思えなかったであろう。洛東阿弥陀峯に薨り、祠廟を建て、之を祀る。別格官幣豊国神社これである。

▲ 名にし負う 靈は阿弥陀の 夢に寝て……1598

今は榮華も 浪花の夢と 靈を阿弥陀の 山に寝る……1598

(附記)

1. 桃山時代の美術工藝 秀吉の時代はその豪華につれ美術工藝大に発達し、繪画、彫刻、建築、陶鈔、漆工等皆雄麗な作品を出したので、我が美術史上桃山時代と云う重要な一時期をなして居る。

画家には狩野永徳 全山楽が出、当時の建物は多く滅びたが、西本願寺の書院、唐門、飛雲閣、大徳寺の唐門等に今もその影を見せて居る。

2. 秀吉の紀筆 秀吉餘命幾何も無いつを知って、家康始め五大老え直書を殘した。書中五人の衆とあるは五大老で五人の物とあるは五奉行をさす。

秀より(頼)なりたち候やうに此かきつけのし中(書付の衆)を、しんたのみ(真頼)申候、なに事も此ほかはおもひのこす事なくは返々秀より事たのみ申候、五人のし中たのみ申候、いさい(委細)五人の物に申わたし候なごりあはく候
(毛利文書)

(年記)

全年 ⑧ 在韓諸將を召還す ⑩ 泗川の戦

1599(後陽成、慶長4) ① 秀頼大阪城に還る ② 前田利家死(年62)

1600(全 全 5) ④ 英人カダムス江戸に来る ⑤ 家康上杉景勝を討つ ⑥ 家康江戸城に入る、三成兵をおく ⑦ 伏見城陥る

1600年 関ヶ原の戦い (後陽成、慶長5年9月)

秀吉死に臨み、五大老五奉行に幼子秀頼のことを頼み、特に前田利家は、大阪城で秀頼を輔け、家康は伏見城で政を執ったが、利家の死後家康の威望独り盛となったので、石田三成、小西行長等心平でなく、密に毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝等と謀って之を除こうとした。

先ず此年、上杉景勝が会津に兵を挙げたので家康自ら東征したが、三成その虚に乗じ、輝元、秀家、義弘、行長等と共に兵を挙げ伏見城を攻めた。

城將鳥井元忠戦死して城陥り、三成等の軍は進んで真濃の大垣城に拠った。

家康、下野の小山でその報を得、庶長子秀康を留めて景勝に当らせ、自ら西上した。九月十五日早朝の濃霧は天下の運命を包んで冷な時、東西の両軍合せて凡そ十六万、関ヶ原に戦を開いた。只中仙道を上った秀忠の東軍は、真田昌幸に信濃に沮まれ、戦機を誤り戦に加わらなかった。かくて激戦半日勝敗容易に決せず、中頃西軍の勢大に振ったが、小早川秀秋等が東軍に内應したので、西軍遂に大敗し、三成以下斬流せられ、景勝もついで降った。

此役には、天下の諸侯大抵東西に分属し、豊臣、徳川西氏の興廢之によって決したから、世に之を天下分目の戦いと云う。

▲ 瓢箪を割って三成 渡しけり……1600

石田治部めが 瓢箪割って 割って三成 渡す関……1600

(附記)

関ヶ原戦の結果 戦後家康の眼中既に豊臣氏なく、擅に賞罰を行ひ、即ち三成、行長を斬り、秀家を流し、景勝、輝元以下の領地を割って有力の将士に分與し、秀頼には僅に、攝河、泉六十五万石を與え、諸大名の配置を改めて自家の便を計ったので、天下の政權全く家康に歸した。

(年記)

1601 (後陽成、慶長6) ①東海道五十三次を定め ②大小判金を造る ③板倉勝重京都所司代となる

1602 (全 全 7) ④方丈寺焼失

第四史期 (家康創業一大政奉還)

1603年 家康、征夷大將軍となる(後陽成、慶長8年2月)

徳川氏は新田氏から出たと云う。世々三河に住み、松平氏を称した。家康幼より今川氏に質となり、辛苦を嘗めたが、桶狭間の戦に今川義元が敗死してから三河に帰り、姓を徳川と改めた。これから信長と結んで今川、武田の地を併せ、小牧山の戦に名声をあげ、後秀吉に従い、北条氏滅亡後、関東二百五十万石に封ぜられ、江戸城に居り、努めて秀吉に服しながらも、陰に恩を諸大名に布いて勢力を養った。

秀吉没後、関ヶ原に勝って、天下の実権を握り、遂に此年、六十二才を以て征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開いた。室町幕府滅亡後凡そ世年後の事である。

斯くてこれから名実共に徳川の天下となった。

▲花も実も 我が徳川の 袖に落ち……1603

江戸のまん幕 覇をく庭に 花が散るに 征夷の名……1603

(附記)

その後の家康 家康は此後、慶長十二年七月、職を子秀忠に譲って駿府(静岡)に隠居し、尚自ら大事を裁決した。世に家康を大御所と云う。

元和元年豊臣氏を亡ぼし、公家諸法度、武家諸法度を制定發布して朝廷、公卿を抑え、諸侯を取締った。翌二年(1616)家康七十五才で死に、遺命により初め、

久能山(駿河)に葬ったが、やがて日光山に改葬し、家光の時華麗な社殿を営み、後朝廷から東照大権現の神号を賜った。

(年記)

1605 (後陽成、慶長10) ③朝鮮との交通再開 ④秀頼右大臣に、秀忠將軍に任ずの煙草を禁ず

1607 (全 全 12) ②お国の歌舞伎を許す ③角倉了以富士川舟路を開く ⑦家康駿府に老す

1609 (全 全 14) ①秀頼、京都大御所再建 ④島津家久琉球を征す

1609 オランダ人に通商を許す(後陽成、慶長14年7月)

(徳川初期 海外諸国との交通)

朝鮮との交通は秀吉の朝鮮征伐以来一時絶えたが、家康の時対馬の宗氏をして交渉せしめ、朝鮮之に應じ兩國の国交再び開けその後將軍の交代毎に慶賀の使をおこした。明とは其の表向の国交は成らなかつたが、彼の商人は長崎に来て貿易を営み、明滅び清になつても通商は続けられた。其頃明の遺臣朱舜水帰化し、鄭成功は日本の援を得て明の回復を計つたが我国應じなかつた。又明僧隱元は来朝して宇治に万福寺を建て禪宗の一派黄檗宗を傳えた。

西洋諸国とは、さきにポルトガル人、イスパニヤ人との交通があつたが、此頃新にオランダ、イギリスの西国人も東洋に来て貿易を開いた。偶々、慶長五年(1600)和蘭の商船が我国に漂着したので、家康はその乗組員なる蘭人

ヤン・ヨーステン (Jan Joosten) 英人ウイリヤム・アダムス (William Adams) を江戸に召して優遇し、海外の事情を問ひ、外交の顧問とした。

遂に此年七月和蘭の商船が平戸に来たので之に通商を許し、後慶長十八年英人にも亦之を許した。その後両国人は平戸に商館を立て、貿易を営んだが、蘭人は遂に英人を圧倒し、又葡西両国人をも凌いで我が国との商権を独占するに至った。

▲ はるばると 渡るオランダ 利権得て……1609

オランダ人等が 日の出の国に 渡り来たぞえ 利権得て……1609

(附記)

1. 琉球征伐 琉球はもと日本領であったが、足利時代の中頃から明に通じて久しく入貢せず。よって家康は、慶長十四年、島津家久をして之を伐たしめ、その地を島津氏に與えた。

2. 使節の派遣

(1) 家康はマニラなる呂宋の太守にも書を贈って交通を求め、又慶長十五年京都の商人田中勝助を西班牙領ノバ・イスパニヤ(今のメキシコ)に遣し、通商を開かしためたが不成立に終った。これ邦人の太平洋横断の始である。

(2) 伊達政宗大志あり、慶長十八年、その臣支倉常長を西洋に遣した。常長は此年九月、陸奥月浦を発し、太平洋を横リノバ・イスパニヤを至、イスパニヤ国都マドリッドに至り、国王に謁して書を渡し、ついで伊太利に入りローマ法王ポール五世に見えて書を呈し八年を至て帰朝した。

3. 海外渡航 ^{アマカ}阿瑪港(マカオ)、安南、シヤム、ジャバ、ルソン

印度洋南洋一帯は秀吉以後約五十年間、我々人の渡航地で、中には此の地に永住する者もあった。

4. 御朱印船 此の船は秀吉の時に始り、之は海外渡航の商船に朱印状を興えてその証としたもので、又奉書船とも云った。家康の時更に盛となり、角倉、末吉等商人のみならず、島津、鍋島、細川、青馬等の諸大名も亦貿易に従った。

5. 重なる貿易商人 京都の角倉了以、大坂の末吉孫左衛門、長崎の末次平藏、堺の納屋助左衛門、松阪の角屋七郎次郎、近江の西村太郎衛門等であった。

(年記)

全年の田中勝助をメキシコに遣す(邦人太平洋を渡る始)

1610 (後陽成、慶長15) 此年平戸を蘭人商港とす

1611 (全 全 16) ⑥ 加藤清正病死す(年50) ⑦ 切支丹宗を禁ず

1612 (全 全 17) ③ 京都天主教堂を毀ち布教嚴禁

1613 (全 全 18) ⑧ 英人に通商を許す

1613年 支倉常長ローマに使す(後陽成、慶長18年9月)

▲ 支倉が 海の彼方を さに行く……1613

今ぞ支倉 日の出の国に 海の彼方を さに行く……1613

1614 (後陽成、慶長19) ⑨ 京都大佛供養停止

1614年 方廣寺鐘銘事件(後水尾、慶長19年11月)

(大坂冬の陣)

関ヶ原の役に僅か八才であった奇頼、今漸く長じ、片桐且元等よく之を輔佐し、慶長十年に秀頼右大臣に任ぜられたが、既に政権は去って居るので、生母淀君之を憾とし、その回復を思い、東西の風雲險悪になった。

家康之を愛い、遂に孫女を秀頼に妻せ、表面無事を装うて内心頗る憚り、豊臣氏の財力を弱め、機を見て之を滅さんと、既に五年前秀頼に勧めて京都方広寺の大佛殿を再建せしめた。

此年、慶長十九年四月、工成つて供養の式を挙げようとした時、家康その鐘の銘に「国家安康」等の句あるを指して、已を呪うものとし、供養を停止し厳しく之を詰責した。依て片桐且元は、鐘銘の撰者、清韓を伴い、駿府に下り、百方陳謝して聴かれず、又大阪方からは関東に内通せりと疑われて、遂に陋々その邑茨木に退いた。

一葉既に落ちて天下の秋の大坂城中では、大野治長等が、関東のうちに怒る淀君、秀頼に勧めて十月遂に兵をあげしめた。

そこで十一月、家康、秀忠大軍を率いて大阪城を囲み、冬の陣の戦端はこゝに開かれるに至った。此時諸侯中、豊臣氏を助ける者は無かったが、真田幸村、後藤基次、木村重成等よく防いだので、家康は急に抜き難いのを思ひ、詐謀を以て之を陥れようと、十二月和を講じて大阪城の外郭を毀ち、總濠を埋めるを約して帰った。

之を大阪冬の役と云う。

▲ 滅び行く 命を鳴くか 寺の鐘……1614

江戸のたよりの ^{ハカ}果敢さ聞いて 怨み鳴くとの 寺の鐘……1614

(附記) 方広寺鐘銘の争点

「右僕射 源朝臣家康公」^所庶幾者、国家安康、四海施化、万歳傳芳、君臣豊楽子孫殷昌」

等々の句をわざと曲解したので

右僕射 源朝臣家康公は 僕、源朝臣家康公を射る。

国家安康は家康を切つて国を安んじ、君臣豊楽子孫殷昌は豊臣を君として子孫の殷昌を樂まんとの意だ"とこじついたのである。しかもこれが「儒臣林道春や、京都五山の僧徒等が、家康の意を迎えて、之を唱えたりた」から呆れる。云鬼の腐った奴は何時の世にもあるものだ。

1615年 大阪夏の陣 (後水尾、元和1年5月)

(豊臣氏七崩)

冬の陣の和睦条件を実行するに当り、東軍は總濠(外濠)を埋めて、更に二の丸の濠に及んだので、大阪城中その違約を責めたが、之は家康が初から謀った所なので、總濠は總体の濠の意味だと云って、彼是日を費し、遂に二の丸の濠をも埋めてしまった。

城中大に怒り、翌元和元年四月秀頼又兵をあげた。併し城濠既に埋められて、大阪亦昔の堅城でなく、家康父子来り攻めて、幸村、重成等戦死し城遂に陥り、秀頼母子自殺し、豊臣氏こゝに亡んだ。之を大阪夏の陣と云い、秀吉死後僅か十七年の事である。

▲ ほととぎす 哀川血に鳴く 夏の陣……1615

今は七ひの 日のほととぎす 哀川血に鳴く 夏の陣……1615

(附記)

1. 秀頼生存説 大阪役後秀頼は島津氏に迎えられ薩摩に行ったか、又肥後へ逃れたとか云々の皆虚説で信ずるに足らぬ。

2. 元和偃武 大阪役後天下全く徳川氏に服し、凡そ二百五十年間は 大兵を動かすことが無かつたから、世に之を元和偃武(元和のいくさあさま)と云う。

(年記)

全年⑤豊臣氏亡び片桐且元悶死(年60) ⑥家康銅製活字で群書治要等刊行 ⑦武家法度を領つ、豊国廟を廃す公家法度を定む

1616 (後水尾、元和2) ③家康太政大臣となる ④家康死(年75)

1617 (全 全 3) ③家康貞曾正一位、翌月日光山に改葬 ⑩狩野探幽幕府の画エゴから

1619 (全 全 5) ⑥福島正則除封 ⑨松原惺齋死(年59)

1620 (全 全 6) ⑥秀忠の女和子入内、閑院板倉重宗京都所司代となる。

1623年 家光征夷大將軍となる(後水尾、元和9年7月)

二代將軍秀忠は、慶長十年(1605)軍職を継ぎ、性謹直、政治に厲んだが、此年職を長子家光に譲った。

家光性剛毅にして果斷、よく諸大名を威服し、又松平信綱、土井利勝、阿部忠秋等の名臣之を輔けたので、幕府の基礎いよいよ固くなった。實に江戸幕府の組織はこの時完成されたと云つて良い。その代よく治つたので、

之を寛永の治と称える。

▲ 吹く風も 寛永の世は 静かなり……1623

家の光の ほまれを受けて 風も立てない 三代目……1623

(附記) 1. 江戸幕府の組織

(1) 中央の職制 大老が最上位に於て將軍を輔け、政務を總括したが、之は常置の職でなく、大抵老中が政務を總べ、若年寄は之を助け兼て旗本を取締つた。又大目付、目付を置いて老中以下旗本、諸將を監察させた。又三奉行(町、社寺、甚だ定)を置いて全国社寺及社寺領の人民を管し、幕府の財政を掌らせ、江戸の市政を總べさせた。

(2) 地方の職制 としては、重要な地を幕府の直轄地(天領)として奉行、郡代、代官をして之を治めしめた。又京都には所司代を置いて朝廷の事を司らせ、大阪、駿府には城代を置いた。

此外、後世のものではあるが、天和元年側用人(近習出頭衆)をおき、常に將軍に侍し、老中の上申を取つき、且つ之が可否を陳べる者を置いた。又承応二年始めて側衆をおき常に將軍に侍し、殿内に交番宿直し又將軍出行に従ひ、老中の上申を取つぐ役とした。

2. 諸大名の配置 之には家康大に意を用ひ、親藩、譜代、外様トゲマの諸大名を交えて、親疏大小互に制せしめ、且つ幕府の直轄地をその間にはさんだ。又家光の時参勤交代の制を立て、諸大名をして隔年に江戸に参候させ、且つ妻子を江戸に置かせた。

3. 対朝廷策 幕府は皇居を修め、御料を豊にし、朝儀を興すおと陽に皇室を尊び陰に抑えた。

(ア) 公家諸法度十ヶ条で朝廷及公卿拘束

(イ) 京都所司代を置いて朝廷監視

(ロ) 皇族一人をこゝろで日光山門の主とし万一に備えた

(ハ) 議奏、傳奏には幕府に親しい者を選任

(ニ) 家康は藤原氏の例に倣ひ、皇室の外戚とあつて威権を増さんとして、秀忠の女和子(東福門院)を後水尾天皇の女御(後に中宮)とした。

{年記}

- 1624 (後水尾、寛永1) ② 猿蓑勘三郎 始て芝居を興行
① 女御 和子中宮となる
- 1625 (全 全 2) ⑩ 天海に忍田 寛永寺を建てしむ
- 1626 (全 全 3) 高砂徳兵衛、東印度に貿易す
長崎奉行、水野守信等踏絵案出
- 1628 (全 全 5) 此頃 浜田弥兵衛、台湾で 蘭人をこらし
- 1629 (全 全 6) ⑪ 後水尾 讓位、明正受禪

1629 幕府踏絵を令す(後水尾、寛永6年)

▲ 踏絵して 帰水は暗し 霊の道……1629

命捨てよか 踏絵を踏もか こに迷いの 霊の肉……1629

- 1630 (明正、寛永7) 耶穌教、洋書輸入禁止
- 1632 (全 全 9) 標道春忍岡に聖堂を建つ ② 始て大目付をかく
- 1633 (全 全 10) ① 金地院崇傳死(年65) ③ 始て若年寄をかく
④ 再び耶穌教厳禁

1633年 山田長政死す(明正、寛永10年)

豊臣氏滅んで海内無事、功名富貴求め難くなったので
有為の士は多く奮って海外に赴き、ルソン、シヤム等
は日本町もできた。

山田長政は、仁左衛門と称し、駿河の人である。
元和の初、商船に乗り込んで台湾に渡り、更に暹羅に渡
った。偶々その国内は六昆国に攻められて乱れて居たの
で、長政は日本町の邦人を集めて、遂に六昆国を平け、
功によって王女を娶り、国政を掌るに至った。後姦臣に
忌まれ、此年遂に死んだ。(毒殺一説病死)

▲ 裸一貫 シヤムや六昆 従える……1633

運と力の ふんどし締めて シヤムを靡けし その巻……1633

(附記)

浜田弥兵衛 長崎の商人 浜田弥兵衛が台湾に渡り、暴慢
なオランダ人をこらし、大に我国人の意気を示したのも此頃の事
である。

(年記)

- 1634 (明正、寛永11) ④ 左甚五郎死す ⑤ 譜代大名の妻子を江戸
に置かしむ ⑥ 伊賀越後討の長崎に出島
を築く
- 1635 (全 全 12) ⑥ 参勤交代の制を定む ⑦ 耶穌教厳禁
⑧ 始て寺社奉行を置く

1636年 海外渡航を禁ず(明正、寛永13年5月)
(寛永の鎖国令)

▲ 船出をば 差とめるとの 布令を出し……1636

あいやならぬと 船出をとめた 鎖国日本の 布令が出す……1636

全年 ⑨ 伊達政宗死(年72) ⑩ 寛永銭を鑄る ⑪ 箱根関令の制定

1637年 島原の乱起る(明正、寛永14年10月)

天主教渡来後、信長は佛僧の横暴を悪んで、政略上そ
の布教を許し、後領土拡張の手段に利用せられる傾ある
を見て遂に布教を禁じ、秀吉も亦之を禁じた。

家康の時、新教徒の和蘭人が来て、天主教徒のポルト
ガル人と争い、ひそかに天主教徒の異志を告げたから、
彼は堅くその布教を禁じた。後愈々国家に害あるを見て
家光は断然、海外渡航、大船建造を禁じ、天主教徒を檢

察した。殊に肥前の島原は西教の尤も盛んな地であつたから領主有馬氏をやり、松倉重政を此地に封じた。重政は之を苛酷に抑えたが寛永七年歿し、重次家をついだ。

此年、西教の禁令に不平な天主教徒等が、天草四郎時貞を首領として、乱を肥後の天草に起した。時に島原の民は、城主松倉重次の苛政に苦んで之に應じ、十二月、共に肥前の原城に拠った。その徒男女三万七千人。幕府板倉重昌を遣して討たしめ又九州諸藩に命じて之を助けさせたが、城兵よく戦つて降らず、家光更に老中松平信綱を遣した。重昌発憤して翌年元旦奮い戦つて死んだ。

信綱即ち糧道を絶つて敵を苦め、二月城陥り時貞以下皆誅に服した。

▲ 原城に 三万あまり 謀反の徒……1637

天草四郎と 腹へり共が 島原のつとり 謀反する……1637

(附記) 鎖国 島原乱後幕府は益々天主教の禁を厳にし、宗門改めを行い、その疑わしい者は踏絵をかましめて、信否をたゞし、信徒を酷刑に処した。また厳しく外国人の渡来を禁じた。たゞ和蘭人は天主教に關係が無かつたから支那人と同じく長崎に来て貿易するを許され、ついで長崎の出島を以てオランダ人の居留地と定めた。

此後約二百年間は海外の交通殆ど絶え、日本は国を鎖して太平の眠を貪つた。

(年記)

1638 (明正寛永15) ② 島原の乱平ぐ ④ 耶穌教嚴禁 ⑩ 始て大老を置く

1639年 和蘭、支那の外貿易嚴禁 (明正寛永16年7月)

▲ 吹く^{アツカ}脛 制限貿易 令しけり……1639

美に懲り 吹いた^{アツカ}脛 支那とオランダ 例外に……1639

1641 (明正寛永18) ② 平戸の蘭人を長崎出島に遷す

1642 (全 全 19) ④ 譜代大名交替の制を定む

1643 (全 全 20) ④ 春日局死 ⑩ 天海僧正死 (年108)

1646 (後光明 正保3) ⑩ 鄭芝龍赦をもう許さず ⑫ 僧沢庵死

1648 (全 慶安1) ⑧ 中江若樹死 (年41) (年73)

1650 (全 全 3) ④ 町奴幡随院長兵衛殺さる

1651 (全 全 4) ④ 將軍家光死 (年48) 堀田正盛等殉死

1651年 由井正雪の乱 (後光明、慶安4年7月)

此年四月、將軍家光四十八才を以て死し、子家綱幼にして家を嗣いだすが、人心なお安からぬに業じ、浪人由井正雪、丸橋忠弥と謀り、江戸と駿府とに乱を起し、一挙幕府を倒そうとして事あらわぬ、忠弥は江戸に捕えられ、正雪は駿府に自殺した。

▲ 覇の権を ぬらう程由井 腕もなし……1651

恐れ気もなく 裸の由井が ぬらう幕府の 内かぶと……1651

(附記)

1. 後水尾天皇の寛恕 徳川氏は陽に朝廷を敬い、内実大に之を抑え、秀忠はその女東福門院(和子)を第百八代後水尾天皇の皇后とし、明正天皇生れ給いて皇室の外戚とあり威權を振り益々專横となつた。嘗て天皇御下の高僧に紫衣を賜つた時、家光は恣に之を取上げ、拒んだ人々を奥羽に流した。天皇大に怒り俄に御位を明正天皇(元八百六十年間絶えて居る女帝)に譲り給うた。此の尚幕府の専横がひそむこと言さまたぬ。

2. 後光明天皇の御英志 後光明天皇は御姉明正天皇について即位あり、御性貞厳格、幕府を抑え、皇威を張らんとせられた。曾て所司代の止むるを聴かず、後水尾上皇の御病を見届け給うた。又撃剣を好まれ、学を磨き、不屈の魂を以て幕府に当らせられたので、幕府は大に天皇を憚り奉ったが、不幸御在位僅か十二年、承応三年寿二十を以て痘の病で崩せられたるに皆哀惜しまつた。

3. 家綱の政治 家綱、四代将軍とあり、前代の老臣の外、名家保科正之の輔佐により殉死を禁じ、諸大名の人情を磨する等(寛政の二美事)の善政が多かった。後、大老酒井忠清(下馬将軍)権を恣にし、賄賂公行、幕府の綱紀弛み始めた。

4. 男伊達 徳川時代の初期、強を抑え弱を助け、義の爲には生命を軽んずる義侠の徒が出たことを男伊達と云い、旗本奴、町奴の二つがあり、旗本奴は旗本中の無頼の徒の団隊で市中を横行して人民を苦しめた。水野十郎左衛門之が棟梁であった。之に反抗して起ったのが町奴で、隣隣院長兵衛、唐犬権兵衛等は多少代表的人物である。

(年記)

1652(後光明、承応1) ④ 別本庄左衛門の陰謀 ⑩ 浪人改を令す
1653(全 全 2) ① 玉川上水工事の許す(左右門、清右門)
1654(全 全 3) ⑥ 玉川上水成る ⑧ 明僧隱元来る

1657年 明暦の大火(後西、明暦3年1月)

此年、正月十八日本郷丸山本妙寺から火起り、神田を全て壺岸島に燃え、翌日更に小石川鷹匠町から火を出した。折から風烈しく、遂に江戸城をも焼き、全市殆ど焦土と化し、焼死者数万を出した。幕府之を本所に埋葬し、その上に堂を建て、無縁寺と称し永く弔わしめた。即ち今の回向院である。

▲ 灰に泣く 涙凍れり 無縁塚……1657

回向する身に 骨かく袖に 涙凍るか 無縁塚……1657

(年記)

全年① 林道春(羅山)死(年76)

1657年 光圀、大日本史を編み始む(後西、明暦3年2月)

水戸の徳川光圀は、頼房の第三子、六歳の時將軍の命により家を嗣ぐ。幼にして英明、文武を兼ぬ、世人を導くには歴史によらざるべからずと思ひ、修史の志を起し、四方の学者を招き、広く書物を集めて、此年彰考館をおき、大日本史の撰述を始めた。光圀尊皇敬神の志厚く、国民稍もすれば、幕府の勢を見て皇室の尊嚴を知らぬ者あるを嘆き、力めて名分を正し、国体を明にした。

されば此の書は大いに尊王心を呼び醒し、後世維新の大業を起す一原動力となった。

▲ 春二月 日本史薫る 水戸の梅……1657

今は春の日 綻び初めた 日本歴史と 水戸の花……1657

(附記)

1. 大日本史の名 これは始めからの名でなく、元禄十年、本紀成り、享保五年養子 綱條之を幕府に南犬じ、大日本史と云った。文化七年修正して之を朝廷に南犬じ、後に至って追々刻成り、明治に至って始めて完成した。

2. 光圀の人物 光圀深く皇室を敬い、毎年正月一日礼服を着けて京都を拜し、又常に家臣を戒めて、我が主君は天子

なり、將軍を主君と思ひ誤る勿れと戒め、忠孝の道をすいぬ、
舞子貞女を賞し、常に儉約を守り、衣食を粗にし、元禄三年
致仕し、家を兄頼重の子に譲りて西山に隱居し、五年湊川
に楠公の石碑を建て、元禄十三年十二月年七十で"死んだ"。

(年記)

- 1658 (後西、万治1) ⑦ 鄭成功援をえう
- 1659 (全 全 2) 明人朱之瑜(舜水)等帰化す
- 1661 (全 寛文1) ⑧ 關所通行女争形の制定
- 1663 (全 全 3) ⑨ 殉死を禁ず ⑩ 野中兼山死
- 1665 (全 全 5) ⑪ 諸大名の入質を止め
- 1682 (靈元、天和2) ⑫ 池田光政死(年74) ⑬ 山崎闇斎死(年65)
- 1684 (全 貞享1) ⑭ 稲葉正休、大老堀田正俊を刺す
⑮ 安井兼哲新曆を献す
- 1685 (全 全 2) ⑯ 山鹿素行死(年64)
- 1686 (全 全 3) 此頃友神織の策進む

1687年 生類憐みの令を出す(東山、貞享4年1月) (綱吉の政治)

延宝八年、家綱歿して弟綱吉第五代將軍となり、酒井
忠清を斥けて、堀田正俊を大老とし、學問を奨め、朝儀
を興し、山陵を修理する等善政を施した。

正俊嚴にすぎ、人の怨を買ひ、稲葉正休に刺されてか
らは、政を柳沢吉保に委ね、自ら奢侈遊宴に耽つたので
幕政漸く紊れた。殊に生母桂昌院と共に厚く佛教に帰
依し、護持院、護国寺等を建立したが、その子早世し、
嗣子の無いのを憂え、僧隆光の勧めにより、此年「生類憐
みの令」を出し、その生れが成年に当るとして殊に犬を愛
し、終には江戸市中の犬を集めて、中野に犬小屋を作り

支配人を置いて、数万頭を養わせた。世に綱吉を犬公方
と云う。此の時代には犬はおろか、一羽の鳥を殺した
とて死刑になつた人間があり、井戸に落ちた猫を救わな
い者や、釣をした者が遠流せられるなど、上下その弊に
苦んだ。

▲ 人は犬 よりも下つた 御代の春……1687

犬の公方が 人食う布令に 世ではワンカ 皆恐れ……1687

(附記)

財政難と貨幣改鑄

此頃奢侈風をなし、又建築法会等多く、加うるに大火、
地震等の變災相つき、幕府の財政頗る困難に陥つた
ので、甚か定奉行 萩原重秀の議を用い、貨幣を改鑄し、
質を粗悪にして一時の急を救つたが、物價騰貴し、下民の
苦を増した。

(年記)

- 全年 ① 河村瑞軒に淀川疏通の功を賞す
- 1688 (東山、元禄1) ② 柳沢保明 側用人とある

1690年 聖堂を湯島台に移す(東山、元禄3年7月)

家康學問を奨励し、學校を建て、文庫を設け、古書を
集め、又木活字、銅活字を用いて書籍を刊行しなどして
教育の普及に力め、又屢々儒臣藤原惺窩を招いて書を講じ
その門人林羅山(道春)を儒官とし、其後代々林家は幕府
の學問を掌つた。寛永七年、家光は道春に忍岡の地及び
金を賜うて孔子の廟及び學舎を建てさせた。これが「聖堂」

の起りである。

此年、將軍綱吉は聖堂を湯島台に移し、その傍に忍ヶ岡の道春の私塾を移さしめて幕府の学校とした。之が後に昌平校（昌平坂学問所）と呼ばれたものである。翌年、道春の孫、信篤（鳳岡）を大学の頭に任じて教授せしめ、又自ら儒書を講じて諸大名に聴かしめた。

▲ 文月に 礼を聖の 座に説かん……1690

江戸の湯島に 文月晴れて 礼を聖の 堂に見る……1690

(附記)

1. 綱吉時代の教育 学問の隆盛につれ、各種の学校が起つた。官学昌平校の外、各藩に藩校があり、中には有名なものは、水戸の弘道館、名古屋の明倫堂、米沢の興讓館、会津の日新館、萩の明倫館、熊本の時習館、鹿児島造士館等である。又各地に私塾、寺小屋があった。私塾では伊孫仁齋の京都堀川学校、備後福山の管茶山の塾等である。

2. 綱吉の人物 綱吉は初は明君で、後は甚だ暗君にあり、その変化があまり甚しい。之につき入沢博士が医学上から見て彼は精神病患者だと云われたのは真であろう。

(年記)

1691 (東山、元禄4) ① 林信篤(鳳岡)東髪、大学頭とある(儒者結髪の始)
② 照沢蕃山死(年73)

1692 (全 全 5) ③ 光圀、楠公石碑を湊川に建つ

1693 (全 全 6) ④ 井原西鶴死(年52)

1694 (全 全 7) ⑤ 松尾芭蕉死(年51)

1695 (全 全 8) ⑥ 萩原宣秀、金貨改鑄 ⑦ 中野に犬を喜ぶ

1700 (全 全 13) ⑧ 河村瑞軒死(年83) ⑨ 徳川光圀死(年73)

1702年 赤穂義士の復讐(東山、元禄15年12月)

元禄十四年三月、勅使下向の時、播州赤穂の城主、浅野長矩は、吉良義央に辱められ、殿中で彼を傷け、死を賜り、次で国は没収された。依て家老大石良雄以下四十七士復讐を企て、辛苦の末、遂に此年十二月十四日吉良邸を襲い、義央を殺して主の仇を報じた。

偶々世は太平に馴れて武を思う者なく、只々上下華奢に流れた世の事とて、此拳は大いに世人の耳目を聳動した。

一同は国法を犯した罪により翌元禄十六年二月死を賜り、切腹して泉岳寺に葬られたが、世人之を称讃して、赤穂義士と呼び、香煙は今も常にその墓畔に薫って居る。

▲ 身を捨て、我が主の仇を 吉良の首……1702

朝日うらう 身は白雪に 笑う義士等の 氣も晴れて……1702

(附記)

1. 元禄風 江戸時代の始めには、勤儉尚武の風が盛であつたが、後太平久しうして士風衰え、殊に元禄の時代に至つて上下拳つて華奢に流れ、能楽、芝居、浄瑠璃等の遊樂に耽り、衣服、調度すべて華美となり、所謂元禄風を生じた。

2. 切腹の始 播磨風土記に「花浪神之妻淡海神巳が夫を追うて此処に到り遂に怒瞋、妾刀を以て腹を辟き、此沼に没す故に腹辟沼と号す」云々とあり。これ切腹の書に見えた始で、我国には余程古くからあつた事が判る。尚1156年保元の乱の附記を見よ。

(年記)

- 1704 (東山、宝永1) 初代市川團十郎死 (年71)
- 1705 (全 全 2) ③伊弉仁齋死 (年79) ④北村季吟死 (年82)
⑤細吉生母桂昌院死 (年79)
- 1707 (全 全 4) ④榎本其角死 (年47) ⑤服部嵐屋死 (年54)
⑥富士山噴火、宝永山出る
- 1709 (全 全 6) ①細吉死 (年64)、殺生解禁 ⑦西洋紀聞成る

1709年 新井白石用いらる (東山、宝永6年4月)

五代將軍細吉死後、その姪家宣甲府より入って將軍職をつぎ、旧師新井君美(白石)をあげ用いて政治の顧問とした。白石は幼より神童と云われ、曾て木下順庵に学んで見識高く、幕政に契ってからは、間部詮房と共に家宣を輔け、先ず生類憐みの令を廃し、翌年悪貨を改鑄し、円院宮家を建て、更にその翌年、朝鮮信使待遇法を改めるなど、大に治績を挙げた。

家宣在職四年にして死亡、家継立ちこれも亦四年にして歿し、次に吉宗が嗣ぐに及んで白石職を退き、専ら著述に従ったが、享保十年、年六十九で死んだ。

著書に西洋紀聞、藩翰譜、折焚く柴の記、采覽異言、讀史余論等がある。

- ▲ 身の誉 ^{ワタ} 渡瀬の石の 龍と化し……1709
- 荒い世波を 身に切抜けて 笑う誉を 蓮花咲く……1709

(附記)

西洋学の祖 白石の著書中采覽異言は万国地理誌の始で、読史余論は開化史として史家を啓蒙した。西洋紀聞は西洋の大勢を述べたもの。これ等の著述により後世白石は西洋学の祖と云われて居る。

(年記)

- 1710 (中御門、宝永7) ④金銀改鑄、萩原重秀を罰す ⑤皇弟秀宮直仁親王、閑院宮家を建つ
- 1711 (全 正徳1) ②朝鮮使節の待遇を改む ③室鳩巢幕府に召す
- 1713 (全 全 3) ③家継將軍とある ④銀貨改鑄の貝原益軒死 (年85)
- 1715 (全 全 5) ①長崎貿易の新令 を定む ②酒造高制限

1716年 吉宗將軍となる (中御門、享保1年7月)

將軍家継早世し、嗣がなかったので、此年家康の曾孫吉宗、紀伊家から入って第八代將軍となった。吉宗賢明室鳩巢、萩原祖徠、青木昆陽、大岡忠相等の人材を挙用し、政治に厲かたうで、元禄以来の弊習を一洗し、天下よく治った。世に之を享保の治と云い、吉宗を江戸幕府中興の主と云う。後、宝暦元年六月年六十八で死んだ。

- ▲ 蜜柑畑 芋やおからで 八代目……1716
- 芋やおからで 身はつづましく 家を興した 八代目……1716

(註) 吉宗は紀州出故 蜜柑畑と云う。芋は青木昆陽、おからは萩原祖徠。

(附記)

1. 吉宗の治績 (1)勤儉尚武の奨励 (2)人材登用が足高の制を立て (3)財政を整える為、貨幣を改鑄し参観交代の年限を短くし、諸大名に上代米を上らせて

府庫を賑し (4) 刑律を改善し 公事方定書を制定して、
裁判の標準にし 又目安箱を設け人民の投書を受けた。
(5) 実学を奨励し自ら天文、曆学を修め 六諭行義を訳
せしめ、医書を出版し、洋書輸入の禁を弛め、青木文
藏に蘭語を学ばしめ 又日本全図を作った。

(6) 産業奨励につとめ、水利 墾田を奨励し、砂糖の製
を回って輸入を防ぎ、青木文藏に命じて甘藷を植え
しめ、堂島に米商会所を起すなどして国産大に興った。

其他国民の健康に注意して病院を江戸に開いて貧民
を救療し、奥医者に民間の治療をさせ、又吹上苑内
の橋を飛鳥山、隅田堤、小金井等に移して士民の遊覽
に便した。

2. 各地の物産 相模、薩摩の煙草、上野下野の織物、
阿波の藍、紀伊の蜜柑、甲斐のブドウ、土佐の鯉節、
四国・中国の製塩等は皆 此頃より盛んにあつた。

3. 御三卿 もと將軍の子は分家して大名となる例であつたが、
吉宗これを改め、その子 宗武に田安、宗尹に一橋
の邸を興えた。
九代家重またその子 重好を清水 門内に住まめた。
世にこれ等を御三卿と云う。

(年記)

1717 (中御門、享保2) ② 大岡忠相、江戸町奉行とある

1720 (全 全5) キリスト教に關係のない洋書輸入を許す

1721 (全 全6) ⑦ 目安箱をおく ⑧ 小石川薬園を作る
六諭行義を訳す

1722 (全 全7) ⑨ 上米の制を設く ⑩ 施薬院をおく

1723 (全 全8) ⑪ 尾高の制を定む

1724 (全 全9) ⑫ 英一蝶死(年73) ⑬ 近松門左衛門死(年72)

1725 (全 全10) ⑭ 新井白石死(年69)

1727年 甘蔗栽培を試む(中御門、享保12年)

上古我国では甘味をつけるには「あまづら」の汁を用い
又柿の粉や熟柿や餡などを以てした。然るに古く印度に
発明されたと云う砂糖が我国に渡来したのは孝謙天皇の
天平勝宝五年僧鑑真来朝の時、黒砂糖を持って来たのが
その始だと云うがそれ以後數百年絶えた。足利時代の中
頃世が奢侈に流氷又貿易が開けたので砂糖も追々輸入さ
れたが、尚貴重品の品で高貴の者でなければ口にすることは
できなかった。元龜天正の頃外国との往來が繁くなつて
後も最初中流以下の者は、砂糖は薬用に限り求めるを許
され、飲食物に用いる等は夢にもなかつた。慶長年中砂
糖製法傳えられ、その後菓子製造盛となり、東山天皇
の正徳頃は毎年三百四五十万斤の輸入をする様になり追
々増加の傾があつた。依て後川吉宗大に之に注目し、我
が貨幣の外国に流出するを嘆き、遂に砂糖の輸入額を制
限し、又我国に栽培して輸入を減じようと苦心した。

此年甘蔗の苗を琉球から取寄せて、浜又は吹上園内に
植えさせ、躬ら培養を試み、又諸国に令じて大に之が
奨励を講じた。併し栽培、製法共に拙く家産を傾ける者
が多かつた。その頃の子守唄に「甘蔗作るなり薦^{ツモ}から

造れ甘蔗しもうたら薦かぶル」と。即ち甘蔗を作るには
乞食になる覚悟が要ると云ったのである。

▲ 珍らしく 辛い物だと 皆で嘗め……1727

植えて試む 味覚の甘を かむが吉宗 身のおごり……1727

(附記) 甘蔗の試作と奨励 中央アメリカ地方に原産した
甘蔗は、コロンブス によって イスパニヤに 傳えられ、
各地に 傳り、西人が 呂宋に 傳えて 始めて 東洋に入り、
又 葡人は 之を 馬束 諸島に 傳えた。

明の 万曆年中 呂宋から 支那に 傳り 慶長十三年頃、
沖繩人が 支那から 種を得たのが 我國に 傳った 始である。
次で 元禄十一年 琉球王が 種子島に 傳え 更に 薩摩に
傳えた。サツマから 長崎に 傳え 享保二十年 江戸に 傳った。

吉宗は 僅の 種子を 取寄せて 小石川 薬園や 吹上 苑に
試作したが よく 繁殖した。

後、青木文哉「甘蔗考」を 著して 之が 功用を 説き、
幕府 各地に 奨励して 全国に 広まり、其後 凶荒を 助けた 功
は 頗る 大である。

(年記)

1728 (中御門、享保13) ① 荻生徂徠死(年63) いろは火消をおく

1730 (全 全 15) ④ 上ヶ米停止、参観交替を復す
⑩ 田安家起る(宗武)

1735 (全 全 20) ⑧ 吹上苑内に 甘蔗を 試作す

1736 (梅町、元文 1) ⑦ 荷田春満死(年69) 伊藤東涯死(年67)

1740 (全 全 5) ⑪ 新嘗祭を復す、宗尹一橋家と起す

1744 (全 延享 1) ④ 心学者石田梅岩死(年60) ⑩ 甘蔗栽培
砂糖製造 〇此年昆陽蘭学を講ず
〇簡天儀成る

1745 (全 全 2) ④ 吉宗退職、⑩ 家重將軍とある

1751 (桃園、宝暦 1) ⑥ 吉宗死(年68) ⑧ 荷田春満死(年46)

⑨ 秋園南海死(年75) ⑫ 大岡忠相死(年75)

1758年 竹内式部捕えらる(桃園、宝暦8年6月)
(尊王論の勃興)

頼朝が幕府を開き政權武門に移ってから茲に數百年、
世人は將軍の尊さを知って皇室を忘れる者が多かつた。
徳川幕府が文教を奨励した結果、国史、古典の研究起り、
殊に徳川光圀の大日本史編纂、山崎闇斎の尊王説、又
の門人浅見訥斎の靖獻遺言等出で、大いに國民の自覚を
喚起し、我が国体の善美、皇室の尊嚴を知る者が多くな
つた。

越後の人竹内式部は、山崎派の学を修め、常に皇室の
衰えを慨いて居たが、後京都に出て大義名分を唱え、公
卿等多く就いて学んだ。關白、近衛内前の報により、

此年六月 幕府は式部を捕え、又之と關係ある公卿を
罰した。江戸の幕末尊王討幕の論盛んに起り、遂に
幕府は倒れるに至つたが、その第一声を放つたのは実
に式部であった。

▲ 真先に 名乗って式部 世を覚まし……1758

王政唱えて 先ず第一に 名乗る式部が 世をさます……1758

(附記) 尊王家の輩出 この後益々尊王家が出た、將軍家治
の時、山縣大式、藤井右門は江戸に在つて尊王論を唱え、
その言論過激であつたから遂に捕えられ、明和四年
(1767年) 死刑に処せられた。此時式部又流された。

將軍家齊の頃、本居宣長は書を著して国体の尊嚴を説き、平田篤胤は敬神愛国の説を立て、人心を鼓舞した。又寛政の頃、頼山陽は日本外史、日本政記等を著して尊王の意を寓し、幾多の志士を感懐せしめた。同じ頃、上野の高山彦九郎正之は四方に遊んで、尊王の大義を唱え、又下野の蒲生君平秀実は山陵の瘵れたのを懼き山陵志を著した。

(年記)

1759 (桃園、宝暦9) ⑤ 式部罰せらる ④ 平賀源内電気学を唱う
③ 室好、清水家を創む

1767年 山縣大弼、藤井右門死刑 (後播磨、明和4年8月)

▲ 冥途への二人の志士に 虫の声…1767

王政唱えて 身は梟さるた 二人悲しむ 虫の秋…1767

1769 (後播磨、明和6) ⑩ 賀茂真淵死(年73) 青木昆陽死(年72)

1771年 杉田玄白等体内書を訳す(後桃園、明和8年)

島原乱後、日本は堅く国を鎖して太平に眠り、国民は海外の事情など全く知らなかったが、唯蘭学者だけは臙ろげに蘭学と云う小さな窓から世界の光を眺めて居た。五代將軍の頃、西川如見が華夷通商考を著し、次で白石は西洋紀聞、采覧異言を著し、吉宗が洋書の禁を弛めてからは、青木文藏などが出て追々歐洲の學術研究も行われた。

家治の頃、前野良沢、杉田玄白等が出て刻苦勉強し、遂に和蘭の解剖書ターフル・アナトミヤ(解体新書)を

訳した。これは実に難事業で、一日に一語を解し得ぬ事もあり、数日かかって一句を訳す事もあり、約四年を全て、此年始めて出来上ったのであった。

これ実に我國に於る洋書翻訳出版の始であり又西洋医学の我國人に読まれた始である。

▲ 皆寄って ぬいず程読む アナトミヤ…1771

岩を貫く 皆の意志が 實を結んだ アナトミヤ…1771

(附記)

蘭学の進歩 此後、大槻玄沢が出て和蘭の文法書を著し、蘭学の研究進歩し、箱村三伯、宇田川玄隨、箕作阮甫、緒方洪庵等が出て益々進歩した。

(年記)

1772 (後桃園、安永1) ① 田沼意次老中となる

1777 (全 全 6) 林子平海国兵談を起稿す

1778 (全 全 7) ⑥ 露人、国後島に来る

1783 (光格、天明3) ⑦ 浅間山噴火、死者二万 ⑧ 谷口蘆村死

1784 (全 全 4) ③ 佐野政言、田沼意知と傷く (年67)

1787年 松平定信老中となる(光格、天明7年6月)

將軍吉宗の後、家重(九代)、家治(十代)相つのだが、田沼意次及其子意知専權、賄賂公に行われ、又天災頻りに起り、人民苦み幕府の失政を怨み意知は殺され、意次は退けられた。

次に家治に子が無かったので、家齊一橋家から入って宗家をつぎ第十一代將軍となった。家齊は此時まだ

十五歳であったから、田安宗武の子松平定信(白河城主)を挙げ、老中の首座として政に当らせた。

定信賢明博学、自ら勤儉尚武の範を示し、財政を整理、風俗を正し、民業を興し、学問を奨めたから、前代田沼父子の弊政は全く改って百事大に振った。世に之を寛政の治と云う。

これより前京都では、光格天皇が閑院宮家から入って位に即き給い英明に在したので、時の人「聖天子西に在し、賢臣東にあり」と云って悦びあった。偶々天明八年京都大火で皇居炎上、定信自ら造営に従った。

斯くて定信、在職七年、寛政五年七月職を辞して樂翁と称し文筆を樂んで餘生を送り、文政十二年五月七十二才で死んだ。

▲ ^{マコ}信もて 世を定めけり 松平……1787

威望背負て 誠をもつて 世をば定めた 松平……1787

(附記)

1. 寛政異学の禁 定信教育を奨励し、柴野栗山、尾藤三洲、古賀精里等 所謂 寛政三博士 を昌平校に聘し又学問教育は凡て朱子学によらしめ、他の学派を禁じた。

2. 文化文政の治 定信退職後、家斉自ら政をとって四十余年、世太平で、学問、藝術著しく発達し所謂文化文政の治を成した。併し此頃、家斉政に倦み、財政紊れ、上下太平にふれて奢侈逸樂に流れ、又尊王論の発達、外国の迫り来る兆ふと見えて幕府は漸く衰運に向った。

(年記)

1788(光格、天明8) ① 皇居火く ② 定信に造営を命ず

1789(全 寛政1) 此年、司馬江漢、油山及銅版術を始唱す

1790(全 全 2) ⑤ 定信異学を禁ず

1791(全 全 3) ④ 戦意ある外国船を撃つを令す

1792年 林子平罰せらる(光格、寛政4年5月)

西洋学が開けるにつれ、世界の大事も追々知れて、卓見の士のいせかに国の爲に憂うる者もできた。

仙台の人、林子平友直は早く海外の形勢を察し、大に患えて、海国兵談を著し「江戸日本橋下の水は、直ちに英京ロンドンのテムス河に通じて居る」と説いて、海防を嚴にすべきを唱え又さきに三国通覽を著したが、此年幕府は此等を以てみだりに世を騒がすものとし、その版木を毀ち、子平を禁錮した。彼は「先ず醒めたる者」の悲哀を胸に抱いて、時運の流れを静かに幽牢の中に見て居るの外はなかった。

親もなし 妻なし 子なし 版木なし

金もなければ 死にたくもなし

と歌い六無齋と号したのは此時の事である。

子平の先見誤らず、此年九月、露使ラックスマン我が漂民を送って根室に来て通商を乞うた。幕府漸く海防の必要をさとり慌て出した。子平世を憂えついに其翌年六月、五十六才で病歿した。

▲ 身一つを 牢屋に嘆く 籠の鳥……1792

親もなければ 身も細り 牢に子平が 籠の鳥……1792

(附記)

1. 子平の奇禍 之は全く備中国 岡田の士、古松軒 古川辰が 松平樂翁に讒誣した為めだと言ふ。

2. 寛政の三奇人 林子平、高山彦九郎、蒲生君平の三人を寛政の 三奇人と言ふ。(尚 1758年附記を見よ)

(年記)

全年①露使ラックスマン根室に来て通商を乞ふ。

1793 (光格、寛政5) ②定信、互相房の沿岸を巡視す ③高山彦九郎 自殺(年47) ④林子平死(年56) ⑤和学講談所起る、○定信老中をやむ

1798年 近藤守重蝦夷地巡視(光格、寛政10年)

▲ 守重が 露標を倒す 雪野原……1798

蝦夷を巡った 守重近松 露標倒して 雪野原……1798

1800 (光格、寛政12) ①伊能忠敬蝦夷地実測を始む

1801 (全 享和1) ①高田屋嘉兵衛、得撫島に木標を立つ

1801年 本居宣長死す(光格、享和1年9月)

尊王論に氣勢を添えたのは国学の発達である。元禄の頃、下河辺長流、僧契沖によって漸く盛となり、吉宗の頃、荷田春満が出、その門に加茂真淵が出、更にその門からは、加藤千蔭、村田春海等が出た。

宣長 鈴の屋と号し、伊勢松阪の人である。精力絶倫

諸書を博覧し、偏く古典を研究し、殊に古事記の注釈

に心血を注ぎ、三十五才に起稿して、六十九才に完成した古事記傳四十八巻は、真に空前の大著述である。其門に伴信友、平田篤胤などがある。宣長が曾て日本魂を詠んだ

しきしまの 大和心を人間はぐ

朝日に匂う 山さくら花

の歌は普く国民に愛誦されて居る。

此年七十二で歿し、山室山に葬られ、その英霊は永く 櫻花の下に眠って居る。

▲ 八千代まで 我が世に薫れ 教え草……1801

朝日影さす 山室山に かけて匂うは 教え草……1801

(年記)

1802 (光格、享和2) ②蝦夷奉行を置く(⑤函館奉行と改む)

1804 (全 文化1) ①露使レザノフ長崎に来て交易を求む
○頼山陽の日本外史稿成る

1806 (全 全3) ①露人樺太に寝す

1807年 露人北海に寇す(光格、文化4年4月)

▲ やつて来て 我に寇する、無茶なロシア……1807

4月なかばの 雪解を北の 我に寇する 無茶なロシア……1807

全年⑩函館奉行を松前奉行と改む ⑫柴野栗山死(年74)

江戸時代の文物 1. 学問

(1) 漢学

(ア) 家康秀忠時代に 藤原惺窩(常)、林羅山(道春、信勝)

(イ) 家光時代に 中江藤樹

(ウ) 綱吉時代、京都に伊藤仁斎、東涯父子、江戸に木下順庵、荻生徂徠あり、其他 熊沢蕃山、山崎闇斎、山鹿素行、貝原益軒

(エ) 吉宗の頃、室鳩巢、新井白石

(オ) 家斉の頃、柴野栗山、尾藤三洲、古賀精里(寛政三博士)

林述斎、中井竹山、頼山陽、大塩中斎

- (2) 国学 下河辺長流、僧契(中)之を模倣し、荷田春満、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤(国学四大人) 北村季吟、橋本巴一、加藤千蔭等の大家が輩出した。香川景樹は和歌に秀でた。
- (3) 文藝 近松門左衛門(業林子) 竹田出雲の戯曲、井原西鶴、瀧沢馬琴等の小説、松尾芭蕉、共謝蕪村の俳諧等尤有名である。
- (4) 其他 数学の関孝和、天文学の安井昇哲、農学の宮崎安貞、佐藤信淵等がある。

2. 美術工芸

(1) 絵画

- (ア) 元禄以前 = 狩野探幽(狩野派中興) 土佐光起(土佐派再興) 岩佐又兵衛(浮世絵創始) 住吉具慶(住吉派) 本阿弥光悦(蒔絵大家)
- (イ) 元禄時代 = 菱川師宣、宮川長春(浮世絵)。英一蝶、尾形光琳(画及蒔絵)
- (ウ) 元禄以後 = 四山應挙(写生画) 谷文晁、共謝蕪村(元明画) 池野大雅(文人画)。喜多川秋麿、葛飾北斎、歌川豊国(浮世絵大成) 司馬江漢(西洋画創始)

(2) 工芸

本阿弥光悦は蒔絵を興出し、光琳之を大成す
織物には友禅漆、透綾、陶磁器には七宝焼、九谷焼

3. 佛教

家康は、諸大寺に寺院諸法度を下してその権力を制限したが、又その興隆に力め、天海、崇徳等は重用され、政治にも参与した。又天海は日光山を開き、寛永寺を創めた。島原乱後、佛教は国教の如くなり、僧徒安邊に流氷降着した。家綱の時、明僧隱元来朝、禪宗の一派、黄檗宗を傳え、宇治に万福寺を開いた。

1808年 間宮林蔵の樺太探險(光格文化5年4月)

寛永の鎖国以来既に百五十年、海外の形勢著しく変り、西葡兩國漸く衰え、ついで和蘭も衰微し、英佛露等強盛となり、米國また独立して国力大に發展した。

此間、英國は印度を略し、南方から我國に向い、露國はシベリヤを従せカムチャツカ半島に達し、北方から日本に迫ろうとした。やがて林子平の警鐘となり、幕府漸く海防の必要を感ずり、松平定信をして房総の沿岸を巡視せしめ、又沿海の諸侯に命じ海防に力めしめ、伊能忠敬を遣つて蝦夷地及び海岸の測量をなし、地圖を作らしめた。幕府は殊に北江 警備の必要を認め屢々人をして蝦夷地を巡検せしめた。

寛政十年(1798) 近藤重載(守重)は擇捉島に渡り、露人の標柱を抜いて我が國標を立て、歸り、又高田屋嘉兵衛は命により、擇捉に漁場を開いた。遂に文化四年幕府は蝦夷地を直轄し松前奉行を置いて之を經營せしめた。

常陸の人間宮林蔵は、前に幕命により松前に行ったが此年ついに幕府に請ひ、單身深く不毛の地に入り樺太を探險し、東韃靼國等の辺境を過ぎ、黒龍江地方を探つて、翌年歸つた。それまで、樺太とシベリヤとは地続きであ

ると信ぜられて居たが、林蔵の探検により、海へである事が明かになったので、鞋靴海峡は又間宮海峡と呼ばれて居る。

▲ 日本男の 我が血めん 雪野原……1808

あわれ間宮が 止まれぬ意志に わけて踏むの 雪野原……1808

(年記)

全年 ⑧ 英船長崎に在り ⑨ 南部、津軽両藩蝦夷地分掌

1811 (光格、文化8) 幕府和蘭翻訳局を設く

1812 (全 全 9) ⑩ 露艦高田屋嘉兵衛を捕え去る

1813 (全 全 10) ⑪ 蒲生若年歿(年46)

1814年 沿海実測全図成る(光格、文化11年)

▲ 世に出てし 伊能の地図を 宝なる……1814

浮きつ苦労し 大和島根を 描く伊能の 図のためから……1814

1817 (仁孝、文化14) ⑫ 英船浦賀に来り

1821 (全 文政4) ⑬ 伊能忠敬歿(年77) ⑭ 塙保一之歿(年76)

1823 (全 全 6) ⑮ 太田南畝歿(年75) ⑯ 独人シーボルト長崎に来り

1825年 外船打拂の令下る(仁孝、文政8年2月)

文化元年、露使レザノフが長崎に来て通商を求めたが、幕府之に應じなかつたので、露人はこれから度々我が千島、樺太方面を侵した。

文化五年には、英船長崎に来て、薪水糧食を強奪して去り、為に奉行松平康英憤って自殺した。

文化八年、我兵は露の船長ゴロビンを虜にしたが、翌年、露船は高田屋嘉兵衛を捕えて去った。然るに翌々年

露人、嘉兵衛を送り函館に来、ゴロビンの返還を請うたので、幕府は謝罪書を取り之を許した。

斯く度々外人の暴行あって辺境追々騒しく、国内には攘夷の論が盛に起つたので、此年幕府は「外国船撃攘令」を発布して、外船が海岸に近づいたら皆々打拂うようにと命令した。

▲ やっつけろと 毛唐の船を 駈んで居……1825

打ってしまえと 世を戒めて 来るか来るかと いらむ船……1825

(附記)

1. 攘夷令の反対と緩和

当時蘭学者はや、外国の事情に通じて居たので、攘夷令を不可とする者が多かつた。中には渡辺崋山は「真機論」、高野長英は「夢物語」を著して此の令に反対し共に重刑に処せられた。

後、幕府も時勢に鑑み、十七年まで、天保十三年(1842年) 攘夷令を緩め、薪水を得んが為、来航した外船には之を許し、諭示に應じないもののみを砲撃する事に改めた之を天保の緩和令と云う。

2. 海防策

幕府は和蘭から軍艦銃石包を求め、長崎の人高島四郎、太夫秋帆をして、西洋兵学を研究させた。その弟子、伊豆葦山の代官、江川太郎左衛門坦庵は葦山に反射燈を築き、兵器鑄造に従ひ又江戸湾防備の策を建てた。諸侯中、水戸の徳川斉昭、薩摩の島津斉彬、佐賀の鍋島闕叟等も又大に海防につとめた。

(年記)

1827 (仁孝、文政10) 伊藤圭介、始て物理学を唱う

1829 (全 全 12) ⑰ 江戸大火 ⑱ 松平定信歿(年72)

⑲ 近藤重藏歿(年59)

1831 (全 天保2) ⑳ 大坂、河口を、築き天保山を築く ㉑ 松平一之歿(年72)